

---

# この、小さな勲章を

夢村

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この、小さな勲章を

### 【NZコード】

N5051C

### 【作者名】

夢村

### 【あらすじ】

二人の未熟なハンター、考えすぎて大胆な行動に出ることが苦手なアッシュと、行動はするが無鉄砲なリンは平凡ながらも目標を持ち、日々を過ごしていた。そんな一人はある日、飛竜リオレウスの目撃情報を耳にする。ちょっと変わった仲間達との交流。村へやってきた一人のハンター。強力なモンスターとの戦闘。様々な出来事を経て、二人は少しづつ成長していく。ゲーム『モンスター・ハンター』を基にした作品。

## プロローグ（前書き）

この小説の中には、やたらと説明臭い文章がありますが、著者が完璧に原作の内容を把握出来ていなかったため、間違いがある可能性がありますので、予めご了承ください。

後一応、無断転載や転用等は「遠慮下さい」。

## プロローグ

見渡す限り一面の草原。

太陽は真上にあって、暑い」とこの上ない。

そこに、2つの人影がある。

一人は体に重そうな鎧をつけたまま、この広い草原をただ、歩く。それだけの作業を延々続ける。

…ひたすら歩く

…歩く

「…疲れた。暑いし」

少女は本日5回目の台詞を吐いた。

「そういうつて。リン。もうちょっとで村に着くから」

一緒に歩いていた20代前半ほどの男が少女を諭す様に言ひへ。

「それも、聞き飽きた」

リンと呼ばれた16～18歳ほどの少女が不愉快そうに男を見る。

「やめとけ、んな」と言ひても、疲れるだけだぞ」

男は言うが、その言葉でリンが黙るとは期待していない。

「じゃあ、百歩譲つてそれはいいとして、よ。何でハンターと呼ばれる私の仕事がつーケルビの角と皮を持つて帰るだけなの?!!」

緑色のガウシカテーラーを揺らしながら、リンは早口でまくし立てる。

この一人はハンターと呼ばれる、依頼に応じて、危険な場所にある物の採取や、有害な生物モンスターを討伐する仕事（又は、有害でなくとも、生活に必要な材料となるモンスターの討伐等）を生業なりわいとしている。

今、二人は、ケルビという危険度の低い、一角の鹿の様なモンスターを討伐し終えて、帰る途中だった。

「しょうがないだろ。これも仕事なんだから」

男がいう。

「そもそも、あんたにもつと人徳つてもんがありや、こんな仕事してないのよ。

この役立たずのバカアッシュ」

リンが言うが、どうやら、とにかく口を動かしたいだけらしく、言葉にトゲトゲした感じはない。

「バカとかいうな、アッシュだ。バカリン」

「バカって言う方がバカなんですよ」

「ほう、そうか。んじゃあ、お前もバカだな」

「私は特別なの」

「ガキかつ」

二人がそんな言い合をしていると、遠くに村が見えてきた。

「やつた～！ やつとじ～飯～！」

リンが嬉しそうに言ひ。

「まずは報酬の受け取りと、余った素材の換金だな」

「えー、めんべ」

「それは俺がやるから、お前は先に帰つて、飯作つてもうつてな」

「なんか、あたしが料理下手みたいに聞こえるんですけど」

「えー…？ 上手いの？…」

「ぶつとぼすわよ」

「ハハハ、冗談だつて、でもお前も疲れてるだろうし、何よりペケの飯は旨いからな」

ペケというのは、アッシュの家で雇つているアイルーと呼ばれる人と話せる獣人族で、家事などもこなす便利なモンスターだ（そういうものとは無縁の、野性のアイルーもいるが）。

「それは納得。早く体も洗いたいしね」

二人が話している間に、目的地の村に着いた。

「じゃね、バカアッシュ」

「後でな、バカリソ」

言って、一人は別れた。

空は青く、風が心地良い。今日も、暑いながらも爽やかな日になる  
だろうな、と、アッシュは思った。

## 第1話 来訪者

アッシュが家に帰り着くと、すでに食事が用意されていた。

「あ、おかえり。どうだった？」

風呂に入った後らしく、リンは鎧を脱いで、普段着に着替えていた。

「ま、いつも通りだなあ」

「当然か。いつもと同じ事だしね。あーあ、つまんないなあ。せめてランポス狩りた~い」

「ああいうのは新人ハンターに人気だから、あんまりないんだよ」

彼らは、ハンターといつても、依頼主がいないのでは危険なモンスターと戦う意味が薄れる。

又、依頼主がいたとして、その依頼主が認めない限りは一つの依頼に対し1グループ（4人）までしか受けられないで、比較的平穏なこの村では、危険なモンスターの討伐は競争率が激しい。

そのため、多くのハンターは、アッシュ達の様に比較的危険でなく、需要の多いモンスターを狩ることになる。

しかし、中には依頼主を待たずに目的のモンスターを狩りに出る者もいる。が。

「依頼待たずモンスター狩りにいっちゃうとかさ」

「またお前は…。そういう事すると、周りから白眼で見られるんだって。しかもその狩ったモンスターが誰かのターゲットだったら、恨まれる可能性だってあるしな」

「つまんないなあ

と、いうわけで、何でも狩ってしまえばいいこというわけでもないのだ。

「まあまあ、お話しはそこまでにしておかないと、せっかくの料理が冷めますー」

奥の部屋のキッチンから、コックコート姿で雇いアイルーのペケが出てきた。額にバツ印の傷痕がある。だから、ペケ。

「おひ、いかん、そうだった。よし、飯だ

「いただきま～す

昼食をとった後、しばらく休憩をした。

アッシュは趣味の読書を。

ペケは、『血魔のキッチンの整理に大忙しだ

リンは、疲れたのか、椅子に座つたまま、うとうとしている。

暑い中、窓から涼しい風が流れて、アッシュのポポロングと呼ばれる形の黒髪が揺れる。なるほど、眠くもなる。

「眠になら、ベッドで寝ないと、風邪ひくぞ」

アッシュが言へ。この家には元々ベッドは一つしかなのだが、リンが転がり込んで来て以来、リンに占領されている。

「ん~、大丈夫。ていうか、今、寝たら夜になつて寝られなくなりそう」

「んじや、どつかいくか?」

「ええ」と

「集会所にでも。なんか面白いユースがあるかもしないだろ?帰りに飯の材料も買いにいくから、ペケも来るか?」

「はいですニヤ」

キッチンから顔を出して元気よく返事するペケと反して、リンは胡散臭げにアッシュを見る。

「ただ二ナさんに会いたいだけなんじやないの?」

と、リンが茶化すよつこ言へ。

二ナといつのは、集会所で受付嬢を勤めている女性のことで、美人で愛想もいいので、ハンター達に人気がある。

「一いちさん美人だもんね、アッシュも狙ってるんじゃないの？」

「いやいや、あの人は優しくて、美人で、料理も上手い。あんな女性、俺にはもつたいないよ」

アッシュが、本気とも冗談ともとれるような口振りで囁く。

「あら、それって、まるであたしのことをこいつてるみたいね」

リンがおどけて囁く。

「あ～、ウン、そうそう、ソレ」

アッシュが棒読みで返す。

「アッシュさん、ちよつとぶつぱしてもいいかしら？」

「…」、「じめんなさい」

リンが来て以来、こんな下らないやりとりが多くなった。

そんな二人を、キッチンの整理を終えたペケが一いやーと田を細めて見ていた。

「なによ、ペケ」

リンがその視線に気が付いて、ムッとしてペケを睨んだ。

「な、なんでもないですー」ヤー。」

「いつも日常も悪くないな、とアッシュは思った。

結局、することがなくなつて、集会所になにか面白い話がないか、見に行くことになった。

集会所は、ここのように小さな村にある、ハンター達が村の外部からの依頼を受けることが出来る場所だ。

他にも、各地のハンター達の活躍や、モンスターの目撃情報など、様々な情報を得ることができる。

集会所の中は、昼過ぎとあって、アッシュ達のように早い内に依頼を終えたハンター達が、祝杯をあげたり、次の依頼を吟味、あるいは、目的の依頼をひたすら待つ者達で溢れていた。

野蛮とも言われるハンターだけあって、筋骨隆々（きんこつりゅうりゅう）とした男が多い。

この中では、女性であるリンはもとより、アッシュも、彼らと比べると、少々華奢に見えてしまつ。

そんな二人とあって、奇異の目で見られる事もしばしばだが、二人には全く気にして様子がない。

「リン、なんかあつたか？」

先程から掲示板に貼られた様々な記事を、吟味するように真剣な顔で見ているリンに、アッシュが問いかけた。

「これ……」

リンは掲示板に貼られた記事を指した。

『伝説の古龍か！？ボボノ山に謎の影！！』

記事が書かれている紙には写真も貼られているが、その影とやらは小さく、竜の形をしているかさえも判然としない。

「うわあ、うつさんくさこなあ」

「確かに…」りや本物かどうか疑わしいな

古龍とは、遠い昔から存在するとされる竜族だが、今まで目撃情報は極めて少なかった。

最近になって、目撃情報があちこちで浮上しだしたが、どれもはつきりしない情報ばかりで、それらは、ハンター達の間では、あまり信じられていない。

「古龍って、飛竜より強いんだっけ

リンがアッシュに尋ねる。

世界には、竜と呼ばれるモンスターが数多く生息する。とはいって、一口には個々の違いを説明できないほどの種類が存在する。

例えば、ワシポスと呼ばれる青い小型の肉食竜は、鳥竜種と呼ばれている（ワシポスは飛ぶことはできないが）。

凶暴ではあるが、ほかの種類の竜と比べると、危険度は低いとされ

る。

しかし、大したことないとあなどり、ランポスの集団に囲まれ、力尽きて命を落とす新米ハンターも少なくない。

飛竜とは、ランポスを含める鳥竜とは比べ物にならないほど危険とされる竜族で、見事討伐した暁には、一人前のハンターと呼ばれるに相応しいとされる。

一方で、彼らに戦いを挑み、多くのハンターが散った事をうけ、飛竜と名の付くものを耳にした途端、表情を強ばらせるハンターも多い。

「噂では、な。なかには『戦つたことがないからやつ思つだけだ』って言つ奴もいるけどな」

「あー、それはあるかもね」

「ま、そう言つた本人が戦つた事があるのかも疑わしいけどな」

「なんたつて『伝説の古龍』だもんね、一度はお目にかかりたいな」

「運がよければいつか逢えるさ。俺は逢いたくないけど」

そこまでいふと、アッシュは受付の方へ移動した。

「どうも、二十九さん」

「あら、アッシュさん、もう仕事は済んだんですか？」

二ナと呼ばれた、ギルドから支給されている制服を着た女性が、アッシュュを笑顔で迎えた。

「ええ、まあ、俺にとつて、あんな依頼なんて楽勝ですよ。はつはつは」

「うわ、なにあれ、紳士ぶつてるつもつなのかしら?」

自分の時とは違うアッシュュの態度に気を悪くしたのか、リンはペケにひそひそと話しかけた

「聞いえたままでから、返答は控えますー!ヤ」

「へえ、ペケ君は、聞かれたらまじょうつな事を考えてたんだ」

リンが意地悪い笑みを浮かべる。

「二、ヤツー!、いや、これは、その…」

一人のそんな会話をよそに、アッシュュは二ナと会話を続けていく。

「とにかく二ナさん、最近、なんか面白い情報はありましたか?」

アッシュュがかなり話を脱線させた後に、ようやく本題に入った。

すると、さつきまで笑顔だった二ナの表情が少しひきつった。

「面白ことは言えませんけど、普段とは変わったものが一つ…」

「…くそ、どんな?」

アッシュが興味深そうに尋ねる。

「あ、確かにハイ、これです。これはまだ、依頼としてではなくて、伝言みたいなものなんですね。他の方にはまだ知らせていませんから、あまり大きな声は出さないでくださいね。」

二ナガガサゴンと依頼内容などが書かれた紙の入った棚の中から、一枚の紙を取り出して、アッシュに渡した。

「ん~と、日付は昨日か…」

「ええ、今日、届いたんですね」

この紙の日付が、届いた日付と近いことには、場所はそつぞくないはずだ。

アッシュはさすがにほつて変わって、真剣な顔で紙の内容を確認した。

「…………！」

アッシュは、しばらく紙に目を通していたが、その内容を理解した途端に、金縛りにあつたみたいに、硬直した。

「なんか面白いことでも書いてあつたの？」

暇をもてあましたリンは、アッシュがもつてある紙を横から覗いた。  
そして……。

「……リオレウス……」

「…?…リ、リンさんつ…」

「あ、おこつ…」

リンは、内容を理解するとともに、集会所内のハンターに聞こえるには充分な声で、言った。

その瞬間、さつきまで笑顔で祝杯をあげていた者も、依頼内容が書かれた紙をまじまじと見つめていた者も、皆、一様に静まり、声の主であるリンに注目した。

皆、リンの声の大きさに驚いたのではなく、驚いたのは、リンの発した名前。

飛竜『リオレウス』!!

大型の鳥竜より数段危険とされる飛竜のなかでも、もっとも多くのハンターの中には、仲間をリオレウスに殺された者も多く、場所によつては、その名前を口にすることすら、タブーとされていく。

ハンターの中には、挑み、散つたとされる飛竜だ。

「あ、皆さんつ、これは敢えてただの目撃情報で、現在、王国騎士団が調査中でして、…ええと、もしかしたら、見間違い…かも…」

二ナが慌てて説明するが、その言葉で収まるような空氣ではない。

誰もが沈黙し、中には、よほどの事があったのか、頭を抱えてガタ

ガタと震える者までいた。

そんな中、一人の男が、座っていた椅子を倒すよう『勢いよく立ち上がつた。

二人は、どちらも体つきがよく、正に野蛮とされるハンターの象徴とも思えた。

「貴様ら、それでもハンターか？！リオレウスの名前を聞いただけで恐れおののくくらいなら、ハンターなど辞めるといい！」

金髪と黒髪の一人の男の内、黒髪の男の方が言つた。

二ナは、今の発言で『最悪の空氣になるのでは』と、心配した、が

…。

「全く、情けねえ！リオレウスなんて大物、滅多にお目にかかるねえぜ！てめえらもハンターなら、ビビってねえで喜ぶべきだろ？が

！」

と、黒髪の男に続けて、金髪の男が言つた。

すると、今まで黙っていた男達が、口々に吼えだした。

「へつ！恐れる？リオレウスに？ふざける！願つてもない大物じやねえか！」

「おお、ねえちゃん！場所はど？」だ？…」

「へつ、これでやつと、アイツの敵を討つことが出来るぜー。」

結局、集会所の中は、リンがリオレウスの名前を口にする前よりも騒がしくなった。

「う、ハンターとは、こういうものだ。相手が強大であればあるほど、熱氣を帯びる。例えそれが、完全に本心ではないとしても。

ここに恐れていっては、他のハンター達から一生、チキンハンターとバカにされ続けることになるだろう。」

「嘘やん、落ち着いて下さい！ ですから、まだ調査中でして……！」

二ナが皆を宥めるが、それで静まる者はいない。

「ふう、なんとか最悪の空気にならずに済んだな。……おい、リン！」

アッシュは、『なんで、あんな大きな声を出したんだ』とリンを咎めようとしたが、リンはリオレウスの名前を睨み、固まつたままだつた。

「……リン？」

アッシュは今までに、リンのこんな様子を見たことがなかったので、少しの間、困惑した。

（やつぱり、リンはリオレウスに家族を……？）

アッシュはリンの過去を知らない。また、リンはアッシュの過去を知らない。

アッシュは、自分達の付き合いの短さを改めて実感した。

「どうした? セーのお嬢さん… セー、大きな声を出した張本人みたいだが…」

その声にアッシュが振り返ると、先程、声を張り上げた一人だった。

元々長身ではあつたが、近くで見ると、更にデカく感じる。

一人とも髪は短い。黒髪で褐色の肌をした男が、前に立つて、金髪でどちらかといふと色の白い男がその後ろにたつている。

「ああ、あんたらか、さつきはすまない、助かった。」<sup>つい</sup>、リオレウスの目撃情報なんて、実際に見るの初めてだから、狼狽しちまつて…」

アッシュは、その場しのぎとはいえ、知りもしないことをべらべらと喋る事に、罪悪感を憶えた。

「あれは、俺の本心を言つたまでだ…。ところで… セーのお嬢さんも、ハンターなのか? みたところ… そつは見えんが…」

アッシュとリンは、風呂に入った後から鎧を脱いでいたので、普段から鍛えていて、肌の焼けたアッシュはともかく、色白で華奢にも見えるリンは、端から見ると、ハンターには見えない。

リンは、一瞬ハッとしたあと、黒髪の男を睨み付けた。

「なに? あたしみたいなのがハンターじゃ不満?」

「い、いや、そういうつもりで…言つたわけじゃないんだ…」

黒髪の男は、先程、声を張り上げた時とは、明らかに雰囲気が違つた。

黒髪の男だけでなく、リンの様子も明らかに普段とは違つた。

「あれな、ガンドウェルは女と話すのに慣れてないから、ああなつちまうんだ」

「ああ、それで…」

アッシュが一人で納得するのをよそに、リンは、まだガンドウェルと呼ばれた黒髪の男を睨んでいた。

「まあ、なんだ…君の様な女性が…リオレウスなんかと戦おうなんて、思わない方が…その、良いと…」

ガンドウェルは別の国の言葉を話すように、片言で喋つた。顔の色が心なしか赤くなつて、いる様に見えなくもない。

が、この状況を見ている者からすると、その言葉は明らかに『火に油を注ぐようなもの』だった。

「『女性が』？！女だったら駄目だつていうの！？」

「いや、違う、やうじやなくてだな…」

ガンドウェルは、自分の言葉の真意が伝わらずに、もどかしそうだつた。

「なあ、あんた、わかるか? ガンドウエルの奴、あれでも口説いてるつもりなんだぜ」

金髪の男は、『』に体格をした割に、軽快な口調で言った。

「は? …あいつを? … とこいつか…あれで? …いやいや、『冗談だろ』

「こやこや、まじまじ」

金髪の男は『』と笑つてゐるが、アッシュコはいまいち男の話を信じられずにガンドウエルをまじまじと見つめた。

「とにかく、リオレウスは俺達が討伐する!だから、君はリオレスのことさせられる!」

ガンドウエルが半ばやけ氣味に言い放つ。

「…あんな事言つてるぞ」

アッシュコが金髪の男に意見を求めた。

「ああ、要約すると、『あなたみたいな素敵な女性がリオレウスと戦うなんてバカな事を考えちゃいけない。ここは俺に任せろ』ってどこのかな?」

「こや、やつじやなくて…」

金髪の男と話が噛み合わないのと、彼が要約した台詞の胡散臭さに、アッシュコは疲労を覚えてきた。

「ああ、元々、オレ達はリオレウスを討伐するつもりだつたからな、問題ない」

「あのぉ、といふか、まだいるつて決まつたわけでは……」

二ナが受付のカウンターから指と顔を半分だけ出して言つた。

「なによ、それ……！バカにして！あんたみたいなのが、自分の腕を過信して、痛い目みるのよ！」

リンがガンドウェルを睨み付けながら言つた。

今や、リンとガンド・ウェルの周りは、興味深そうに事の成り行きを見守る（あるいは煽る）者達で溢れていた。

「リン！いい加減に……」

言い掛けで、アッシュはリンが涙を流していることに気付いた。

「『女だから…戦っちゃいけない』…なんて…言わないでよ…。あたし…もう子供じゃ…ないん…だから…っ…」

集会所の中に再び沈黙が訪れた。

リンは、頬を真っ赤にしたまま、集会所を走り去つた。

「あつ、おいつ？—リン！—…ペケ！追つてくれ！」

「…？！」了解です！「ヤー！」

先程まで所在なげにおろおろしていたペケが、リンの後を追つて行つた。

「すまない、あいつ、なんか取り乱しちまつて…」

アッシュは、ガンドウェルに詫びたが、今度は適当な理由をぐつちあげることが出来なかつた。

「…いや…あれば、俺が悪かつた

「また振られたな、ガンドウェル」

「？！そ、そうなのか？！」

「いや、そこは気付けよ

アッシュは一人のやりとりを眺めていたが、すぐにでもリンを追いかけたい衝動に駆られていた。

「悪かつたな、オレの相棒がデリカシーなくて」

「いや、いいんだ」

「オレはパグフイ。もうわかつてゐだらうが、こいつがガンドウェル。オレ達は最近この村に着いたばかりだが、ここにはしばりくるつもりだ。よろしくな」

パグフイと名乗った金髪の男が悠長に自己紹介するのを苛立ちながら

ら聞き、自分も社交辞令的な言葉で返す。

「アッシュだ。」には「年以上住んでいる。わからないことがあるつたら、何でも聞いてくれ」

「…よろしく頼む」

二人と握手を交わすと、アッシュは「…でもたつてもいられなくなり。

「すまない。それじゃっ…」

とだけ言つと、全速力で集会所を飛び出した。

「…ガンドウェル、今、振られて良かつたな」

「…？」

「リン…ペケ…」

「アッシュ様、じつちです…ヤー」

アッシュがペケに駆け寄る。

「リンは？…」

「あそこです…ヤー」

リンは、農場にある桟橋の上に立ち、魚を見るでもなく、うつむこ

ていた。

「……」

アッシュは、右手を差し出し、リンの名前を呼び、肩を叩いたりしたが、心中で、葛藤する。

(俺に彼女の何がわかる?…)

(リンがリオレスの名前を見ただけで、あんなに動搖していたのに、俺はその理由を知らない)

(リンの涙の本当の理由を、俺は知らない)

(そうだ、俺はリンの過去を知らない。それは、リンが聞かれたがらないし、俺自身もまた、自分の過去を聞かれたくないからだ)

アッシュはリンと出会い、今まで自然にしてきたことを、今は非常に後悔した。

(彼女にかける言葉が見つからない…)

結局、アッシュは、声をかけられないまま、桟橋に佇むリンを眺めていた。

しばらくすると、今までつむじていたリンが急に振り返り、笑顔で、言つた。

「アッシュ、退屈。どうかっこつ」

「……」

急な出来事にアッシュは一瞬、戸惑つたが、すぐに返事をした。

「……ああ、どこがいい？」

「楽しいこと」

「また短絡的な」

「いいでしょ、アッシュの方がこの辺の事、詳しいんだから」

「そうだな、じゃ、いくか。どうかに」

「……あつ、帰りに晩御飯の材料買つのを忘れちや駄目ですーイヤー！」

彼女の優しさは、今のアッシュにとって、胸が締め付けられるほど痛かったが、今、自分に出来る事を考えると、笑顔でいる事くらいしか出来なかつた。

また、アッシュは集会所での事を振り返り、『いつか、リンと互いの過去を語り合つ日が来るだろつか』と、一人、考えていた。

太陽は燦然さんぜんと輝き、虫達の鳴き声が耳障りだ。今が一番暑い時間だが、これから少しずつ涼しくなつてくるだろ？

## 第2話 過去と未来

周りが真っ白な空間、何も見あたらない。何も聴こえない。

そこに、一人の男だけがいる。

しかし、男には、なんだか自分の存在が不確かなもので、この辺りに漂う死氣と同化したのではないかと思える。

そこで、『ああ、これは夢なんだな』と、男は思った。

「よつ」

「・・・・」

急に声をかけられ、男が振り向くと、目の前に、一人の男が立っていた。

「謫居はじつだ。アッシュ」

男が言つと、アッシュと呼ばれた男は、一瞬たじろいだ。

それもそのハズだ。目の前に立っている男は、もう、死んだのだから。

「じつって・・・まだまだや。『んなんじや、お前達の敵かたきを討つのはまだ先になりそうだ』

「俺達の敵、か。もう、そんなこと、気にしなくてもいいんだぞ」

男はいうが、アッシュはその言葉に納得しない。

「いや、そういうわけにはいかない。俺は、あの時……何も出来なかつた。そのために、お前やフイエルナを見殺しにした。俺は……せめて、俺は、お前達の敵を討たなければ、生きて行けない」

「……それは、誰の為だ？俺達のためか？それとも……お前自身のためか？」

男は問う。

「……多分、自分のためだ」

「……そ、うか。……お前が自分で決めたなら、俺に文句をいふ筋合はないな。……でも、これだけはいつ。お前の人生はお前のものだ。俺達みたいな過去の亡靈にいつまでも振り回されるな」

「……ああ。ありがとう」

「……さて、俺はそろそろ消えるとするかな」

男は言つと、身を翻した。

「も、も、いくのか？」

「ああ、元々、俺はお前に会つていいような立場じゃないしな」

「こ、まあ、立場を気にするのか？お前が」

「死んで、俺も丸くなつたつてことだな

「ははっ、手遅れだな」

「ああ・・・違いない」

一人が、ふつと笑う。周囲にはなにもなかつたが、不思議と辺りに響くことはなかつた。

「今度こそお別れだ。じゃあな」

「ああ・・・」

アッシュは、『またな』と言いかけたが、やめた。

田が覚めると、アッシュは自分が涙を流していることに気がついた。

(変な夢を見た上に、泣いてたのか。我ながら情け無いな・・・)

リンがこの家に来てベッドが占領された後に、仕方なく買った安物のソファーから身を起こすと、急に、リンに見られていなかつたか気になり、ベッドを見た。

ベッドの上には、普段の態度に似合わず寝相の良いリンがすやすやと寝息を立てていた。

ペケは、もう起きていたが、キッチンで朝食の準備をしていた。

料理中のペケは、話しかけても反応しないくらいなので、見られたということはないだろ？。

アッシュが時計を見ると、起きるには少し時間は早かつたが、外の空気が吸いたかったので、外を散歩することにした。

「ペケ、ちょっと散歩にこってへる」

「はいですー」ヤ

ペケの返事を聞くと、軽装で外に出た。が、出てから、ペケが料理中なのに返事をしたこと気にづいた。

「ペケ・・・」

リンは、ベッドから身を起し、キッキンに向けて、言つた。

「ーーーー、リン様、起きてたんですかー」ヤ

料理の手を止めて、じつとしていたペケは、不意をつかれてはつと  
した。

「どつかのバカが、体を丸くしてうなされてたら、あたしでも起き  
るわよ」

「・・・」

しばらく、一人は黙つたままだった。

「ねえ、ペケ。アッシュは……」

「……」

「……いいわ、ペケに聞くことじやないわね」

「……申し訳ありません」

ペケがうな垂れてリンに謝った。

「でも、これだけは教えて。ペケは、アッシュの過去を知ってるの？」

問われて、ペケは少し考えてから、言った。

「……実際には、聞かされた程度で、あまり知ら——ヤいのですが。  
・」

「そつか……。ありがと」

言つた後で、ペケは自分の発言が軽率だつたことに気づき、後悔した。

(あたしなんて……聞かされてもないわよ……)

「あらあ、おはよつ、アッシュちゃん」

「あ、ビーム、ジョンさん」

アッシュが散歩をしていると、道具屋の支度をしていた、『ひょう  
ヒョウ』と変わった性別の、体格の良い大男が話しかけてきた。

「んもう、ジョンじゃなくて、ママーって呼んで」

「いや、あの……」これはお姫様なことですよ

ジョンは、昼は道具屋で働いているが、夜は酒場の主人をやって  
いる働き者だ。

噂では、何年か前まではハンターをやっていたらしい。

ちなみに、酒場で悪酔いし、ジョンに『このオカマ野郎』などと  
口走ったハンターが、全治一ヶ月の大怪我をしたといつ噂もある、  
恐ろしいオカマ……人だ。

「やうじつとは気にしないでいいのよお

「は、はあ……」

アッシュがジョンの独特的雰囲気におかれていると、ジョンは  
急に表情を変えて話し出した。

「あつ、さうだ、アッシュちゃん。良い話があるんだけど……」

「良い話?」

「そう、良い話」

ジェインは、この村の中では特に顔が広いので、色々な情報を持っている。

そして、たまにそいつた情報のなかから、ハンター達にとつて有益な情報を販ることもしている。

報酬の高い、危険なモンスターの討伐依頼は競争率が高い。しかし、先にその情報を得ることが出来れば、その依頼を受けられる確率が上がる。

「・・・へえ、いくらいですか？」

アッシュも、ジェインからの情報を信頼していて、その情報の世話になつているハンターの一人だった。

「700円・・・つていいたいところだけど、今回はタダでいいわ。  
アッシュちゃん、ここを巣窟ひいきしてくれてるから」

「いいんですか？」

「もううんよお

実際、小さい村にも道具屋はいくつかあるが、アッシュは基本的にジェインの道具屋にしか買い物をしに行かない。

「何日か前に、そこのクリフ食堂の旦那さんだんな、新鮮なお肉が欲しいからつて、アフトノスを3頭、この村まで持つてくるように注文したらしいのよ。そしたらね、昨日届く予定だったのに、到着したのは、アフトノスをもつてくるハズだったおじさんだけ

アプトノスといつのは、草食種のモンスターだ。温厚で、臆病なこのモンスターは、食用の肉として広く知られている。

アプトノスの肉は、ハンター達に依頼して調達することは多いが、アプトノスそのものを依頼人まで届けるといつことは、専門外だ。それに、まず、ここに来るまでにアプトノスが大人しくしていないだろう。きっと、注文したのはアプトノスを養殖している牧場だろうな、とアッシュは一人、考えた。

「……と、いつ」とは

そのおじさんが自分の村に帰らなかつたということは、アプトノスがいなくなつた場所はそう遠くないはずだ。

「そり、この辺でモンスターにやられたのねえ。そしたら、旦那さん、かんかんに怒つちゃつてさあ、自分でその原因のモンスターを狩りに行こうとしたわけ」

「はあ……」

クリフ食堂の旦那さんといえば、もう50歳になろうとしているはずだ。彼も昔、ハンターをやっていたと聞くが、今となつては流石にきついだろ？。

「そしたら、夜になつて、旦那さんが『ニサカの森と丘』から命からがら戻つてきて、こいつたの。『つちくしょうー・ドスランボスだつたか』って。本人はつきりランボスだと思つてたのねえ」

「は、はあ・・・」

わざわざ曰<sup>ハ</sup>那さんのセリフの部分に氣合を入れてじすのきいた声で真似るジョインに少々気圧されながら、他の事を考えていた。

(『二サ力の森と丘』・・・確かに、近いな。相手はドスランボスか・・・リンと一緒に大丈夫かな・・・)

ドスランポスは、ランポスの集団のリーダーだが、ドスランポスがない場合でも、ランポスだけが集団で生息している場所もある。ドスランポスはランポスよりも大きく、危険だ。

ドスランポスの目撃情報は多いが、競争率が高く、なかなか受けられない。これはなかなか、貴重な情報だ。

「で、田那さんも、それじゃ諦めきれないからって、今日、村長に依頼書を提出するらしいわよ」

村の中での依頼は、村長が受け持つことになっている。

「・・・なるほど、ありがとうございます。ジェインさん」

「まだアマアマ、ハハハ！」

アッシュはジョインと別れた後、そろそろ朝食の時間かな、と思つたが、先程のペケのことが気になつて、戻ることに逡巡した。しうんじゅん

(しかし、このまま戻らないってわけにもいかないしなあ・・・)

それに、腹も減ってきた。仕方なく、普段よりゆっくり歩いて、帰ることにした。

結局、思つたより早くに家に着くと、とりあえず、リンが着替えてる最中だと困るので、家の外から声をかけることにした。

「リン、もう起きてるかー？俺だけ、もう入ってもいいかー？」

朝早くから大きな声を出すことに罪悪感を覚えたが、後ろで主婦達が『あのひと、奥さんにつまみだされたのかしら？』とか、『きっと浮気よ、浮気』と、勝手なことを言つていたので、むしろ羞恥心の方が強かつた。

しかも、返事がない。

暫く間を置いた後、リンが

「 ireに懲りて、一度としないつて誓つなら、入つていいわよ」

と、返してきやがつた。

( や、やうやうつーー後ろの主婦達の話を聞いてやがつたーー )

アッシュの心の叫びと裏腹に、後の主婦達は『やさしく奥さんねえ』などと黙つて感心していた。

( しかし、ついで『ふざけるなー』なんて言つものなら、リンは家に入ることを拒まれそうだ・・・ )

「・・・

暫くの間。そして・・・。

「二、一度としません・・・」

(ち、ちくしょおおおおおつーー)

顔を真っ赤にして、うつむいてアッシュが言つと、リンが

「・・・いいわよ、入つて」

と、実際に演技の入った台詞で返した。

(くつ、あのちょっとの間がまたムカつく・・・!)

アッシュの心の叫びを知らない主婦達は『よかつたわねえ、仲直りできて』とか『ええ、本当』などといってオホホと笑っていた。

「・・・ただいま」

「おかえり、あなた」

「誰が『あなた』だ」

アッシュがげつそりして家の中に入ると、寝巻から着替えたリンは、妻役が気に入ったのか、まだやっていた。

「結構楽しかったでしょ？」

「お前が、な」

「うん」

「・・・」

じとーっとした田代アッシュがコンを睨むが、コンは氣にしてない。  
い。

「ま、まあ、ア・・・アッシュ様っ、はや・・・食べなこと・・・  
朝食がつ、にやぶふつー。」

「・・・ペケ、声が震えてるわ・・・。しかも、震えてないわ

「やん一や、事・・・にや、にやぶつー。」

「ペケ、ウケやすだつじば

「・・・」

ペケが落ち着くのを待つてから、三人で朝食をとることになった。

(しかし、良によつに考へると、氣まずい雰囲気にならざるに済んだ  
な・・・)

朝食の最中、アッシュはそんなことを考へていた。

「とにかく、アッシュ、なんかいい情報をあつた?」

「一。」

(「ローリーは、また、なんでこいつときに勘がいいんだろ？か・・・  
）

アッシュはさつき、ジョインから情報をもらつたのはいいが、リン  
にその事を話そがどうか迷つていた。

(リンとは今までにランポスを討伐する依頼を何回かこなしている  
が、今度の相手はドスランポスだ・・・)

リンは、モンスターとの戦闘の際、深追いしそぎる傾向があるとい  
うことをアッシュは理解していた。

(ランポス程度ならそれでもどつにかなるが、ある程度大物になる  
と、相手の動きを読むことが重要になる。リンにそれができるか・・  
・)

「その様子じゃ、なにかあつたようね。しかも結構、大物。でしょ

リンがじつとして呟つ。

(「こつは、ほんと・・・）

アッシュは、リンの勘の良さに半ばあきれながら、『話すしかない  
か』と決心した。

(それに、話さなければ、それがリオレウスの依頼なんぢゃないか  
と疑われそうだしな)

リンのリオレウスへの執着は相当のものだらう、と、アッシュュは予想していたし、リンはアッシュュが『リオレウスの討伐はまだ早い』と制止するのをわかつてゐるはずだ。

「・・・ジョンさんからの情報で、『ニサカの森と丘』にドスランポスが出たらしい。それで、依頼主が今日、依頼を集会所に提出するんだと」

ため息混じりに説明すると、予想通り、リンは食いついた。

「えつ？！ドスランポス？！そりや、受けろしかないでしょーー！」

(・・・やつぱり)

なぜリンがドスランポスに食いつくかといふと、リンが最近、装備しているものに理由がある。

リンが装備している防具は『ランポスシリーズ』と呼ばれている、『ランポスの皮』を主体としたものだが、具足はまだ『ハンターグリーブ』と呼ばれる、駆け出しハンター向けの装備だ。

そして、具足の『ランポスグリーブ』をつくるためには、『ドスランポスの皮』が必要になる。

まあ、早い話が『ドスランポスの皮』が欲しいのだ。

「その前に、頭の防具を作れ」

アッシュュが、無駄とわかつてリンに言つた。

「ダメ、頭の防具はつけないの。せつかくの髪型を変えないといけないでしょ」

(・・・やっぽつ)

アッシュはため息をついた。

結局、観念して、リンに戦闘に関する幾つかのアドバイスをした後、村長のところにいくことにした。

「やつ起きるわよね

「大丈夫だろ、年寄りは朝が早いからな」

この村の村長の正確な年齢を一人はしらなかつたが、見た限り、かなりの年齢だつた。

「村長つて、昔、ハンターだつたんだっけ？」

「うしいな。聞いた話だけど・・・」

「ほほほ、ワシの話をしとるんかのう？」

「ぬあつ?ー」

『氣づくと、田の前に村長がいた。

「え、やつも・・・おはよい!』れこます

(「これからいたんだ?」)

村長は、いつもは集会所の近くか、自宅の近くにいるが、今、アッシュ達がいるのは、先程のジョインの道具屋の近くだった。

「あら、おはよひ、村長」

リンが、友人に出でわしたような軽口で挨拶する。

「お前は・・・むづちゅうと丁寧に挨拶しろ」

アッシュは一応、そういうが、いつものことなので、とりあえず、言うだけ。

「ほつほつほつ、気にせんでええ。・・・とにかく、ワシに何か用かのう?」

「あ、うん。村長、依頼を受けたいんだけど、依頼書ある?..」

「ほう、こんな朝早くから・・・感心なことじや」

「でしょ~」

リンが調子よく笑う。

「依頼書じやな・・・。され、これじや」

渡された依頼書の束を、一人はひとつずつ確認していく。が・・・。

依頼書に書かれた内容は、昨日、アッシュが受けたような依頼ばかりだった。

「ないな……ランポス10頭討伐ならあるけど……」

アッシュが、リンにひそひそと語りかける。

「やつぱぱちよつと早かったのかしら」

「うへん、でも、早めに来ないと、他のハンターにとられる場合もあるしなあ」

「ちよつと待つてみる?」

「そうするか……」

「どうかしたかの?」

ひそひそと話す一人に、村長が問いかける。

「ああ、いえ、このほかに依頼は?」

「……ないが?さては、何か情報を得てきおったの?」

(・・・ばれたか)

まあ、朝早くから来て、『他に依頼はないか?』なんて言えば、当然といえば当然だ。

「よじよじ、『先に情報を得てから来てはいかん』なんといつるー

ルはないからのう。じょりく待つとよ」

ほつほつほつ、と、村長が笑う。

「じゃあ、そうさせてもらいます

そういうて、アッシュとリンは、しばらく村長の家の外にある椅子に座つて、村長の話を聞かされることになった。

「・・・そこには、伝説の古龍が住んでいるとそれでいてな、ワシも一度、行つた事があつたんじや」

「へえ、それで、古龍には会えたの？」

リンは、村長の話を興味深く聞いているが、アッシュは、その話を聞くのはもう4回目なので、適当に聞いていた。

「いや、ワシが行つた時にはそれらしきものは見あたらなんだ。やはり、あれを見つけるのはそう簡単にはいかんのう」

「へえ・・・」

と、そこまで話をしたところで、噂のクリフさんが、血相を変えて村長に駆け寄ってきた。

「ハアツ、ハアツ！－村長－いら・・・依頼を・・・！」

（・・・來た！）

クリフさんは、事情を説明すると、手続きを済ました後の依頼書を、

村長に渡した。

「おぬし達の目的はこれか?」

「?」

クリフさんは、何の話かわからず、訝しげに村長いぶがとアッシュを見ていた。

「ええ、では早速、受けさせてもいいですか」

言つて、アッシュが、依頼書を受け取る。

「ああ、アッシュ、あんたが受けてくれるのか?!なら安心だ!あのクソ野郎をぶつ飛ばしてくれ!!」

クリフさんが興奮した表情でまくしたてる。

「ほつほつほつ、気をつけな

「ええ、こいつてきます。よし、いくぞ、リン

「はあい。じゃあね、村長、クリフさん

「おつー!がんばってなー!リンちゃん!」

一人に見送られ、アッシュとリンは目的の場所へむかうが、アッシュが『リンは今回の依頼をちゃんとこなせるか』と心配していること、リンは気づかなかつた。

そしてまた、アッシュは、リンが『早く自分の実力を認めさせよ』  
と焦っていることに気づかなかつた。

### 第3話 賭け

『一サカの森』に着くと、アッシュとリンは、安全な場所を探し、早速テントを張ることにした。

ケルビなど、あまり危険でないモンスターの狩りの場合は、テントを張らないことも多いが、ドスランボスなどが相手になると、そうも言つていられない。

場合によつては、負傷者が出る場合もあるし、目的のモンスターが見つからない場合もある。そういうときのために、テントを張ることは必要なのだ。

「もう最初からここにテント張つたままにしてればいいのに」

と、リンが愚痴るが、狩りをする場所はここだけではないので、そもそもいかない。それに・・・。

「そういうな、これもルールだ。破ると罰金ものだぞ」

用もない場所にテントを張つたままにする、他のハンターがテントを張る場所が減る。

なので、誰も居ないテントが発見された場合、数日以内に誰も戻つてこないと、ギルドからの厳罰をくらうことになる。

「ハンターつてのも、自由じゃないわね」

「自由ねえ。自由つてのは、人一人の価値で決まるもんじゃないか

らな

「あい、珍しく賢そうな」とつわね

「ははは、俺はいつでも賢いぞ？」

「・・・はいはい」

そんなやりとりをしていると、テントが完成し、やつと、田舎のドスランボスの搜索を開始することにした。

「ん~、ここはこいつ見ても景色が綺麗ねえ~」

テントを張った場所からみると、そこには広大な自然が広がっていた。

大地には草木が茂り、空には鳥達が自由に羽ばたき、川ではアプロスの親子が水を飲んでいる。

『まさに自然』といった光景だった。

しかし、こんな自然だからこそ、生きていぐ上の捷は『弱肉強食』だ。

弱い者は狩られ、強い者はそれを喰らう。

弱い者たちは生き延びるために知恵をつけ、ある者は素早い足を、ある者は身を守る毒を、ある者は他の物と同化する姿を、といったように、様々な方法で生き延びている。

「準備は出来たか？」

アッシュがリンに確認する。

「もううん」

「よし、出発だ！」

・・・とは、言ったものの・・・。

目的のドスラソボスを見つけるまでにそう体力を使ってはいられない。

一人は、走るでもなく、離れないよう歩きながら、森の方から捜すこととした。

「いないわね・・・」

リンが、モスと呼ばれる苔をはやした豚のよつたモンスターが三匹で行進する様を横目で見ながら、言った。

辺りは木に囲まれていて、昼でも少し暗い。

これが、夜になると真っ暗になり、出られなくなつて遭難する場合もある。

「夜までは見つけ出さないとな・・・」

アッシュが言つ。まだ日が落ちるまで大分あるが、過去に、間違つた目撃情報の依頼を受けて、一週間、キャンプをして暮らしたこと

がある。

そのとおり、この『ニサカの森と丘』だったが、やはり、夜の森のなかは暗く、搜索できるような状態じゃなかつた。

(まあ、あのクリフさんがあそこまで血相変えるくらいだから、間違いではなさそうだけど……)

しばらくスランポンポスを探し、ついでに必要な物の採取をした。

が、辺りにはランポンポスの姿も見当たらない。

「ん~、丘わちじやないのかな

リンが言つ。

「丘の方にいつてみるか」

結局、コースを変更して、丘の高い所を捜すこととした。

「うひやつ

森を抜けて、丘の方へると、リンが急に変な声を出した。

それもそのはず、丘には先程捜してもいなかつたランポンポスがうじやといったからだつた。

「……なんかあたしたち、バカつぽい?」

「そういう時もあるだけだつて

それだけ言つと、二人は一斉に武器を構えた。

アッシュュは、『ゴーレムブレイド改』と呼ばれる、人の身長以上あるのではないかと思われるバカでかい大剣を。

リンは、『オーダーレイピア』と呼ばれる、昔、騎士から授かつた双剣を。

「ランポスがいるってことは、ここにいつらを狩つてりや、そのうち出でくるつて事でしょ！」

「ああ、でも油断はするなよー・リンー・」

「了解つ！！」

二人は疾走し、ランポスの群れへ突つ込んだ。

しかし、リンは心の中には迷いがあつた。

（アッシュュは、あたしの事を信用していないのかな・・・。  
いや、こんなんじゃダメだ！前を見る！）

そう、自分に言い聞かせる。

「・・・？」

一頭のランポスが一人に気づく。

「ギュエヒッ！ギュエヒッ！」

二人に気付いたランポスが、敵の存在を仲間に知らせるために叫ぶ。すると、今までぼーっとしていたランポス達も一人に気付き、威嚇する声をあげた。

（とにかく！こんな依頼なんかで、もたもたしてられない・・・！）

「先手必勝！！」

リンが近くにいたランポスに突っ込み、踊るように回転しながら連續で斬撃を浴びせる。

ズザザアツツ！！

「グギュエヒッ！」

ランポスが苦痛の叫び声をあげて怯む、が、それだけでは絶命しない。

「まだまだあつ！！」

「バカ！一回離れろ！」  
リンがランポスに止めを刺そつと両手の剣で突きを繰り出す。

アッシュは、深追いするなど注意しておいたが、リンは攻撃をやめようとしない。

攻撃は最大の防御、とはいっても、それは必ずしも上手くいくわけではない。

下手をすると、止めを刺したはいいが、同時に痛い反撃を受ける可能性もある。

ドシュウッ！！

リンの突きはランポスの心臓を突き刺し、ランポスは断末魔の悲鳴と共に倒れた。

（ふう・・・。どう？アッシュ）

リンは『あたしもやるでしょ？』と、アッシュを見るが、アッシュの表情は険しかった。

（よくない傾向だな…）

アッシュは内心、焦っていた。

（『確実に間違った戦い方』とは言わないが、あのままだと、ドスランポス相手にも同じ戦い方をするかも知れない…）

ドスランポスは、目を潰したり、比較的脆い腹部などを攻撃しない限りは、ランポスのように軽い攻撃でも怯む、とは限らない。

つまり、深追いすると、反撃をもひつ可能性が非常に高い。

また、そんなアッシュを見たリンは、複雑な心境だった。

(なにより、自分の意見が取り入れられなかつたからつて、怒つてるの?)

リンは、今回の依頼で問題なくドスランポスを倒しさえすれば、アッショも少しき認めてくれるのでは、と思つていた。

(た、確かに悪いとは思つけど…、そんなりゆつたりやつてられな  
いわよ…)

リンは自分に言い聞かせる。

リンは、リオレウスと戦う事への焦りと、今朝のアッショの事で、色々な事に注意がいかなくなつていた。

さつき行動は、アッショの注意を無視したのではなく、冷静に判断が出来ずに、体が動いた結果だった。

(反省会は後だ!今はドスランポスの討伐に集中しろ!)

アッショは、迷いを振り払つように、ランポスに駆け寄り、停止。即座に大剣を構える。

ランポスがステップで回避しようとする。

が、アッショも同じ方向に移動し、先回りしていた。

「ギッ?!」

(隙だらけだ!これなら当たる!)

アッシュは、そう確信すると、引きするよつにして持っていた大剣で思い切り斬り上げた。

隙は大きいが、その分、当たれば威力も大きい。

ズバアツツー！！！

「グツ・・・・！」

ランポスは断末魔の悲鳴をあげ終える前に、体を真つ一つに裂かれた。

（よし、一撃！）

アッシュはランポスが真つ一つになるのを確認すると、次の獲物を求めて走り出した。

アッシュは一撃必殺の攻撃で。

リンは敵に休む暇を与えない連撃で。

二人は、各々（おののの）の判断でランポスを討伐していく。

数にして8頭。二人は今のところ無傷。

ドスランポスが来るまでの肩慣らしとしては上等。

と、言いたいところだが……。

「一人の動きは、二つもの一人を知っている者からすると、明らかにおかしかった。

お互にフォローしあうこともなく、ただひたすらリンポスを狩る。

まるでパーティを組んだばかりのハンター達のようだった。

（くっ、なんなの？！このもやもやした気持ち…）

リンは、戦闘の最中にも関わらず、集中出来ずにいた。

（アッシュが…アッシュが悪いんだつーあたしの事を認めてくれないから…あたしにだけ、過去の事を話してくれないからつー）

本当は、それだけではないといつ事を、リンも理解しているが、気付かないフリをする。

（・・・でも、過去の話をしないのは、あたしも同じだ・・・）

色々な事を考えれば考えるほど、気持ちは複雑になり、動きが鈍る。

（駄目だ駄目だー考えるなー）

迷いを振り払いたくて、リンはランポスを斬り付ける。

しかし…。この時、リンは周囲に注意を払うこと を怠っていた。

「バカつ、リン！後ろだー！」

「？！」

リンは、アッショウの声に反応して後ろを振り返るが、そこにはランボスが、今までにリンに飛び掛ろうとしているところだった。

「……」

(避けきれない? !)

リンがそう判断した瞬間…。

横から、アッショウの大剣が飛んできて、ランボスの体を上下に分けて。

「？！」

ランボスは悲鳴を上げる間もなく絶命する。

投げられたアッショウの大剣は、勢いをつけたまま岩に突き刺さった。

「油断するな！」

アッショウの声。

「ア…アッショウ、ありが…」

リンが『ありがとう』と言い掛けた瞬間、アッショウは横から飛び掛ってきたランボスに突き飛ばされた。

「ぐつ・・・?！」

アッシュは数メートル転がると、自分を突き飛ばした相手を睨み付けた。

「……ちつ、人の事……いつてられないな」

ランポスよりも一回り以上大きな体、巨大な爪、鮫の背ビレを彷彿ほうふつとさせるオレンジ色のトサカ……。

「つ、ドスランポス！」

言いつと、リンはドスランポスに向かつて一直線に駆け寄る。

（アッシュは今、無防備だ。あたしがやらなきや……）

「リン、敵の動きをよく見ろよー！」

アッシュはそう言いつと、ドスランポスに背を向け、岩に突き刺さった大剣に向かつて走り出した。

「言わなくともつ……」

（くそつー…情けないー！）

交代するようにリンとすれ違ひながら、アッシュは自分の無様な姿を恥じた。

（剣まで距離がある！戻るまでに何事もなくあつてくれ！）

誰にともなく、そう祈りながら、アッシュは大剣の刺さつた岩めが

けて走る。

「……！」

一旦停止したアッシュの前には、ランポスが3頭、行く手を阻むよう立ちはだかっていた。

「う、畜生……！」

「だあああつ……！」

リンがドスランポスに斬りかかる。

「……」

ドスランポスはそれを左へステップして<sup>かわ</sup>躲す。

攻撃を避けると、ドスランポスはリンに噛み付いて口を大きく開く。

「くつ……！」

リンは、ドスランポスの右側へ前転して、その牙を回避する。

(敵の動きを見ろ！ 焦るな！)

リンは、アッシュに聞かされた大型モンスターとの戦闘法を反芻するように心の中で唱える。

(今は、余計なことは忘れるんだ!)

ドスランポスの動きを見ながらも、周りのランポスが襲いかかってこないか横目で確認する。

瞬間、ドスランポスが、また噛み付こうと口を開く。

「……来いつ！」

リンは左手の剣をドスランポスに噛み付かせようと、剣を肩の高さで水平にして突き出す。

左手の剣に噛み付いている間に、右手の剣で急所を突くつもりだった。

しかし、ドスランポスは、左手の剣に噛み付く寸前で器用に頭を捻ねじり、軌道を変更して、リンを狙つ。

「……」

リンはそれを避けようと慌てて左へ体を移動するが、一瞬間に合わず、右肩に噛み付いた。

ドスランポスはリンの肩に噛み付いたま離れようとしない。

「う……うの……離れなさい……」

リンは左手の剣でドスランポスの頭を刺そうとするが、力が入り切れず、ドスランポスの鱗に弾かれた。

ギギギッ・・・・！

鎧が変形させられる音がリンの耳に聴こえる。

「ぐつ、あ・・・離せ、離せええつ！！」

リンはひたすら剣でドスランポスの頭を斬りつけ続ける。

リンには、それに効果がないという判断すら困難なくらい、動搖していた。

「リン！田を狙え！」

遠くからアッシュが叫ぶ。

その時、アッシュは3頭のランポスを躊躇し、大剣を引き抜いた後だつた。

「一！」

アッシュの声にハツとしたリンは、左手の剣で、ドスランポスの右目を突き刺した。

ドスッ！

「ギエエエッ！？」

ドスランポスは、悲鳴をあげ、仰け反った。

「・・・ひーー！」

見ると、リンは噛み付かれた右肩から血を流していた。

（くそつ、剣をもてないほびじやないけど・・・あまり右腕に力が入らない…）

「・・・ひーー！」

リンが追い討ちを掛けよつと、剣を構える。

「よせつー・リンーー！」

アッシュが制止するが、リンは引かない。

（駄目だ！頭に血が登っているー）

アッシュの悪い予感があたり、リンはドスランポスに斬りかかる。とする。

ドスランポスは、片目でリンを睨みつけると、もう一度噛み付こうと、口を開く。

（まぢーーあれじや、リンには分が悪いーー）

双剣は連續で攻撃してこそ効果がある。急所でも狙わない限り、一撃ではドスランポスを倒すことは出来ない。

アッシュは、焦る気持ちを抑えて、冷静に判断する。

(走つて間に合つか？！・・・いや、無理だ！じゃあまた剣を投げるか・・・？！)

しかし、リンとドスランポスはアッシュの目の前、直線上にいる。

剣を投げつけば、確実にリンにも当たる。

(くわー！俺は！また仲間を見殺しにするのかっ！？)

アッシュは自分の無力さに脱力感を覚えた。

「・・・？！」

瞬間、ドスランポスに斬りかかるうとしていたリンが体勢を崩し、右膝をつく。

すると、運良くドスランポスの攻撃を回避できた。

「！！」

ドスランポスは無防備。

リンはすかさず右手の剣を置き、左手の剣を両手で構えてドスランポスの腹を突き刺した。

ドシユツ！！

「グギヒヒエツ！！」

「△△！」

リンの右腕に痛みが走る。

ドスランボスは悲鳴をあげると、森の方へと逃げていった。

ランボスたちもそれに続いて森の方へと走り去った。

「リン！大丈夫か？！」

ア・アツ・シニ・・・・

アッショニに怒鳴られると悪い。鼻構えた。

「事件簿」の「事件」

アッシャーは今にも泣きそうにな顔をしていた

- . . .

アッシュニーの「んな表情をリンは見た」とかなし

アッシュは顔が見えない様に後ろに向き直って言った。

卷之三

リンが、剣を拾い上げると、二人はその後、無言でドスランポスを

追つた。

二人は、先程通ってきた森に戻ってきた。

「確かに、こっちだつたよな・・・」

「」で、やつとアッシュが口を開いた。

「うん・・・」

リンが力無く返事をする。

「グアアアアアツ！－グアアアアアツ！－」

どこからか、ドスランポスの泣き声が聴こえた。

「・・・しまつた！－」

「・・・？」

アッシュが焦るが、リンにはその意味がわからない。

「リン！－田逃げるぞ！－」

「え、なん・・・」

「ドスランポスが仲間を呼んだ－囮まれるぞ！－」

言つが早いが、アッシュが駆け出す。しかし……。

「ギュエニッ……」

アッシュ達が来た道には既にランポスが数頭、威嚇するよつに鳴き声をあげていた。

「くつ・・・・！」

「アッシュ……！」

リンの言葉にアッシュが反応し、周りを見ると、既にランポス達の包囲網が出来上がつっていた。

その数、ざつと二十頭！一応剣は持てるが、右肩が思うよつに動かないリンと、無傷だが疲労が見えたアッシュとでは、分が悪すぎる。

ドスランポスは、勝ち誇つたよつにも見える余裕な足取りで、群れの奥に現れた。

「アッシュ……」

リンが弱々しい声で言つ。

「リン・・・そんな声を出すな」

自分達が絶体絶命の状態にあると悟つたリンは、もはや武器を構えることすら出来なかつた。

「『』めん・・・『』めんね、アッシュ」

「やめろーーー！」

「・・・・・」

(考えろーーー)の状況、どう打開する・・・?ーー)

アッシュはひたすら考える。

(閃光玉は持つてきていない・・・。せめて、仲間が入れば・・・)

考える・・・。

(仲間・・・!?)そりいえば・・・!ーー)

「だあああつーーー」

「え?ーーー」

言つと、アッシュは道具を入れた袋から、小タル爆弾を取り出し、火をつけると、なるべくキャンプの方向へ向けて投げつけた。

少しの間、そして・・・。

爆音！

「グエツ?ーーー」

それを直視していたランポスたちは、ビクリと反応するが、それだ

けだった。

「・・・アッシュユ?」

「リンーこれは『賭け』だが・・・、時間を稼ぐぞーー。」

「え?」

言つと、アッシュユは近くで爆弾に注目していたランボスを斬り付けた。

ズシャツ!!

「ギュヒッ!!」

一撃でランボスを仕留めると、アッシュユは他のランボスに掛けて走る。

「どうこう」とーーアッシュユーーー!」

リンはアッシュユに問う。

しかし、アッシュユはその間に応じない。

アッシュユはひたすらランボスを斬り続ける。

それでも、数はあまり減らない。

「・・・バカアッシュユーーー!」

リンは悪態をつくと、左手しか自由に動かない状態で近くのランポスを斬りつけた。

一人は、ランポスを数頭、撃退し続けるが・・・。

「ぐつ！…・・・ハウツ、ハウツ・・・この野郎つー！」

アッシュが、ランポスに突き飛ばされたあと、受身をとつて悪態をついた。

（くそつー俺はともかく、リンは長くはもたない！…）

リンは流血が酷い。それに、今にも貧血を起こしそうなほど顔色が悪かった。

（あたしは、死なない！…）んなといひでつー…）

リンは自分を励ましながらランポスを撃退し続ける。が・・・。

「つー？」

「ー・・・・リン！？」  
リンが急に、がくっと体勢を崩し、膝をつく。

アッシュがリンに駆け寄る。

「はは、ごめん、アッシュ、あたし・・・もひ、無理かも・・・」

「おい、バカリーン！劇みたいな事やつてる暇はないぞー！諦めるなー！」

アッシュが近寄ってきたランポスを斬り払いながら言つ。

「はあっ・・・アッシュ、逃げて・・・」

「やめろー! ふざけるなー!」

アッシュはリンを叱咤じったする。

「ギュヒヒヒッ」

ランポス達の群れがじわりじわりとアッシュ達に歩み寄る。

「逃げなさい! ・・・」

「いやだ! 僕達は死ない! ! ! 僕は・・・僕は・・・・! ! !」

アッシュは駄々をこねるよつて言つ。田には涙が浮かんでいた。

「俺は・・・もう、絶対に大切な仲間を見殺しになんてしない! ! !」

瞬間、一頭のランポスが一人に飛び掛かる。が・・・。

ドスッ! !

「ギュヒ? !」

ランポスが、巨大な槍に体を突き刺され、停止する。

「おーおー、なんの演劇よ、コレ

アッシュュ達の耳に、聞いた事のある声が響く。

「…………パグフイか？！」

「おおよ、ガンドウイルも一緒だぜ！」

「…………ああ」

ガンドウイルが静かに言つ。

アッシュュの『賭け』とは、他のハンターがここに来ている可能性を賭けたものだつた。

だが、それは無謀な賭けではなかつた。

朝、二人が依頼を見た時にランポス十頭の討伐依頼があつた。

その場所はここ。

そして、この二人が到着したわけだ。

「爆音がしたんで来てみたらこれだ。お一人さん、仲が良い」とで

「…………！」

「バツ、バカツ！！」

アッシュュとリンが真っ赤になつてパグフイを睨む。

「はつはつは、照れんな照れんな！」

「・・・話は後だ。・・・いくぞ！パグフィー！」

ゆつたりと話していた Ganduile は、かつと目を開くと、大剣を構えてランポスに駆け寄った。

「おおつ！！」

パグフィイがそれに続く。

この二人の戦闘スタイルは、二人同時に行動することのよつだ。

敵の攻撃力を見て、低いと判断すれば Ganduile が前衛を勤め、パグフィイがバックアップする。

多分、敵が大型モンスターだった場合や、複数のモンスターから一斉に攻撃されそうな場合は、パグフィイが前衛で防御を勤めるのだろう。

「ううおおおおおおおおおおおおおおつ！！！」

Ganduile が大剣を水平になぎ払う。

ズズズザアアアアアアアアアツー！！

「ギューハエツツー！！」

たちまち、軌道上にいたランポスが3頭、体を一つに分離させられた。

「つ、なんてバカ力だ・・・!」

アッシュがガンドウイルの想像を絶する一撃に、恐怖の念すら込めて言つ。

「凄い・・・」

リンが言つと、ガンドウイルの頬が少し赤くなつた。よつとも見えた。

ガンドウイルの右から、ランポスが飛び掛る。

「むつ・・・」

ガンドウイルは左に剣を振り終えた後で、今から右に振つても間に合わない。

ズドオツ!!

「グギイツー?」

「残念つー!」

パグフイの槍はガンランスと呼ばれる、爆薬を仕込んだ物だつた。

ランポスは黒煙を上げながら吹つ飛んでいき、着地すると、動かなくなつた。

「おー!お前らの目的はアイツだろ?...ザコは任せと、はやくやつ

ちまえ！…！」

パグフイが叫ぶ。

「……ああ！…」

アッシュが大剣を構え、ドスランポスを睨みつける。

「……待つて」

「リン……？」

リンが立ち上がり、剣を構える。

「……あたしがやる」

「？…なにいつてるんだ！…」

「おいおい、お嬢ちゃん！あんた貧血で今にも倒れそうじゃねえか  
！…」

「無理をするな！」

三人が一斉に制止する。しかし、リンは引かない。

「……お願い」

「リン……」

アッシュは『やめんな』と言おうとして、やめた。

きつと、じりで止めたが、リンは一生アッシュを恨むだらう。

アッシュは恨まれるのが怖いのではない。

情けないことだが、アッシュはリンに避けられるのが怖いのだ。

「・・・勝てよ」

アッシュはそれだけいつも、リンを見送ることにした。

「・・・当然！」

リンは、そういうとドスランポス目掛けてふらふらと歩いていった。

「おじおじー正氣か！アッシュー！」

「無理だ！やめさせやー。」

「・・・」

二人がアッシュを非難するが、アッシュは聞かない。

覚束ない足取りで、リンはドスランポスたいじと対峙した。

ドスランポスは一人の意外な乱入者に驚いていたが、目の前の相手がリンだとわかると、余裕の表情になった。

こいつが喋れるとしたら、『なんだ、この死にぞこないか』とでも言つたかもしない。

リンはじつと、ドスランポスが動くのを待つた。

「・・・」

「・・・ギャツ！！」

全く動じないとしないリンに、ドスランポスが痺れを切らしてリンに噛み付こうとした。

（アンタには、礼を言わないとね・・・）

リンは、貧血で狭くなってきた視界の中でドスランポスを捉えながら、心の中で礼を言った。

（アンタのお陰で、アタシは少しだけど、成長できた・・・。アッシュの過去も、少しだけど、分かった・・・）

「ハーーー」

ドスランポスの牙を必要最低限の動きで右に避けて回避する。

はたから見ると、貧血でよろけただけにも見える。が、リンは確実に相手の動きを読んで回避していた。

リンが左手の逆手に持ち、右こめかみ辺りで構えた剣でドスランポスの残った左目を突き刺した。

ズッ！！

「ギュヒヒヒ……！」

リンがすぐに剣を引き抜く。

「ツツツ……！」

ドスランポスが仰け反る。

リンは続けて、踊るように右回りに回転し、剣を回転させて突きの姿勢をとると、右手の剣を捨て、左手を両手で構え、の剣で一気に心臓を貫いた。

ドシユツ……！

「グ……ギュツ……？」

(ありがとね……)

ドスランポスは、その場に倒れ、血の泡を吹きピクピクと痙攣していたが、やがて、動かなくなつた。

「……あいつ……」

「むう……」

二人が歎声をあげるでもなく言つ。

「リン……！」

アッシュがリンに駆け寄る。

「・・・アッ・・・シユ」

リンは、崩れるようにしてその場に倒れた。

暗くなる視界の中で、リンは泣き声のアッシュの顔を見つけた。

「兄・・・れん」

「あれ・・・」

リンが田を覚めたと、やいは家のベッドの上だった。

「コン・・・!」

田の前には、アッシュが心配そうな顔でコンの顔を覗きこんでいた。

「アッシュ・・・?」

体を起こす。

記憶が混乱している。コンは頭を押され、ゆっくり、ゆっくりと想い出す・・・。

「あた・・・し・・・」

(やつだ、あたし・・・)

アッシュが心配な顔をしている。

「ア・・・アッシュ・・・」

リンは『「めんね』』と言おうとしたが、アッシュの声に阻まれた。

「リン・・・良くやつたー最後の動きは見事だつたぞー」

アッシュはリンを褒めた。

「え・・・? !」

事の始まりは、リンが無鉄砲に突っ込んだことからだ。

リンは、怒られて当然だと思っていたのに、アッシュはやまほしなかつた。

「・・・つー」

(なんで怒らないのよ・・・つ、バカアッシュ! !)

リンは、心中で悪態をついたが、色々な思いが溢れ出していくと、急に泣き出してしまった。

「ひひ・・・つ・・・」

「・・・コン?」

「「あ・・・ん、『めんね! !』アッシュー」

「えー？」

『氣づくとコンは、アッシュに抱きつこうとした。

「お、おこつ……ペケがみてるつて……」

「あ、あた、し、バカでーア、アッシュの足、引っぱって……！」

「コン……」

「強く、なるから……！あたし、もつと……強くなるから……！」

「……ああ

リンを抱き返す」とが出来なこまま、アッシュはつぶやいた。

「一緒に、強くなるひつな……」

アッシュはもう少くと、コンの頭を撫でた。

(なにやってんだうつな、俺には……目的があるの……)

リンの泣く姿を眺めながら、アッシュは複雑な気持ちだった……。

## 第4話 幸福な休息

ドスランポス討伐から数日……。

リンの右腕の調子がよくなつてみると、一人で集会所に行くことにした。

「うわあ、久しぶりに来てみたら……」

リンが言つよつて、集会所の中はいつものように騒がしかつた。

この日は朝早くから酒を飲んで盛り上がりしている連中もいた。それぞれ狩りに行く。

だが、朝早くから酒を飲んで盛り上がりしている連中もいた。

『もしかしたら今、帰ってきたのかもしれないな』、とアッシュは一人思つた。

「ええつと……」

「……？」

リンは小走りに掲示板のところへ移動する。

「えへつと、あつーあつたー！」

「……なにが？」

アッシュがリンの傍に寄つていくと、そこにはドスランポスを討伐した後に撮った写真が貼つてある記事があつた。

この掲示板には、ある程度大物のモンスターを討伐すると、その記事を貼られる。

「ちっさいなあ」

アッシュたちの記事はさほど大きいものではなく、文章も『アッシュ達がドスランポスを討伐した』程度のことしか書かれておらず、リンには不評のようだつた。

その掲示板の隣にある、近隣の村で活躍したハンターの記事を貼る為の掲示板には、どこだかのハンターが一人でダイミョウザザミを3体討伐したことなどが貼られてあつた。

「そりや、ドスランポス倒しただけだし

アッシュが『当然だ』といわんばかりに言つ。

よほどのモンスターを討伐でもしない限り、この掲示板には一時的にしか記事は貼られない。

この写真も、そのうちなくなるだろう。

掲示板の上には、この村で功績を挙げた歴代のハンター達の活躍がでかでかと貼られてあつた。

「つていうか・・・あたしが写つてない！」

リンが不満そうにじつ。

「ははは、仕方ないだろ、倒れてたんだから」

アッシュが声だけで笑いながら言つ。

アイルーに撮影してもらつた写真には、ドスランポスの死骸と、後ろを向いて顔のハッキリしないアッシュ・・・。それと、なぜかガンドウイルとパグフィの二人が写っていた。

パグフィに至つては、カメラに寄つてピースまでしている。

「・・・」

リンが、じとーっとした目で写真のパグフィを指差す。

「代役だそーだ」

「なによそれ？！」

「ははは、仕方ないだろ、倒れてたんだから」

「むううう・・・」

リンは不満そうだったが、すぐに気を取り直した。

「まあ、いいわ。そのうちもつと大物を倒してテカテカと、この掲示板に貼つてやるからー！」

ふつ、と胸に手を当てながらリンが言つ。

「意氣込むのはここにナビ、モビリゼーション……。それで……」

アッシュコはやつぱりと、二ナのところへよつてこつた。

「また……アイツは……」

「じつも、二ナさん」

「あら、アッシュコさん！」

アッシュコを見ると、二ナが、ぱあっと表情を明るくした。

「心配したんですよ。ズラーンボスの討伐に行つたって聞いたあと、二ナに来ないんだから」

二ナが本当に心配やつぱり。

ハンター達は、村長から依頼を受けた場合も、報酬は二ナの集会所で貰うことになつてこ。

なのに、今までアッシュコは報酬をとつこなかつたらしく。

「こや、ちゅうとお前の負傷をしまして……」

ははは、ヒッシュコが笑つ。

(なによ、負傷したのはあたしじゃないー！)

リンはそう思つたが、同時にほっとしていた。

(なんか・・・苦手なのよね、二ナさん・・・悪い人じやないんだけど・・・)

リンは以前に、アッシュにそのことを少し話すと。

「お前とはつくりが違うからな、嫉妬して当然だ」

と、アッシュが言ったので、とつあえず殴った記憶がある。

(あれはあれで、あたしに気使つてくれてるのかな。・・・だつたらいいけど・・・)

リンはそんなことを一人、考えていた。

「ところで二ナさん、最近、なにか面白い情報はありましたか？」

アッシュが遅くなつたドスランポスの報酬を二ナから受け取りながら呟つ。

「情報、ですか・・・」

言つて、二ナがリンの方を見る。

(・・・・・)

リンは、二ナに『また大声を出すんじゃないから』と言われたようで、少しいらつとした。

「ああ、大丈夫、あれはちゃんと隠けましたから」

アッシュがははは、と笑う。

(後でぶつ飛ばそう)

リンは心の中で決意した。

「は、はあ・・・」

二ナはそつ返事をすると、手元の資料を調べ出した。

「あ、これもまだ、ただの田撃情報なんですけど・・・」

言つて、二ナはアッシュに資料を渡す。

「・・・イヤンクックか」

アッシュが呟く。

イヤンクックとは、鳥竜種の中でも、飛竜種に近い、大型の怪鳥だ。ピンク色の鱗に、化粧でもしたのか、と言つよつた、変わった外見をしているが、大きさも強さもドスランボス以上だ。

「ふう・・・む」

アッシュが何事か考えていた。

(まあ、大方、あたしと一緒で大丈夫かな、とかそんなんでしょう)

リンが思つが、実際はどうなのか確認しようがない。

「いりとしたら、どつかの『森と丘』か」

アッシュが呟く。

「え？ なんで『密林』じゃないってわかるの？」

イヤンクックといえば、『密林』にも生息すると聞いていたリンは、アッシュに問い合わせる。

(これが長年ハンターをやつている人間の勘つてやつかしら？)

リンは少し感心していた。

「いや、ijiにせう書いてある」

「・・・あつ、そつ」

(がつかりね・・・)

「とりあえず、なにか続報があり次第、連絡します」

二ナが言つと、アッシュはその後、二ナと幾らか話をして、リンと一人で集会所を後にした。

「依頼、受けないの？」

帰路の途中、リンがアッシュに問いかける。

「今日は顔見せと、報酬を取りに来ただけだ。ヤンクックの情報も入ったし、まあまあだな」

「・・・受けられるといいね。依頼」

ヤンクックの討伐依頼は結構多いが、これも人気があるため、あまり受ける事ができない。

「ああ、ヤンクックの行動は基本的には飛竜と似ているから、リングが飛竜との戦闘に慣れる良い機会だからな」

「・・・うん」

(・・・やついえば、リオレウスの情報はどうなったんだろう)

二ナはリオレウスの事については、何も言わなかつた。

(まあ、飛竜種の目撃情報は見間違いとか、他の場所に移動したとか多いらしいし・・・それに・・・)

リンがちらつとアッシュを見る。

「ん?」

アッシュは『何だ?』と言いたそうな顔だ。

「ん、なんでもない」

(それに、まだアッシュは、あたしがリオレウスと戦つ事なんて、  
許さないだろ？！……)

「？・・・変な奴」

「アッシュに言われたくなー」

一人は、その後、まつまつとこへつか他愛なし話をしながら家に帰  
つた。

一度家に帰り、しばらく休むと、リンヒアッシュは残りの時間を各  
々の判断で自由行動をとることとした。

リンは、鎧をディスランボスに変形させられ、穴まで開けられたため、  
鍛冶屋に修理をしてもう一つ頼んでおいたので、確認にいくこと  
にした。

「おひ、コンちゃんじゅねえか」

親しみやすそうな顔の、無精髭を生やした男がリンに話し掛けでき  
た。

「いにしへ、デイールさん。鎧、修理できた？」

「ああ、もういいんだ。それと・・・」

デイールが修理した鎧と一緒に具足を取り出した。

「あつー。」

リンが、ぱっと田を輝かせる。

「ランポスグリーブだ。頼まれた通り、つくつといたぜー。」

「わあ、ありがとう」

リンはそれを嬉しそうに受け取る。

ハンターにとって上等な武器や防具を装備する事は一流のハンターの証とされている。

そのために、少しずつでもランクの高い防具を装備していくことは、多くのハンターの楽しみになつていて。

「鎧と具足は後でうちのアイルーにリンりゃんといふ送りせとくわ。ま、これに満足しねえで、もつといいもん作れるへういバンバン狩つてくれー！」

ディールはハツハツハと楽しそうに笑った。

「ええ。そのつもつ

リンは代金を払い、ディールとしばらぐ話をすると別れ、夕食の材料を買いくことにした。

「つーん

「アッシュ様、なにをしてるんですーヤ?」

本を片手に難しい顔をしているアッシュに、ペケが問いかける。

「ん~、近々、イアンクックを討伐しに行くかもしからな、音爆弾の調合を・・・」

本から田を離さずアッシュが囁く。

「そうですかーヤ・・・」

ペケは、アッシュの邪魔をしないよう、黙つておくことにした。

「・・・へへっ、なんでこいつ本つて意味のない文章が多いんだつ?ー!」

多分、本の厚さを増すためだらうが、アッシュは苛立つている。

「音爆弾の歴史はまだ許せるが、なんで使用した時の個人的な感想まで書いてあるんだ?ー!」

アッシュが、田の前にはいない著者に突っ込む。

ペケがそっと覗くと、確かに『快音』はいうが、音が大きすぎて気分が悪くなつた』といふことを回りくどく書いてあつた。

しかも、それが書いてあるのはサブタイトルが『すぐわかるーこれが音爆弾の調合法!』だった。

(一いやるせん・・・)

ペケは、アッシュが怒る理由を理解するとともに、激しく共感した。

リンは買い物をするまると、つこでにジョンの道具屋に寄る」と  
にした。

「あら、リンちやんじやなーの

ジョンが体をくねくねさせながら寄って来た。

「どうも。ジョンさん

最初はリンも気味悪がったが、いい加減慣れていた。

「なにか入り用かしら?」

「そうですね。じゃあ・・・」

「回復薬を5つと、砥石を5つとねこ」

村長にも敬語で話わないリンも、ジョンの前では敬語で喋る。

「はあー。730ねえ」

代金を払うと、ジョンが『あー、そうかい』と呟いて、店の奥に入つて行った。

「?」

「まあ・・・出来た・・・。」

アッシュが調合で出来た音爆弾を掲げていった。

(そんなに珍しいことでもないんだけどニーヤ・・・)

真にま出さず、ペケがやう思つが、アッシュは氣づかない。

「散々不器用と呼ばれて以来、数年間調合をしなかつたが、ふふふ・  
・俺だってやれば出来るつてことやー。」

アッシュが嬉しそうにしているが、ペケはあるの?と戸惑ついた。

(『本書を用いての音爆弾調合の失敗率は5%未満』・・・)

ペケはその調合書をそつと隠すことにした。

「よし、気分もいいし、ちょっと散歩行つてくれる」

「はいですニーヤ」

アッシュは今にもスキップでもしそうなほど浮かれて、出かけていった。

「ほひ、これよこれ」

ジェインが店の奥から半円形の黒いものを持ってきた。

「いれは・・・？」

リンがそれを渡され、ジョインに聞く。

「『シビレ器』よ。いや、ほらね。リンちゃんもスランポスを討伐出来たことだし。今度はイヤンクックかなあって思ってねえ」

「はあ・・・」

それとこれどどう関係があるのだろうか、と、リンは手元にある見たことの無い道具をまじまじと見た。

(結構軽い・・・)

「あ、それね。地面に設置して、真ん中のボタンを思いつきり踏んだりして押すと、数秒後に電流でコレの周りに入ってきたモンスターをシビレせるのよお」

「へえ・・・」

平原になつてゐる裏の一箇所に、地面に刺し込むためのものと思われる、力強い針が、折りたたまれてあつた。

「でも、設置してモンスターがシビレてるからって、あんまり近寄ると人間もシビレちゃうから気をつけたねえ」

「・・・」

(意味は・・・?それにモンスターが痺れるくらいだから、人間が電流の範囲に入つたらただじゃ済まないんじや・・・)

「あたしも昔は『クックイーター』と呼ばれるハンターだったから、色々調合して余つてたのよ。だから、お代はないわ」

「え? いいんですか?」

「まあまあ」

リンは礼を言いつづけながら、シビレ眼をしかつて、  
とにした。

「ありがとうござります。ジョンさん」

「ここのお

リンは礼を言いつづけながら、荷物も多くなつてきただので  
帰るにとりました。

「お、リン」

アッシュは散歩の途中、今から帰るといふと思われるコンの姿を発見した。

「あら、アッシュ」

「・・・重そうだな、俺が持つよ」

アッシュはリンが抱えていた袋を受け取る。

「・・・」

「・・・珍しき、アッシュが優しい」

「ははは、俺はこつだつて優しくね?」

「ははは、俺はこつだつて優しくね?」

「ははは・・・」

「・・・」

それから無言で、一人並んで歩く。

太陽は大分沈み、暑さも少し和らいだ。やわ

虫の鳴き声がよく聴こえる。

昼の喧騒けんそうがなかつたかのよつて、辺りは静かだつた。

「ねえ、アッシュ・・・」

「ん?」

「あのや、あたし・・・ハンターになつてから、毎日毎日、色んな依頼をこなしてきて、こんな風に一寸ゆづくつ過ごす」とつてあまりなかつた」

「そりだなあ・・・」

「でも、別にハンターが嫌つてわけじゃないんだけど、『うひうひ』  
もありかなつて思つの」

「ああ・・・」

「なんか、『うひ・・・』ちこちこ、殺すとか殺されるとか考えなくて  
いいじゃない?」

リンは言葉が上手くまとまらないこと、少し詰まつながらず。

「・・・ああ」

(・・・やつぱり、リンは・・・ハンターに向いてないんじゃない  
だわうか)

「うひやつて、いつもと同じ人と話をして、いつもと同じ人とある  
のが、なんか大切に思えた・・・」

言つた後で、『クサイかな』とリンは照れくせんひに笑つ。

「やうか・・・」

それを見て、アッシュも少し微笑む。

「日常つて、結構『幸せ』があるんだね・・・。『うひやつて、いつ  
ものように過ごしたり、空を眺めながらアッシュと一緒に歩いたり  
するの』が、あたしは幸せ」

「・・・それは、リンが・・・」

アッシュが何か言おうとして止める。

(やめておいで。 もすがにいわれはクサイな……)

「……なに?」

「いや、 せつとさればリンがバカだからだよ」

『眠こじと畜た』 とでもいこううな顔でアッシュが言ひ。

「……バカアッシュに言われたくないわよ」

リンが叫びが、 声に怒りはこもっていない。

「まあ、 つまら……なんだ」

「?」

「『幸せ』 ってのは、 誰かに『これが幸せなんですよ』 とかいつて  
教えてやうりのじやなくて、 血分で見つかるもんなんだってこと  
だな。 ・・・まあ、 当然のことだけど」

「……うそ」

「空を眺めてるだけで幸せな気分になつたりするのも、 かっこ良い  
ことがあつても仮面するのも、 その人の心の持ちようなんだ」

「……うそ」

「だから……」こんな日常が幸せって思えるコンは……

アッシュはそのままでこいつへ詰める。

「……？」

「……バカなんだよ」

アッシュはなぜか照れた顔で言いつ。

「……なんで照れてんのよー。」

「あいたつ」

リンが微妙な空気にはねられなくなつたのか、アッシュを軽く小突く。

「まあまあ、アホなことやつてないで、ひとつと帰るぞー。」

そうこうで、アッシュは歩く速度をあげる。

「うそ

リンもそれを追う様に歩く。

そして、また無言で一人並んで歩く。

少しして、アッシュは自分の歩く速度がリンには少し早ことが気づくと、歩く速度を落とした。

## 第4話 幸福な休息（後書き）

どうも。この小説を書いているヤツです。

既にお気づきの方も多いと思いますが、この小説の中に出てくる設定などには私が勝手に作り上げたものがあります。というか多いです。

なので、あまりそういう設定（人数無制限の依頼）や物を信じるカメラとかと、恥を搔く恐れがありますので、ご注意ください。

また、私の勝手な都合で小説の内容を変える場合があります。

例えば、ジョインがドスランポスの情報料として300円を要求しよつとした件についてですが、『あれ、これクーラードリンクと同じ?』と思つたんですが、『でもドスランポスの依頼900円なんだよね』ということで、『じゃあ、依頼一日一回くらいしか受けないし、報酬を5倍ぐらじもらひえる』と、勝手に変えて情報料を変えたりとかします。

ですが、小説の内容を大幅に変えることは（多分）ないと想いますので、ご了承ください。

また、『数日間更新しなかつたにもかかわらず、読者が数人いると『うー』とは、愛読してくれている人がいるのか?...』などと思いつつ、書いております。もしそうなら更新が遅くなつたのは申し訳ないです。

更新はいつするか決まっていませんが、ゆっくり書いていきたいと思います。

長くなりましたが、これからも『』の、小さな勲章を『』をよろしくお願いします。

## 第5話 森と山の大怪鳥

翼口。

アッシュは朝早くからジョンの店へ向かった。

田舎はヤンクックの情報だ。

「あらあ、アッシュちやんじやない」

「どうも、ジョンさん」

「ええ、ママ」

「はは・・・」

ジョンはいつも夜遅くまで働き、朝も早いのに、全然疲れた様子はない。

「どうしたの? ヤンクックの情報かしら?」

「ええ、まあ・・・」

(わすがにバレバレか・・・)

アッシュは『このひとの周りで悪い事はできないな』と思いながらも、いちいち事情を話さなくて理解してくれるジョンを頼もしくも思った。

「ふふん、良い情報よ。依頼は今回も村から出るわ」

ジェインが自信たっぷりに言つ。

「え？ 集会所じゃなくて？」

アッシュはてっきり王国騎士団が取り逃がしたもののが依頼としてこの村の集会所に来るものとばかり思つていた。

「ええ。今回のイヤンクックは『ウォレフの森と丘』で発見されてしまだ王国騎士団は発見してないやつだから、一番近いこの村が被害を受けやすいついでことで村長が依頼を出すことになつたのよお」

「へえ・・・確かに、『一サカの森と丘』よつ近いな・・・

(ほとんどのハンターは村長に依頼が来ることは知らないハズだ。  
これは上手くいけば受けられるかもしれない・・・)

「今日は、オマケしないわよお、これも商売だから」

「ええ。充分金を払える情報ですよ。ジェインさん

なんだかんだ言って結局割引してくれた情報料を払い、ジェインに礼を言つとアッシュは家に戻つた。

「へえ、今回も村の依頼なんだ」

朝食を摂り終えた後、アッシュはリンクにジェインの情報を話した。

「ああ・・・」

「じゃあ、今回も受けられるかもね」

「やうだな、出来れば受けたいところだ」

「いや、受けろ。」

「はいはい・・・」

アッシュは『すぐにでも村長ことこうじに行こう』とリンが急かすの  
で、仕方なく歩きながらイヤンクックとの戦闘法を伝授することに  
した。

「いいか、奴は耳が良いから音爆弾とかタル爆弾の爆音で怯む。こ  
れは絶対に覚えておけ」

「・・・ドスランポスのときは普通に戦ったのに、なんでイヤンク  
ックになつたら小細工使うのよ?」

リンが納得いかない、といった顔をしている。

「ドスランポスまでは大体、小細工なしでなんとかなるもんなの。  
でも大型の竜となると、慣れない「ちは罠とかが必要なの」

「・・・そんなに強いの?」

「ああ、強い。といつても、慣れればある程度どんな行動をとるか  
わかるようになるから、そうなつたら小細工なしでも勝てる」

「へえ・・・アッシュはわかるの?」

「わざわざ

「・・・」

ふふん、と腕を組んで偉そうにするアッシュを、リンは胡散臭そうに見る。

「まあ、とにかく、音爆弾と小タル爆弾を渡してから使え

アッシュに渡されたものをリンが眺める。

「ありがと・・・アッシュは?」

「俺は今回、道具を使わず戦う

「なにそれ、あたしだけ小細工?」

リンが不満そうにアッシュを睨む。

「俺は慣れるからな。なくともいいし、お前が道具を一つ使つかを判断出来るか見てみたいしな

「へえ、試されてるわけ?」

「まあ、やつこいつだな。もうひと無理に使つ必要はないが

「つよーかーい」

「・・・ふてくられるなよ」

「なんの」とかしり?」

リンがわざと顔を向いて言ひ。

(なんだか子供みたいだな・・・)

そんなリンを眺めながら、アッシュが、ふつと笑う。

「・・・あ、わづわづ。奴がキレイいとときは効かないからな」

「なんで?」

「知らん。わざと怒りのパワーだ」

「・・・」

「まあ、とにかく、怒つてゐるときは見た目でわかるから、こつぺん  
みとくとい」

「見たくないなあ、『幽霊』でしょう?」

「ああ、ジン・・・」

アッシュは『ジンインさんの鳥バージョンみたいなもんだ』といお  
うとして、止めた。

「なに?」

「……なんでもない」「

(聞かれたら殺される……)

「……変なの」

じばりく躊躇ながら歩いてくると、村長の家が見えてきた。

「そんだけ～」

リンが手を振って、椅子に座つていつこじていた村長を呼ぶ。

「ん・・・おお、アッシュとコンか。どうした? イヤンクックの依頼か?」

「は、はあ・・・

(なんだかこいつバーバレだと、村中にバーレてるんじゃないからって思えてくるな・・・)

「すい、村長。なんでわかるの?」

「お前達の考へる」となんぞお見通じじゃい

村長が、せつせつほと笑う。

「へえ～」

『歳をとると人の心でも読めるのかしら』などと思いつつ、リンが感心する。

「そ、そりですか・・・」

「それで、その依頼書だけぞ・・・今ある?」

「ほつほつほ、あるぞい」

村長がわつ、と依頼書を差し出す。

「おおっ」

アッシュが歎声ともつかない声をあげる。

「やつたー受けられるー」

同時にリンも声をあげる。

「ほつほつほ」

ここまで来れば他のハンター達に依頼をとられることはないが、なんとか急いで依頼を受けると、早速『ウォレフの森と丘』に行く事にした。

二人は、『ウォレフの森と丘』に到着し、テントを張った。

「よし、これでいいわね」

「ああ、じゃあ早速イヤンクックを捜すとするか」

そういうと、一人は離れないようにしながら丘の方へ行くことにした。

「やつぱり、分担するつづるのはダメなの？」

リンが問いつ。

「ああ、敵に気づかれずに知らせる方法がないからな。それに、気づかれた後でも知らせる前にやられる可能性もあるしな」

「・・・あたしが？」

リンがむつとした顔で言いつ。

「いや、俺だけ可能性はなくはない。慣れてるからって、『絶対』なんてないしな」

「あら、意外と謙虚なのね」

「大人なんだよ」

アッシュは、フフンと笑つ。

「はいはい・・・」

それからじぎじぎ歩く。

「・・・やつぱり、すぐには見つからないのかなあ」

「デカいから、結構見つかりやすいんだけどな・・・」

二人が辺りを見渡しても、アプトノスがのんびりと草を食べていたり、ぼーっとしていたりするばかりで、イヤンクックの姿は見当たらない。

「・・・どうかほかの場所に行つた可能性は?」

「さあなあ、モンスターの考えることなんてわからないしな」

「・・・まあ、捜すしかないか」

リンが、はあとため息を吐く。

「・・・」

その時、アッシュは遠くから大きな羽音が近づいて来る」とに気が付いた。

「・・・!?

遅れて、リンもそれに気付く。

「・・・」

初めての飛竜クラスのモンスターとの戦闘を前にしてか、リンの表情はいつになく真剣になった。

バサツバサツ、と大きな羽音が移動する。

「・・・向こうだ！いくぞ！」

言つと、アッシュは駆け出した。

「あつ、アッシュ？！」

リンもそれに続く。

バサツバサツ、ドスン。

二人は、少し走ると、丁度地面に着地したイヤンクックを見つけた。

「いた！」

「クオツクオツクオツクオツ・・・」

イヤンクックが笑っているとも思えるように隠りながら、辺りを見回す。

「・・・！」

イヤンクックが二人の存在に気付く。

「リン、気を付ける！来るぞ！」

「う、うん！」

(ひええ、顔ノワツチー)

イヤンクックの奇怪な顔に、リンが怯む。といつか、ちよつとひいていた。

「クエニーノツツッ！」

イヤンクックが羽を広げ、敵と判断したアッシュ達を威嚇する。

「リン、俺は右に回るーお前は左だー！」

「了解つ！」

(ええっと・・・)

走りながら、リンはアッシュの言つ『俺達の戦闘スタイル』とやらを思い出していた。

「ねえ、アッシュ。あたし達もガンドウイル達みたいに一人一緒に動いた方がいいの？」

家で休養をとっていた頃、リンはアッシュに尋ねた。

「ん？どうした？急に」

アッシュは珍しいものでも見たような顔をして言った。

「いや、この前……で、あたしが周りに注意しなかつたせいで、あんなことになつちやつたじゃない……？」

リンは色々な事を思い出してか、複雑な表情になった。

「……」

アッシュはそれを肯定も否定もせず、黙つて聞いていた。

「だからね……」

リンはそこまで言つて詰まる。

(まあ、言わんとせんことはわかる)

アッシュは『足手まといになりたくないのだろう』とリンの心境をなんどなく理解した。

「……まあ、なんだ。俺達の場合、一人で固まつて動くのはあまり良くない」

「……え？ なんで？」

リンは『意外だ』といった表情をして聞いた。

「あの一人の場合、攻撃と防御のどちらか極端な武器を持っているから、あいつた形で戦える。けど、俺達の場合は防御に回る人間

「ない」

「なるほど・・・」

リンが納得した様子で頷く。

「俺達の場合は、どちらかといつと逆だな。一人とも離れてたほうがいい」

「え? じゃあ・・・」

『この前みたいな戦い方?』と聞きたそうなリンを、アッシュが説明を続けることで止める。

「いや、だからといつてこの前みたいに完全にバラバラに動くんじやないぞ。一対一の状態で、出来れば敵を挟んだ俺とリンの位置が直線になるのがいい」

『常にどちらかが敵の背後をとる』ってことね

「そういうことだ」

リンが頭の中でイメージしているのか、下を向いてうんうんと頷く。

「で、隙を見つけたら攻撃だ」

「うん・・・他には?」

「他には・・・ないな」

「・・・え？」

アッシュがあまりにもさうしたので、リンは呆氣にとられた。

「作戦つてのはあんまり練りすぎると個人の判断で行動がしつぶくなる。つてのが俺の考え方だ。だから、余計なことは言わない。・  
・ただ」

「『深追いはするな』でしょ？」

「ああ」

「了解」

(背後をとつて隙を見て攻撃、ね)

リンは考えを整理すると、アッシュの方に向いたイアンクックの背後に回った。

「クアアアアツー！」

イアンクックがアッシュをクチバシでついついと跳び掛る。

「はっーー！」

アッシュはそれを余裕すら感じられる動きで右に避ける。

(田の前にいるからって噛み付くつてわけじゃないのね・・・)

リンは、イアンクックの背後を維持し、焦らずに敵の行動を観察する。

「一。」

イアンクックが今度はしつぽを大きく振つてアッシュを攻撃しようとする。

「つー。」

ガアーン!!

その攻撃を、アッシュは大剣を盾にして防ぐ。

「おおらあつーーー！」

攻撃を凌ぐと、大剣を水平に振つて脚を斬りつける。

シユツ！

「つーかすつただけか！」

イアンクックはアッシュの攻撃を前方に跳ぶことで回避した。

「だああああつーーー！」

ザシユツ!!

「ツ！？」

着地した後で隙があると判断し、近い位置にいたリングがイヤンクックの脚の数歩前で回転、脚を斬り付けると、すぐにバックステップで距離をとる。

「クアアアアアアツー！」

思つたとおり、リンを狙つてきたイヤンクックが、歯みせついと首を伸ばす。

「はつ！」

リンはそれをさらに後ろに跳ぶことで回避する。

卷之二十一

アッシュが駆け寄り、イランケックの右翼を思いきり斬り付ける。

サシニシ---

( めー!!今度丑獣に当たった!!!)

イヤンクックの右翼から血が吹き出る。

「れでモテ 飛べたじでも遠くまで逃げる」とは出来ないだろ?」

(一)の調子ならいけるかも……!!

リンは初めて飛竜クラスのモンスターを討伐出来るかも知れない

「いつに間に高揚しつつ、それを抑えながらイアンクックの周りを円を描くように移動する。

(焦るなよ、リン)

イアンクックとの戦闘に慣れているとはいえ、少なからず緊張をしてこるアッシュがリンの姿を確認しながら思つ。

イアンクックは、今度はアッシュの方を向いて立っている。

(ーーー・チャンスー！)

アッシュに飛び掛かると予想して、リンが剣を構え、走り寄る。

「リン、フライングだ！ 気を付ける！」

「・・・え？」

イアンクックは、ゆっくりとアッシュの方を向くと見せかけて後ろに近づいてきたリンを睨み、尻尾で攻撃しようとしてきた。

「ー？」

リンは即座に止まるが、今から後ろに跳んでも間に合わない。

(避けられない・・・ー)

リンは咄嗟に『下手に避けようとするより直撃をへらつ可能性がある』と判断。

更に、双剣は防御に向かず、下手をすると折られる可能性があるので使えない。

衝撃！

「ぐつー。」

右腕と肩で尻尾の攻撃を受けるが、耐えきれず飛ばされる。

「うー。」

いなす様にして少し体をひいていたリンは、大したダメージは受けず、空中で左に一回転すると、地面に手をつき、受け身をとった。

地面に茂つた雑草が土埃とともに舞い上がる。

「まだだ！ 来るぞー。」

「ー。」

アッシュの頭にリונגがはつとすると、イヤンクックはリונגに向こうに直っていた。

「クアアアアツーー！」

イヤンクックが飛び掛かる。

リンはそれを右に跳び、一度ほど転がつて回避する。

その光景ばかりに気をとらっていたアッシュは、リンが無事だとわ

かると、ほつとした。

が、すぐに自分が攻撃のチャンスを逃したことに気づく。

(・・・くそつ！何やつてるんだ俺はーー！)

気を取り直し、武器を構える。

二人とも、先程のように距離を保ちながらイヤンクックを挟んでほぼ直線。

イヤンクックの周りを武器を構えた状態でじりじりと動き回る。だが、自分達からは仕掛けない。

イヤンクックも自分の後ろにもう一人が回りこんでいることに気づいているようで、首をしきりに動かして一人の動きを確認している。

「クアアアアアツツツ！！」

しばらくその状態でいると、痺れを切らしたイヤンクックがアッシュに向けて口から火を放つ。

(ーーー火を吐くの？！)

リンはそんな情報は知らなかつたので、少し驚くが、すぐに気を持ち直す。

アッシュが火を回避するのと同じくらいのタイミングで、リンが音爆弾を取り出す。

(・・・使つか!?)

アッシュは何をするか理解し、すぐにリンの近くまで走る。

「うひちよー！」

リンがイャンクックに向けて声をあげる。

「ー。」

それに反応したのか、イャンクックはリンに向き直る。と、同時に  
リンは音爆弾をイャンクックの顔面に投げつける。

「へりえつー！」

キィイイイイイイイイー！

「グエヒヒヒツツツーー！」

イャンクックが音爆弾の快音に驚き体をのけぞらせ、両翼を万歳で  
もするかのように広げて硬直する。

「へぐぞー！リンー！」

リンの前に駆け寄ったアッシュが大剣を構え、イャンクック目掛け  
て走る。

「ええー！」

リンが少し遅れてそれに続く。

「うおおおおおおおつ！！」

アッシュがイアンクックの無防備な腹部を斬り付ける。

ザシユツツ！！

（流石に硬いな・・・！）

アッシュの攻撃は腹部に直撃したが、致命傷になるほど深い傷にはならなかつた。

「まだまだあつ！！」

アッシュは地面に叩き付けた大剣を斜めにして柄の部分だけを動かし、イアンクックの左脚を刺すとそれを軸に右に移動。大きく回転する。

「だあああつ！！」

アッシュの地を這う大剣を飛び越え、リンが肩の後ろに両手の剣を構え、腹部を縦に斬り付ける。

ザザツツ！！

「おおらああああつつ！！」

続けて、回転していたアッシュがイアンクックの左脚の右側で止まり、回転の勢いを残したままの大剣を振り上げ、右翼を斬りつける。

それとほぼ同時のタイミングで、着地したあと体勢を整えたリンが回転し、腹部をさらに斬りつける。

「デシュツツツツツ！」

「ザザツ！ザザアツツ！」

大剣はイャンクックの翼膜を半分ほど裂いて止まり、リンの攻撃はイャンクックの腹部に四箇所の傷をつけた。

「ツ・・・ツグエエエエツツ！」

今まで時が止まっていたかのように、イャンクックが悲鳴をあげる。

アッシュが右に移動し、翼膜に刺さった大剣を引き抜きながら距離をとる。

リンも回転を止めると左に飛び、イャンクックの方を向いてバックステップで距離をとる。

数日前の戦闘が嘘のような連携だった。

そして、二人とも充分に距離をとると、同じ事を考えた。

（勝てる！）

その時。

「グアアアア！グアアアアツツ！」

イヤンクックは両翼を広げ、駄々をこねるよつに飛び跳ねる。

「一。」

それを止めると、くちばしから火が漏れ出すほど呼吸が荒くなり、目付きは正氣を失ったと思われるほどに鋭くなつた。

「リン、キレたぞー、気を付けろよー！」

「りょ、了解つー！」

リンは初めて見る大型モンスターの怒る姿に驚いたか、またはイヤンクックの形相に狼狽してか、少し怯んだ。

「グアアアアツツツーーー！」

イヤンクックが、がむしゃらにアッショウに突っ込む。

「つおつ？ー！」

アッショウがそれをイヤンクックの右側に跳ぶことで回避する、が。

「グワアツー！」

イヤンクックは首だけを動かして敵を睨むと、アッショウに向け火を吹いた。

「ー！」

ボオツー！

火は、アッシュが回避した後に右手で背後の地面に突き刺した大剣に当たった。

(え・・・? 予想してたの? !)

リンは、アッシュがイアンクックと戦い慣れているという事を改めて知った。

(『ちょっとカッコいいかも』なんて思ってしまった・・・)

そんなリンの心境を知らないアッシュは、大剣を引き抜くと距離をとるため一旦武器をしまづ、と。

「あつづ? !」

(・・・)

熱をもつた大剣に背中を仰け反らせて苦しむアッシュを、幻滅した目で見る。

「グワアアアアツ! -!

イアンクックが体勢を立て直すと、今度はリンに向かつてきた。

「うわつ? !」

首を振り、ものすごい形相で火を撒き散らしながら走り寄つてくるイアンクックを見て、一瞬動くのが遅れる。

(えつと・・・じつちだ!)

リンはヤンクックが左右交互に首を振っているのを見て、自分にあたる数歩前で左に火を吐くのを確認すると、左へ回避した。

「来いつ！」

回避した後、先程アッシュにしたようにひからを回へと判断し、背後に向き直つて構える。

しかし、そんなリンにはお構い無しに、ヤンクックは数歩走るとバランスを崩し、地面に倒れた。

「・・・」

リンが固まつたまま頬を赤くする。

振り返ると、アッシュがニヤニヤしていた。

「な・・・何よつて文句あるの?!」

リンが恥ずかしさを紛らわせるために怒鳴る。

「いえいえ、滅相も無い」

棒読みで答えるアッシュを思い切り睨み付ける。

(絶対、後で殴る)

そんな一人のやつとりに気が付かないヤンクックは起き上がると、

一人に向こう直る。

「ほ、ほらー行くわよバカアッシュ！」

「そうだな。・・・最後まで油断するなよ」

すぐに気を取り直し、構える。

今、二人は敵を挟んだ状態ではない。こうした場合は、左右に分かれて回避する。

立ち位置からして、リンが右、アッシュが左に避けることになる。

「グアアアアッシュ！」

避けられるという判断も出来ないのか、それともそうするしかないのか、イアンクックは比較的近くにいるリンに突進する。

（火を吐きながらじゃない。つてことは・・・）

リンは今度こそ、回避したら首だけこちらに向け、火を吐くと予想する。

「はっー！」

右に避ける。回避成功。

（あれは、さつきと同じ方法で来るな・・・）

リンと同じ事を予想していたアッシュは、間合いを詰める。

「・・・・」

イヤンクックは思った通り首をぐるりと回転させ、リンを睨むと火を吐いた。

「遅いっ！」

それを予想していたリンは難なくそれを回避する。

その瞬間。

ザシユツツツツ！

「グエヒヒヒツツ？！」

イヤンクックが凄い形相で鳴き声をあげ、のめのめに倒れる。

「え？ え？」

リンが困惑してイヤンクックを見る。ヒ、アッショウがイヤンクックの尻尾を斬り落としていた。

「グ、グアアアアツ・・・

「・・・」

見ると、イヤンクックは明らかに衰弱しており、田には先程までの鋭さはなくなっていた。

「まだ終わっていないぞ！気を抜くな！」

「うん！」

アッシュが言う様に、ヤンクックは衰弱してはいるものの、まだ諦めてはいなかつた。

「グアアアアツ！グアアアアツ！－！」

すぐに起き上がると、敵の姿も確認せず、周辺に火を吐く。

「え・・・？！」

リンはその行動を理解できず、困惑つ。

(・・・もう終わるな)

アッシュはそう確信した。

「グアアアツ！グアアアツ！－！」

ヤンクックはひたすら火を吐き続ける。無駄な抵抗とわかつても何とか生きようと必死なのだろう。

「・・・」

リンはそんなヤンクックの姿を見て躊躇つているのか、動かない。

(同情はしない・・・殺すも殺されるもお互い様だからな)

アッシュは心の中で語りかける。

だ。  
非情と思われるかもしれないが、ハンターの世界とはそういうものの

「来い！せめて次の一撃で終わらせてやる！」

アツシユは叫ぶ。すると、言葉が通じたのかはわからないが、イヤンクックはアツシユに狙いを定めると、決心したように突進する。

「グアアアアアアアアツツツツ！－！」

「うなぎのあわせがうまいなーーー。」

ヤンクックを討伐した後、一人はその場に座っていた。

「ねえ、アッショウ」

「ん？」

「あたし達、間違つてないよね？」

少しの間。

「アーティスト」

「え？」

「俺の考えがお前の考えじゃない。お前が『間違つてゐる』と思つて  
いるなら、ハンターをやめた方が良い」

「・・・酷い言い方」

「・・・悪い」

沈黙。

（もし、あたし達が・・・いや、ハンターがイヤンクックを討伐し  
なかつたら、村に被害が出てたかもしれないのよね・・・）

そう思つてコンの脳裏に、昔の光景が蘇る。

「・・・」

「・・・答えはでたか？」

アッシュの問いに、リンは答えない。

「・・・」

リンは、必死に生きようとしたイヤンクックの死骸を見つめる。

しかし、その眼に『無念』といった想いは感じられなかつた。

「わかんない」

「・・・」

「わかんないけど、多分、これでいいんだよ」

「……やつか」

アッシュはしたを向いて、ふと笑う。

「うん、あたしが迷つても何も変わらないもんね。やるつて決めた以上は最後までやる」

リンは自分に言い聞かせるように囁く。

「……よしー、リンー！」

言つてアッシュは立ち上がり小手の防具を外すと、せつと手を上げる

「ー」

「討伐完了後の『いつもやつ』だ。この前は出来なかつたけどな

「うんー！」

リンも小手の防具を外し、アッシュに駆け寄る。

ボスッ！

「『ぐつ？ー』

リンに小手を外してない手で腹を殴られたアッシュが奇怪な悲鳴をあげる。

「せつもの『お礼』よ」

「ね、根に持つなあ・・・」

気を取り直し、アッシュが困ったような顔をして、また手を上げる。それをみてリンが、ふふっと笑うと、アッシュの手を小手を外した手で叩いた。

パン！

二人はハイタッチし、お互の顔を見ると、なんだか可笑しくなつて笑つた。

少し休憩すると、近くのアイルーに頼んで「写真を撮つてもうう」とにした。

「・・・アッシュ、なんで顔隠すの？」

リンが「」、「」、アッシュはさり気なく顔を隠していた。

「ふふん、俺ほどの美男だと世界の女性が黙つて・・・」「ああ、やつぱりいい」

リンはアッシュの言葉を遮るが、もちろんそれが本当の意味だとは思っていない。

(そういえば、前も顔隠してたっけ……)

この前、集会所で見たアッシュの写真を思い出しながら、その理由を考える。しかし、わからないのでやめた。

「いたーおおーいーアッシューー！」

「？」

そろそろ帰らうかと思つていた時、声に気づいたアッシュ達が遠くから近づいてくる人影を見つめる。

「あれ？パグフィじゃない？」

リンが叫び、「声の主はパグフィだった。

「 Ganduylもいるな」

確かに、パグフィの後ろを重そうな大剣を背負つた Ganduylが追いかけるように走つていた。

「どうしたんだろ？」

「さあなあ」

「はあ、はあ、お、おま・・・『えり』

パグフイは、一人の前までたどり着くと、肩で息をしながら何かを伝えようとしていた。

「どうしたんだ……？」

「お前達、早く逃げる！」

遅れてやつてきたガンドウイルが叫ぶ。

「え、何……？」

何の事かさっぱりわからないリンが、ガンドウイルを訝しそうに見つめる。

「け、今朝、情報が入った」

パグフイが呼吸を整えながら喋る。

「情報？」

「も、もう村の近く、まだ来てやがった。田撃情報があつたんだよ！リオ……」

バサツバサツバサツ。

パグフイの言葉を遮って、大きな羽音が近づいてくる。

「え……？」

羽音に気づいた四人が空を見上げると、そこには悠然と空を漂う飛竜の姿があった。

「リオレウス・・・！」

「・・・来やがつたか」

パグフイは額に走ってきたことは別の汗を搔いていた。

バサツバサツバサツ。

恐怖を呼ぶ飛竜の羽音が段々大きくなると、その音は空が悲鳴をあげているよつにも聞こえてくる。

「グオオオオオオツ！」

咆哮。

「！」

イヤンクックの鳴き声などとは比べ物にならない迫力に、全員が緊張する。

バサツバサツ・・・ドスン。

草木をざわめかせ、愚かな四人のハンター達を見下ろしながら大地に『空の王』が降り立つた。

## 第6話 空の王

(最悪だ・・)

アッシュは目の前に降り立つた、全身を赤色の硬い鱗で覆われた飛竜、『空の王』リオレウスを睨み、思つ。

三角に近い顔面に、捕食者であることを知らしめる鋭く光る黄色い瞳。

首は長く、イヤンクック同様、胴からは前足の代わりに発達した巨大な翼があり、後ろ足の爪には毒があるとされている。

尻尾は首よりもさらに長く、3mほどある。

(俺はリオレウスと戦つたことはないが・・・大きさから見て、結構な大物だ)

これは飛竜には限らないが、モンスターは全長が大きいほど強力とされている。

目の前のリオレウスは、アッシュが過去に一度だけ別の依頼のときに追われていたそれよりも更に大きかった。

リオレウスは四人のハンターを睨みつけ、今にも襲い掛かりそうだった。

「おいおい、タイミング良すぎだろ」

パグフイがなるべく軽い口調で言つたが、顔は真剣そのものだった。

「・・・」

Ganduweilは沈黙したまま、リオレウスをただ真剣な表情で睨んでいた。

「！」

Asshuが、はっとしてリンを見る。

(そりいえば、リンはリオレウスを気にしていた・・・！)

リオレウスを見つけた途端、無防備に突っ込むのではないかと懸念けねんしていたが、どうやらそれはないらしい。ただ・・・。

(・・・?)

「・・・」

リンはリオレウスを見つめたまま、呆然としていた。

「・・・簡単には逃がしてくれそうになーな。皆、構えろー！」

Ganduweilの声を合図に、リンを除く三人が武器を構える。

「リンー！何してる、構えろー！」

「・・・う、うんー！」

アッシュの声に、はつとしてリンが武器を構える。

「グオオオオオオツツツー！」

リオレウスが咆哮する。

「！！」

あまりの音に四人が怯む。

「来るぞ！！」

ガンドウイルが叫び終えると共にリオレウスがアッシュを睨みつけ息を吸う。

「！」

ドゥッ！

リオレウスが火球を吐き出す。

イヤンクックのそれと違い、リオレウスの火球はアッシュ曰掛けて真っ直ぐに飛んできた。

「おつとー！」

パグフイの声。気づくと、アッシュの目の前にはパグフイが盾を構えていた。

ボオン！！

爆発でもしたのかと思つような大きな音。

「あつちい・・・」

パグフイは火球をなんとか堪ハラヒえた。

「すまん、パグフイ。助かつた」

「いいってことよ」

パグフイがアッシュに顔だけ向けて氣さくに笑いかける。

「お前達、どうする？隙を見て逃げるか、戦うか・・・」

リオレウスの動きを見ながら Ganduilel が問う。

「Ganduilel。お前達、リオレウスと戦つた経験は？」

「ない」

Ganduilel があつさつと言つ。

「俺達もだ・・・」

「参考になりそうなアドバイスはないといふ」とだな

「でも、四人もいるんだから勝てるんじゃないの！？」

リンが問うが、誰もそれに納得はしない。

「おいおい、俺達はお前らのために走ってきたんだぜ？もつくたくただつての・・・」

パグフイが言うと少し真実味が欠けるが、どうやら嘘ではないらしい。

「それに、お前達も先程までイヤンクックと戦闘をしていたのではないのか？」

Gandwilが「ううん、アッシュ達はイアンクックの戦闘からそんなに時間は経っていなかつた。

例え本人が大丈夫なつもりでも、実際の動きは好調の時には及ばないだろう。

「グオオオオオツ！！」

リオレスが四人に向け、突進してきた。

「つ！！」

それをアッシュ達は左、 Gandwil達は右に回避する。

誰か一人を狙つたわけではないリオレスの突進は失敗し、地面にのめつて倒れる。

「・・・でも、この前あんなに意氣込んでたんだから、討伐するつもりだつたんでしょう！？」

回避できたと確認してから、リンがパグフイに問う。

「ああ、でもな、慣れてない奴との戦闘に準備は欠かせないってもんだぜーー？」

「例えば・・・！」

「『罠』とかな！」

(『罠』・・・)

リンは自分が持っている『シビレ罠』を思い出した。

(でも、仕掛ける暇がない・・・！)

リオレウスは起き上がると、 Ganduile 達を睨みつける。

「逃げようにもヤツの方が足は速そうだ。逃げてる最中に後ろから攻撃されてお終い、なんて笑えねえぜ」

「・・・とにかく、どうにか逃げる方法を探すしかなさそうだな」

アッシュが渋々決心する。

「だなー！」

「グオオオオオオツー！」

リオレウスがGanduileに狙いを定めて突進する。

「いぐぞー！パグフィーー！」

「ああー。」

「リンー・よく敵の動きを見うよー。」

「アーッ解ー。」

ガンドウイル達はギリギリで避けるつもちらしく、リオレウスを睨んで構えている。

アッシュュ達はリオレウスから田を離さず、突進した後に先程のように倒れるだらうと予想。倒れると思われる場所へ少しづつ移動する。

「おひあつー！」

「ふんつー。」

ガンドウイル達はリオレウスがすぐに軌道を変更できないように、避けられるギリギリと思われる間合いで左右に分かれて飛び、そのまま数回転がる。

「ー。」

リオレウスは先程と同じく軌道を変えることが出来ず、数歩走った後に地面に倒れた。

「よしー、いまだーー！」

アッシュュとリンは武器を構え、倒れて隙の出来たりオレウスの左後

方から駆け寄る。

「グオオツ！」

「！？」

リオレウスは倒れた状態で背後に駆け寄る一人を睨むと、体を揺らして尻尾を右から左に大きく動かし二人目掛けて振る。

衝撃！

「ぐつ！」

「うあつー！」

勢いは大したことはないが、一人はガードが完全に出来ていない状態でその攻撃を受け、後方に飛ばされる。

「無事か！？」

「つ・・・ああ！」

「平氣よー！」

ガンドウイルの声に受身とり、バックステップで距離をとりながらアッシュ達が応じる。

リオレウスは起き上ると身を低くし、大きく羽ばたく。

「飛び掛るぞー！」

パグフイが叫ぶように、リオレウスはリンを狙い飛翔した。

「……」

「させるか！」

アッシュはリンの前に出ると、大剣で防ごうと構える。

衝撃！

「つ……！」

あまりの威力に大剣だけでは受けきれず、衝撃が体中に伝わる。

後ろに突き飛ばされたかけたところを、リンの手を借りて止まった。

「つ……大丈夫！？」

「ああ！」

(なんて威力だ……！)

即座に体勢を立て直し、リオレウスを睨む。

リオレウスはアッシュを蹴った後、そのまま空へと飛んでいた。

「今度はこっちか……」

パグフイが構えると同時に、リオレウスは息を吸う。

ドウツ！

リオレウスはパグフイ目掛け、火を放つ。

「おらつ！」

ボオン！

パグフイはそれを左に跳んで避ける。

しかし、リオレウスはすでに次の火球を放つために息を吸っていた。

「まだ来るぞ！」

「...」

ドウツ！

リオレウスは間髪いれずに火を放つ。

「くそつ！」

ボオン！

パグフイは毒づきながらそれを盾で防ぐが、少し遅れたためにバランスを崩し、シリもちをつく。

ドウツ！

「なにつー？」

更にもう一発。パグフィイは無防備。

「パグフィイー！」

アッシュが叫ぶが、ここからではどうにもならない。

ボォン！

「ぐつ・・・おつ・・・！」

「！・・・ガンドウイル！？」

見ると、ガンドウイルがパグフィイの前に立っていた。

ガンドウイルは大剣での防御が間に合わないと判断したのか、両手を顔の前で交差させて火球を防いでいた。

「大丈夫つー？」

リンが叫ぶ。

「俺のことはいい！今は敵を見ろーー！」

「ーー」

ガンドウイルの気迫に圧され、リンがびくつとする。

バサツバサツバサツ。

リオレウスが余裕を感じさせぬほどじゅくじと下降する。

無防備にも思えるが、物凄い風圧で近づくビードではない。

(二)のままじゃまずいな・・・

アッシュがなんとかならないかと打開策を考えるが、敵の行動を把握できていないので、どうにもならない。

(それに比べて・・・)

リオレウスを見ると、体に無数の傷があつた。

おそらく、今までに何人ものハンターと戦闘を繰り返して来たのだ  
らう。

(さつきの尻尾で攻撃してきたことといい、かなり戦い慣れている。  
・・・)

バサツバサツバサツ・・・ドスン。

「グオオオオオツ！」

リオレウスが着地すると、愚かなハンター達を嘲笑つように咆哮。

一方的な状況のため、ハンター達を緊張させるには効果があった。

「・・・ちくしょう！」

パグフイが苛立つた声を出す。

(俺のせいで Gand-Wyil に傷を負わせりまつた……)

パグフイが目の前に立つ Gand-Wyil を見る。

「はあっ、はあっ……」

Gand-Wyil はなんとか大剣を持って構えてはいるが、明らかにダメージが大きいとわかるほど辛そう<sup>つら</sup>な表情だった。

(ちくしょう!あのトカゲ野郎……)

「Gand-Wyil、しばらく休んでてくれ

「ぐつ・・・すまん・・・」

Gand-Wyil が申し訳なさそうに言い、邪魔になるといけないと思つたのか少しずつ離れていくが、パグフイにはその言葉が痛く感じられた。

(謝るのは俺のほうだぜ……)

パグフイはもう一度『ちくしょう』と小むく呟く。

「つおおおおっ!」

敵の攻撃の後ではこちらが攻撃するチャンスがないと判断したのか、パグフイは槍を構えてリオレスに突っ込む。

「やめろー！パグフイ！」

（危険だ！真正面からじや攻撃できたとしても、反撃を受ける可能性が高い！）

リオレウスはパグフイを真正面に捉え、大きく息を吸う。

（火球だ！）

パグフイはそう判断すると、リオレウスが口を向けた瞬間、右に回避。

ドゥツ！

「遅え！」

火球を避けた後、パグフイはリオレウスの隙だらけな顔面にガンランスを突き付ける。

「ぐりえー！トカゲ野郎！」

ボオン！ボオン！ボオン！

続け様に三発、ガンランスが火を吹く。

「グオオオオオオツ！？」

顔面に攻撃をまともに受けたりオレウスはたまらず仰け反る。

「おおおおおつ！」

「だああつ！」

少し遅れてアッシュとリンが攻撃。

ガアアアン！

「！」

アッシュの攻撃は翼に当たるも、弾かれる。

ザザアツ！

リンはリオレウスの脚を狙い、攻撃が弾かれる事はないが、浅い。

「はつ！」

リンはすぐに距離をとるのに対してアッシュは体勢を崩していく無防備。

「グオオオオツ！」

アッシュは『まづい！』と思うが、リオレウスはよほどパグフィに腹が立つたのか、既に少し距離をとっていたパグフィに突進する。

「ちつ！」

パグフィは舌打ちをすると巨大な盾で防ごうとする。

衝撃！

「ぐおつーーー！」

リオレウスは闇雲に突進しただけだが、重量の差のために盾を構えていたパグフイが後方によろける。

「無事か！？」

アッシュの声。幸い、リオレウスはパグフイと接触した場所で停止し、追撃を受けることはなかった。

「氣にすんなー平氣だ！」

パグフイが答えるが、アッシュは飛竜と衝突した時の衝撃を知っていたので、まったくのノーダメージということはないだろうと想像した。

（やつぱり、罠もなじじゃきつにな・・・）

アッシュは『イヤンクックを討伐する』とばかりに氣をとられていたせいで』と悔やむが、今はそんなことを考えていっても仕方がない。

（くわつーーのままじゃまた・・・ー）

そこまで考えて、あることを思い出す。

「ー・・・・リンーーそつこねばお前、罠を持ってなかつたかー？」

その言葉にリンが、はつとする。

「う、うん、でも・・・」

「なんで早く言わないんだ！！」

『仕掛ける暇がない』と言おうとするリンの言葉を遮り、アッシュがリンを責めるように言ひへ。

(な、なによ・・・)

リンは急に怒鳴られて複雑な気分になる。

「・・・すまん。・・・とりあえず、罠を張るのにはijiijiや危険だ。俺達のことはいいから、逃げ道に仕掛けに来てくれ」

「う、うん・・・」

アッシュの真剣な表情に気圧されて、リンが走つて行く。

(くそつー!リンにあたつたりして・・・らじくもない)

リオレウスがリンを追わないかと気を配るが、リオレウスはパグフィイが気に入らないらしく、睨み付けている。

「どうやら惚れられたらしいな」

パグフィイが軽口を叩くが、状況は芳しくない。

(全員疲労した状態。俺はダメージは大きくないが、やつきのガンドウイルのダメージが心配だ。それに・・・)

ちらりとパグフィイを横目に見る。

(パグフイはそのことで苛立つている……)

『下手な真似をしなければいいが』と懸念しながら構える。

「グオオオツ」

リオレウスが唸るが、攻撃はしてこない。

(攻撃を待っているのか？・・・このままじゃ、パグフイがまた突つ込むかもしね。その前に俺が囮になるか・・・！)

「おおおおおおおつ……」

わざと大きな声を出して「あら」注意を叫びつくる。

「……」

狙い通りリオレウスがアッシュの方に顔を向ける。

「いくぜつ！－！」

パグフイも槍を構えて疾走する。

「－」

リオレウスは右と正面から一斉に攻撃を仕掛けてきたことに気づくと、体を持ち上げ大きく息を吸う。

(火球か・・・！?)

しかし、さつきまでとは動きが違うと判断すると、一人は下手に近づくのを止める。

ボオオオンー！

「つおつー」

「ーー」

リオレウスは一人のどちらかを狙うことはせず、地面に火球を放ち翼を羽ばたかせて後方に跳ぶ。

幸い、一人は止まっていたために直撃することはなかつた。

「野郎・・・つー！」

黒煙が止み、パグフイがリオレウスを睨む。

（遠くで攻撃を待つっていても反撃のチャンスはないし、こちらから攻撃しても今のように避けられでは意味がない・・・ー）

多くのハンターが散つた理由を体感しながら、アッシュは考え続ける。

（隙があるとしたら、突進して倒れたときに尻尾が当たらない場所から攻撃するか、さつきのように火球を放つたあとくらいか・・・）

『しかし、前者は難しいし、火球の後を狙われることをリオレウスも考えているかもしない』とまで考えて、ある別のことと思う。

(「）なんじや、またアイツに笑われるな・・・）

『お前は心配しそうなんだよ』と、よく笑われていたことを思い出す。

確かに、アッシュは色々なことを考えすぎるために思い切った行動が苦手だった。

「よしー。」

アッシュは何かを決意すると、リオレウス目掛けて走り出した。

その頃、リンは罠を仕掛けるために移動していた。

「はあっ、はあっ・・・」

（・・・）の辺で大丈夫かしら・・・

罠を張るには道が狭くなっていたため少し走って広いところに出たが、まだアッシュ達が見えるほどの距離だった。

リオレウスがこちらに来ないか警戒しながら、もしリオレウスが来る前に仕掛けが作動しても人間くらいなら通れるように、左右にある程度の余裕を持たせて罠を仕掛ける。

罵を仕掛けながら、リンには『気』になることがあった。

(あのリオレウス……あれば、リオレウスなの?)

もちろん、他のハンターにそう聞えば『間違いなくリオレウスだと返つてくるだろう。

だが、リンの知つているリオレウスは違つた。

(姿は同じ。でも、色が違う)

だからだろうか、リンにはあのリオレウスを見てもなんの憎悪も沸かなかつた。

結局、よくわからな『ままで』『後でアッシュに聞こつ』と思い、考えるのをやめる。

そして、 Ganduile のダメージ。

(あれから攻撃に加わってなかつたけど……もしかして動けないくらいだつたとか……?)

リオレウスの火球の威力の程度がわからないリンは、『まさか』とその考えを否定する。

(……それにしても、アッシュも Ganduile 達も、なんであるなに弱氣なのかしら?)

『四人もいれば勝てるのでは』という考えを捨てきれないリンが納

得いかずにもつとした。

(確かに、さつきまで不利だったけど・・・それは相手の行動がわからなかつただけで、慣れればなんとかなるんじやないの? )

しかし、『この前のよつに迷惑はかけられない』といつ思いもあるので複雑だつた。

「・・・よしつー。」

腰を仕掛け終えるとリンはアッシュュ達を呼びに戻ることにした。

アッシュュは走りながらとにかく単純なことだけを考えた。

(奴を怯ませて近づく。そして攻撃だ! )

リオレウスとの距離が縮まるごとに、リオレウスは他の敵が動かないと見てアッシュュに狙いを定める。

「へりえつー。」

アッシュュは腰にしまつてあつた剥ぎ取り用のナイフをリオレウスの眼を狙つて投げた。

「…」

流石の飛竜も眼は弱いのだろう。首を持ち上げて攻撃を躱す。

「もうつた！」

その隙を逃さずアッシュが斬り掛かる。

デシユツ！

「グオオツー！」

引きずるようにして持っていた大剣を水平に振り、リオレウスの脚にヒットさせる。

続けて、アッシュがナイフを投げたと同時に好機とみて走り出していたパグファイが突進。

「…」

リオレウスが少し遅れてそれに気付き、先程のように体を持ち上げ、大きく息を吸う。

「させらかよつー！」

ボオン！

「！？」

パグファイのガンランスは射程距離には及ばなかつたが、爆音にリオ

レウスが驚き、火球を吐くのを止める。

「おおおおおおおおおおつー」

猛烈な声とともにパグワイの後ろから姿を現したガンドウイルが、リオレウスの首目がけて大剣を振る。

ドスッ！！

大剣は硬い鱗に阻まれ深く刺さることはなかつたが、それなりのダメージにはなつたハズだ。

「ぐつ・・・！」

大剣を持ったガンドウイルの表情が苦痛に歪む。

（！・・・・やはり、ガンドウイルはさつきの火球で火傷を負つて  
いる・・・！）

ガンドウイルは激痛を耐え、それをなんとか堪えて大剣を抜き、構え直す。

その時、遠くからリンの声が聞こえた。

「アツシュー！罠仕掛けたわよー！」

「ー！」

その声に反応するが、今はリオレウスから目を離してはいられない。

「グオオオオツ！」

リオレウスは首を斬られ怯んでいたが、体勢を立て直すと改めて火球を吐きだした。

ボオン！

「ぐつー！」

「ぬうつー！」

距離をとっていたパグフィはそれを回避できたが、ガンドウイルとアッシュは近くにいたために避けられない。

二人とも大剣でガードするが、爆風に耐え切れず後ろによろめく。

「・・・・つー！」

爆風が止むと、アッシュは一人に視線で合図する。

「・・・ついでに叫ぶ。

「走れええええつーー！」

言い終える前に三人とも振り返り、一斉に駆け出す。

「ぬおおおおつー！」

皆、必死の形相で走る。

端からみたら面白いくらいだが、本人たちは真剣そのものだ。

「グオオオオツ！」

後方に跳んでいたリオレウスが着地して体勢を整えると咆哮。簡単に逃がすつもりはないらしい。

「早く！ 急いで！」

リンが手を振つて三人を呼ぶ。

「つおおおおおつー」

（コンのところまでもう少し距離があるー！）

そう思つた瞬間、ガンドウイル達の動きが鈍くなつた。

「ー」

（やつぱり、一人ともダメージが残つてるかー）

ガンドウイルはいうまでもないが、パグフィも火球を一発と突進を防いでいる。

疲労は当然のことだが、ここにきての失速はキツい。

（俺が囮になるかー）

アッシュはその場で停止。振り返つて大剣を構える。

「来い！」

言われずとも、リオレウスは翼を大きく羽ばたかせ、飛び掛かるところだつた。

「アッシュ、すまねえ、たすかつ・・・」

パグフイが振り返りアッシュに礼を言おうとするが・・・。

「つー？」

リオレウスはアッシュを飛び越え、パグフイを狙つてきた。

「なつ・・・・！？」

アッシュは咄嗟に追いかけるが、間に合わない。

「パグフイ！」

リンが叫ぶ。

どんづー！

『このままでは衝突する』と思われた時、パグフイが何かに突き飛ばされる。

「つー・・・ガ、ガンドウイル！？」

ガンドウイルはパグフイを突き飛ばすと、大剣を構えず、両手を伸ばした。

(受け止める気かー？無理だー！)

アッシュが『避ける』と叫ぼうとするが、その数メートル後ろにリンが立っていることに気がつく。

「ー。」

リンもそのことに気がつく。

(また、あたしのせいで・・・ー？)

リンも『避けて』と叫ぼうとするが、もつ間に合わない。

「グオオオオツ！」

リオレウスは Gandwyl を邪魔だと判断したのか、そのまま構わず脚の爪で攻撃する。

衝撃ー！

「ぐつ・・・おお・・・つーー。」

「ーー。」

パグフイがその状況に絶句する。

なんと、ガンドウイルは後方に押されながらもリオレウスの攻撃を受け止めていた。

「つーーーーーばかなーーーーー」

アッシュはあまりの出来事にそんな言葉を漏らす。

「！？」

リオレウスも『自分の攻撃が受け止められたといつことが信じられない』といった表情になる。

しかし、アッシュが驚いたのはそれだけではなかつた。

「・・・これは！？」

リンもアッシュと同じことに気付く。

リオレウスの攻撃を受け止めるガンドウィルの体からは赤いオーラのようなものが立ち籠めていた。

「これは、『鬼人化<sup>きじんか</sup>』だ！！」

『鬼人化』とは、双剣使いの中でも達人クラスの人間にしか自由に使えないとされる奥義だ。

一時的に使い手の能力を大幅に上昇させるが、その分、反動も相当なものになる。

「た、たしかに、双剣使いでなくとも『鬼人化』を使うことは理論上可能と言われているが・・・」

双剣使いの『鬼人化』は敵に息もつかさぬほどの高速で攻撃するた

めのものだが、 Ganduile のそれは『素早さ』ではなく『力』だった。

「どうなつてやがるんだ……？」

パグフイが『訳が分からぬ』といった表情をしている。

（パグフイが驚く様子を見た限り、発動は初めて！しかもGanduileはさつきのダメージが残っている……）

『すぐにやめさせなれば』と思い、叫ぶ。

「やめる、Ganduile！ 体が持たなくなるぞ！」

Asshuuは言うが、 そつじょつとも出来ないだらう。

「ぐつ・・・・！」

「グオオオオツ！」

リオレウスが大きく息を吸うと、Ganduile目掛けて火球を吐き出した。

ボオオオオン！

ひとりわ大きい音を出して火球が爆発。Ganduileは防御する暇もなく直撃を受け、リオレウスは反動で遠く後方へ飛ぶ。

「が・・・はあ、つ・・・・！」

Ganduweilは力尽き、その場に倒れる。

「ガンドUIL!!」

アッシュとパグフィイが駆け寄る。

パグフィイは槍と盾を捨て、ガンドUILの左手を肩にまわす。

(武器なんか後でアイルーに運ばせでもすればなんとでもなる…)

アッシュはリオレスから田を離さず、大剣を構える。

「グオオオオツ!!」

着地したリオレスが咆哮する。

リオレスが今度はアッシュを狙い、息を吸う。

その少し前にパグフィイがガンドUILを引きずるようにしてリンの元に到着。

「アッシュー早くー!!」

リンがアッシュを呼ぶが、今はそれどころではない。

「ウツー!!

「くそつー!!」

毒づきながらリオレスの火球を大剣で防ぐ。

ボォン！！

「うおおおおおひー！」

防いだ後、すぐさま振り返り、全力で走る。

「シン！スイッチを押せ！ー！」

「う、うんーー！」

アッシュに叫ばれるとコンはシビレ眼を睨こつきり踏みつけた。

ガチッ！！

重い音とともにスイッチが入る。

(眼の辺りを通れるか・・・！？)

あと何秒で眼が発動するかわからないが、アッシュは直進する」と  
にした。

「グオオオオオツ！ー！」

リオレウスがもう一度大きく息を吸う。

ドゥン！！

「アッシューー危ないーー！」

「？！」

リンの言葉に振り返ると、火球がもの凄いスピードでせまっていた。

（今避けたら Gand-Wiil たちに当たる…）

ボオン！！

「ぐおつ…」

「アッショー？」

防御する間もなく背中から火球を受けたアッショウは前方に飛ばされ、数回転がる。

ダメージは大きかったが、幸いなことに大剣は背中にしまっていたので、多少ダメージを減らすことができた。

「グオオオオオツ！！」

リオレウスは体勢を立て直すと、すぐさま突進してきた。

「アッショー…」

「ぐつ…」

リンがアッショウに近寄り手を差しのべると、アッショウはそれを掴んで立ち上がり、二人ともシビレ罠の範囲から抜け出す。

・・・・・バチバチバチッ！！

「グオオオオオオオオツー！？」

全員が罠の範囲から出た瞬間、罠が発動し突進していたリオレウスがそれに掛かる。

「はあつ・・・はあつ！！」

「早く・・・医者に・・・！」

全員、今は罠に掛かつたりオレウスよりもガンドウイルのダメージの方が気になり、急いでその場を離れた。

リオレウスが見えなくなつた頃。

アッシュは負傷していたため、パグフィイがガンドウイルを引きするようにしたまましばらく歩くが、まだキャンプには距離があつた。

ぴ―――――つ――！

パグフィイは先程から指笛を鳴らすのをやめなかつた。

通常、戦闘続行は不可能と判断されたハンターは、事前に契約金を払っているアイルー達に（手荒だが）運ばれることになつてゐる。

そして、そのアイルー達を自主的に呼ぶ合図が指笛だつた。

ぴ―――――つ――！

「パグフイ・・・」

リンが声をかけるが、その後に続く言葉が浮かばない。

「あくしょう！なんで来ねえんだ！ケソ猫ども！！」

U - - - - -

ハンターが死亡した場合でもアイルー達はハンターをキャンプまで運ぶ。

アイルーが来ない理由には一通りあつた。

そして・・・。

(手荒に動かすと生命の危険がある場合・・・つまり、ほとんどが  
もつ手遅れの場合だ・・・)

状況から考えて、後輩のは明らかだつた。

しかし、ハケフイはそれを受け入れられず、指笛を吹き続ける。

— ८ —

「……………・ひなせた」

Gandwylが口を開く。

「…………ガンドUIL！？」

皆、ガンドUILに視線を向ける。

「俺は……」

「ガンドUIL！喋るな！今、医者のところに連れて行くからな！」

パグフイが励ますように言つたが、実際にそうなるにはかなりの時間が必要だった。

「いいんだ……それより……」

言ひつと、ガンドUILはリンの顔を見つめる。

「……」

それを察すると、リンはガンドUILの前に立つた。

「やはり……似て、いるな……」

ガンドUILが、ふつと力無く微笑む。

「…………？」

「…………お嬢ちゃん。あんた、ガンドUILの恋人だつた奴に似て

いるんだよ

「え・・・？」

「そりゃ、それで・・・」

アッシュは納得するが、リンには何の事だかわからない。

「しかし、君は・・・アッシュでは、ない・・・」

（もうこの世にいないアイッシュのお嬢さんを重ねていても、アッシュには関係ない）

そう理解してはいたが、それでもリンの姿に惹かれていた。

「・・・」

リンはこんなときにも出来ない自分に苛立つた。

「ひーーーーいいん、だ・・・」

Ganduirusは痛みを堪え、リンの心中を察したようにいつにいつに、リンの頬に手を当てる。

リンは今にも泣き出しそうな表情でガンドウイルの顔をじっと見つめる。

「そんな・・・顔を、しないでくれ・・・」

涙を必死に堪えるリンにガンドウイルが消えそうな声で言いつ。

「う・・・う・・・」

リンは必死に泣きそうになるのを耐えようとするが、遂に泣き出しへしまった。

「・・・」

もう、誰が見てもガンドウイルがそつ長くないことは明白だった。

「・・・」

ガンドウイルが困ったような笑みを浮かべてリンを見つめる。

(泣いている顔もそつくりだな・・・)

ふつ、と笑うとガンドウイルは、そつと目を閉じた。

リンの頬から手が離れ、力無く垂れる。

「・・・ガンドウイル・・・?」

パグフイが消え入りそうな声で名前を呼ぶ。

しかし、もう、反応はない。

「ガンドウイル・・・」

屈強な戦士の亡骸は、仲間を守った達成感からか、穏やかな表情だった。

「・・・すまねえ・・・ガンドウイル。すまねえ・・・」

パグフイは叫び出すこともなく、ただひたすら、ガンドウイルの亡骸に謝り続けた。

アッシュは家に帰りつゝと、無言のまましばらく過ごした。

アッシュはリオレウスの火球によつて火傷をしていたのだが、このときはそれどころではなかつた。

「・・・・」

何があつたのか知らないペケも、なんとなく察したのか、黙つていた。

「・・・ねえ、アッシュ」

「・・・・」

返事はせず、視線だけをゆづくつとロンに向ける。

「あたしが・・・もつと・・・」

(もつと早く餓を張れば、もつと早くリオレウスの強さに気が付いて

いれば、もつと強ければ……

様々なことが浮かぶが、どれも言葉にならない。

そしてまた、この時アッシュは一つの事を決意した。

「……やうだな」

「……え？」

リンが顔をあげてアッシュを見つめる。

（俺は、また仲間を守れなかつた。そして……）

「お前が、もつと役に立つてたらな……」

「……『めん』

リンは突然のことに驚きながらも、謝る以外返す言葉が見当たらぬい。

「『めん』で済むかよ……」

「……つー」

リンは眉を寄せ、唇を噛む。

（ Gandウイルが死んだ時、俺は別のことを考えていた……）

「『』の前から、ちつとも成長しないじゃないか」

「・・・」

(『ああ、リンじゃなくてよかつた』と、心のどにかで思つていた。  
・・)

「何が『四人なら大丈夫』だ。飛竜を甘く見るな!」

「・・・」

リンは泣き出しそうになりながら、必死に耐える。

(コンニセモアハ、俺にとつて大切過モル)

「お前があのとき、まさりと突つ立つていなかつたら、ガンドウイ  
ルも助かつっていたかもな!」

言つアッショウの胸が痛む。

(もし、俺の力不足で・・・いや、どんな場合にせよ、リンが死  
ぬようなことになれば、俺は・・・)

沈黙。

室内には時を刻む時計の音と風の音しか聽こえない。

アッショウはソファに腰掛け、うつむいたまま。

リンはベッドの上でアッショウの言葉に耐えるように体を丸くしてい

る。

「・・・」

少しして、アッシュが口を開く。

(だから・・・)

「お前、才能ないよ。・・・ハンター、辞めろ」

「えつ・・・?」

あまりの出来事に、リンはアッシュの顔を見つめたまま硬直する。

アッシュはまづうとうつむいたままで、表情は伺えなかつた。

リンがなにか言葉を探すが、出てこない。

「出でいけ・・・」

「一・」

「出でいけー元々、お前とはこんなに長く付き合つつもりはなかつたんだ・・・。迷惑なんだよーいつも足引っ張りやがつて!」

アッシュはリンの顔を見ずに怒鳴る。

リンは何も言わず、じょりとアッシュを見つめていたが、急に立ち

上がり家を飛び出した。

「コソヤハナ! ?」

「ペケ！」

11

リンを追おうとしたペケをアツシユが止める。

—  
•  
•  
•

ペケはその場に力無く立ち、うなだれる。

## 長い沈黙。

外からは子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。

もう、夕方になる。

『これから、あの子供たちは家族の元で暖かな会話をしながら夕食を撮るのだろうか』などと考へる。

不意に、アッシュが口を開く。

「なあ、  
ペケ」

1

急に声をかけられてペケがびくつとする。

「はい、です」ヤ

「俺は、リンと出合ひでじれぐらいかな……？」

「……フケ円満びです」ヤ

「……やうか」

「……」

沈黙。

(短いな……でも……)

「なあ……ペケ……」

「はい、です」ヤ……」

アッシュはしばらく間を置く。

ゆうべつと、息を吸う。

「楽し、かつたなあ……つ……」

息を吐くと同時に言つたが、その声は震えてはつきりと言えなかつた。

リンのベッドの近くに立、リンが始めての依頼の報酬で『私の分』と言つて買ったブーゲーの時計が。

その隣にはリンの17歳の誕生日に知り合いの皆を呼んでバカ騒ぎをしていた中、二人にピントを合わせて撮った写真が。

窓のカーテンはもともと白だったが、リンが『これから暑くなるし』と言つて水色に変えた。

食器棚にはリンが『お揃いだね』などと笑つて、アッシュが『恥ずかしいから止めろ』というのも聞かずにそれぞれの名前を書いた食器が。

様々な物たちが、この家にもう一人の住人がいることを物語つている。

彼女の名残は、すぐには消えてくれそうになかった。

## 第7話 それぞれの決意

リンが家を出た次の日。

アッシュはいつもよりソファーの上で日が覚めた。

(・・・ソファーの上で寝てたのか)

とつあえずアッシュは身体を起こそうとする、が。

「つー」

リオレウスの火球による火傷の痛みに、起しそ途中で体が硬直する。

(一日経って悪化したか・・・?)

『医者に塗り薬でもさしつけておけば良かった』と今さら後悔する。

ふう、とゆっくりと息を吐き、痛みこみる汗を額に浮かせながら起き上がる。

その痛みをなるべく意識せず、なぜソファーで寝ていたのかを考える。

(昨日は長いこと飲まなくなつた酒を久しぶりに飲んだんだった)

（ひから、酔つてそのままソファーで寝たようだとわかった。）

『ベッドが空いているのにソファーで寝るなんて滑稽だな』と自嘲気味に思いながら身体を起こす。

はあ、とため息を吐く。

体がだるい。

無意識にベッドに手を向けるが、すぐ元へ逸らす。

キッチンではペケが朝食の準備をしている。

それを確認すると、とりあえずこれからのことを考えることにした。

(あのリオレウス……もう討伐されただろうか?)

Gandwil達は昨日の朝、リオレウスの情報があつたと言っていた。

それならば、もう他のハンター達が討伐していくてもおかしくはない。

(パグフィはどうするだろうか)

( Gandwilのこともある。そうじゃなくてもリオレウスは危険だ。早く討伐しなければこの村が被害に遭うかも知れない。出来れば俺も行きたいところだが……)

リオレウスの火球により火傷を負った箇所を意識する。

胴と腰の防具の隙間になつていていた箇所にそれはあつた。

一応鎧の下にも防具があつたのだが、これはオマケ程度のもので、熱を完全に防ぐことは出来なかつたようだ。

「・・・」

（少し動いただけでも痛みがある。これじゃ、足手まといになりかねないな）

この状態じゃリオレウスビック、ランボス相手でも倒せるかどうか怪しいところだ。

（しかし、やはりリオレウスの件は気になる。あとで集会所に行つてみるか）

結局、意識的にリンのことを考えずにペケの料理が出来上がるのを待つことにした。

しばらくして、三人分の朝食が運ばれてきた。

リンは朝になつて目覚め、知らない天井を眺めると、ふと『『『』』』  
『じだるづ』と一瞬思つた。

(あつ、そつか。宿に泊まつたんだつた)

昨日のあのやりとりの後、宿に泊まる持ち合せもなく村をつらつ  
ると歩いていた時、ペケがやってきて服など数着と今まで依頼をこ  
なしてきた報酬の内、リンの取り分だといって渡した。

その時言つたことも覚えている。

「ペケ、アッシュに『嘘つくならむつらシマシなやりかたにしる  
つて言つとこで』

リンは今まで報酬で分け前として得た分はほとんど貯金していたが、  
ペケが差し出した額は明らかにそれよりも多かった。

その言葉を聞いたときペケは一瞬、何か希望を見つけたかのように口を開いていたがすぐに『その意味』を理解して大袈裟に額いてい  
た。

ペケに『これだけでいい』ともらつた額の半分以上を無理矢理返し  
た後、リンは数ヶ月前に一度だけ泊まつたことのある宿に泊まつた  
のだった。

ゆっくりと体を起し、ふう、とため息を吐き出す。

(また、居場所がなくなっちゃった)

膝を抱えるようにしてベッドの上に座り、俯く。

そして、これからどうするかを考える。

(パグフイヒアッシュは、リオレウスを討伐しようとするかな?)

アッシュにあんなことを言われた後でも、それは気になっていた。

そもそも、リンには昨日のあの言葉がアッシュの本音だとは完全には信じられなかつた。

(信じたくないだけだつたりして……)

実際、リンは幾度となくアッシュの足手まといになつてきたし、仲間になるのも元々は少しの間だけの約束だつた。

(本当に、迷惑だったのかな……?)

人はいつも肝心な本心を隠すし、他人はそれを予想しても知ることは出来ない。

アッシュが今まで我慢していた可能性もある。

そう思つと胸が苦しくなる。

「ああっ、もうひーー！」

迷こを振り払いながらベビードの上に立ち上がる。

( 悪いでも仕方ないよね )

『 とりあえず何かしなきゃ 』 と着替え始める。

普段着に着替える途中、昨日まで使っていた鎧が目に入った。

「 ・・・ 」

リンはそれを手にとり、少しの間眺める。

色々なことがあって、やつとの思いで揃えることの出来たランポス  
シリーズ。

最後のランポスグリーブが家に届いて、リンが『 これであたしも少  
しはハンターらしくなったでしょ? 』 といった時のアッショウの表情。

呆れたような、喜んでいるような顔。

『 あの時にも、あたしを迷惑に思つていたのかな 』 と少し考えるが、  
止める。

( 立ち止まつても、何も出来ないんだ・・・ )

「 ・・・ よしひ 」

そつこつて自分を励ますように気合をこれると、普段着ではなく防  
具を装備する時の服に変える。

『集会所へいってみよ』と思つた。

とりあえず行動。そうしなければ何も始まらない、ところのが彼女の考え方だった。

(・・・もし、アッシュに会つたらどうしよう)

『アッシュがあたしを見つけて、失望したような眼を向けてきたらと思つと不安で手が震える。

しかし、それもまた『悩んで仕方ない』と考えるのを止めること

それでも、手の震えは止まらなかつた。

パグフイは目が覚めると、ベッドから身を起こし、すぐに田に入つたのは Gandウィルの遺品となつてしまつた大剣と鎧だつた。

「・・・」

(寝覚め悪いな)

そう思つてからすぐに『お前のせいじゃねえんだぜ』と心中でガ

ンドウイルに詫びる。

リンが泊まっているそれとは別の宿。

元々、パグフイ達はこの村に長く居座るつもりもなかつたので、宿にそれぞれ一つずつ部屋を借りていた。

ガンドウイルの死後、宿の主人にそのことを伝えて、彼が借りていた部屋を整理した。

(あの時、こここの主人は特に驚いてなかつたな)

きっと、そういうことは少なくないのだろう。

パグフイ自身もそれはわかつていた。

二人は色々な街や村を渡つてでしたが、前の日に笑顔で挨拶を交わしていたハンターが次の日から一度と見かけることがなかつた、なんてことは実際、幾度となくあつた。

(まさかお前がそくなつちまうとはなあ)

『それも、俺のせいで』と拳を握り締める。

(ごめんな、また足引っ張つちまつた・・・)

そう思い、大剣に向けて謝るよつに頭を下げる。

そして、決意する。

(ヤツは、絶対に俺が仕留める・・・・)

心の中でさう誓つとパグフイは立ち上がる。

(『復讐なんてバカバカしい』ってお前ならいつだらうな。そうだ、これは俺が勝手にやることなんだ。・・・それでも)

ガンドウイルが使っていた大剣を見つめる。

(それでも、今だけはお前のためにやることなんだって思わせてくれ)

心の中でさう叫ぶと、パグフイは身支度を始めた。

彼の頭の中には『リオレウスはもう討伐されてる』とこう考へはなかつた。

その理由を聞えば彼は『リオレウスの名前聞いただけでビビる奴等だ、それはねえだろ』とも言つだらう。

(出来るだけの準備は昨日のうちにしておいた。今、預けてあるガンドウイルの遺体を故郷まで運ぶ馬車は明日来る。それまでにヤツを仕留めるー)

支度を終えると、パグフイは『行って来るぜ』とこつて部屋から出た。

「ああて、と」

二ナはいつも時間に集会所に着くと、夜勤の娘に『おつかれさま』といつて交替すると、いつものように資料を整理し始めた。

他の村ではどうなのか知らないが、この村では一田中、集会所を開けている。

それは、ハンターの中には夜中に帰ってくる者も多く、そういうた  
者達が祝杯も挙げられないのでは申し訳ない、といつ理由からだつ  
た。

元々、ここは酒場ではないし、別に酒場はあるのだが酒場は夜中に  
は閉まるつえ、集会所に入り浸つても特に気にする者もいない。

実際、朝なのにも関わらず、二ナの田の前では酒盛りをしているハ  
ンター達がいくらかいた。

その他にも二ナはよく知らないが、中には夜のほうが活発に行動す  
るモンスターもいるらしく、そいつたモンスターの討伐に出かけ  
るハンター達もいた。

二ナは資料を整理しながら、彼らを眺める。

(はあ、こんなに男の人人がいるのに、なんで私つていまだに彼氏も

いないのかしら）

『周りの人たちは美人だとか言ってくれるけど、寄ってくるのは歳の離れたオジサンばかり』などと思いながら、二ナの頭の中には一人の男性が思い浮かぶ。

（あの人って鈍感だから、気づいてないんだろうなあ）

そしてまた、ハアとため息を吐く。

（元々は興味なかつたのにね）

ぼんやりしていた二ナはハツとして仕事にとりかかる。

その時、集会所に入つて来たハンターの中に見知った顔を見つけた。

「あっ、リンちゃん！」

二ナに声をかけられると、リンは少し躊躇うような素振りを見せたが、すぐに返事をした。

「おはよひびきやこます・・・」

彼女と話すとアッシュのことを聞かれそうな上、昨日のイヤンクック討伐依頼の報酬も多分まだもらっていないだろ。

面倒になるのを避け、他に一人いる受付嬢のうちどちらかに話かけるつもりだった。

「おはよう。今日は一人なの？」

『情報を見に来ただけなのかな』と思い、リンの胸中を知らない二ナが笑顔で問いかける。

二ナの言葉にリンは一瞬、顔を強張らせたが、二ナはそれに気付かなかつた。

「はい」

「・・・？」

リンが暗い表情でそう答えると、二ナが不思議そうに見つめてきた。

どうやら、イヤンクックの報酬のことには気付いていないようだつた。

「二ナさん。依頼の確認をしたいんですけど

「えつ？あ、うん。どの依頼？」

いつになく真剣な表情で問うソンヒ、二ナは一瞬戸惑つたが、すぐに手元の資料調べる。

「リオレウスの依頼です」

「えつ！？」

なるべく他のハンター達に聽こえないように注意しながらリンが言うと、二ナの表情が強張る。

「・・・うん。これ、ね。ハイ」

二ナは少しひこひこなくそう言つと、依頼内容が書かれた紙をリンに渡した。

#### 『飛竜リオレウス討伐』

依頼人：王国騎士団

依頼内容：ハンター諸君に飛竜リオレウスの討伐を依頼する。出来れば我々が始末したいところだが、奴を討伐しようとした部隊が全滅し、こちらにもかなりの被害が出ている。奴は現在、ニサカの森と丘か、その周辺に出没しているらしい。既に二つの村が奴の被害に遭っている。これ以上の被害を出さないためにも早急に始末してもらいたい。

人数制限：1パーティ（但し、本依頼に関しては緊急のためパーティの人数制限は6人までとする）

（まだ残ってる・・・！）

他のハンターに討伐されていないか懸念していたが、それは無用な心配だつたらしい。

（でも、確かこれが届いたのは昨日。皆が気付いてないハズはない）

『ということは』と辺りのハンターを見て、リンは言葉にならない憤りを感じた。

(二)の村にも危害が加わるかもしけないといつていつのこと……

「……これ、受けます」

リンが依頼書を、バンと叩きつけて言つ。

「えつーー?」

その言葉に二ナは驚きを隠せなかつた。

「ア、アッシュさんと一緒に……?」

かわうじて二ナがそう問ひ。

「いえ、一人です」

リンが至つて真剣な表情で、アッシュとパグフイが来る可能性をなるべく考えずに言つた。

「だつ、ダメよそんなの!—」

二ナが大声をあげた事で、少人数ながら騒いでいた集会所の中が静まり返る。

「あつ・・・・」

皆の視線が二ナに集中し、彼女は羞恥心に頬を赤く染める。

「……受けます」

改めてリンが言つ。

「だつ、ダメつ！ 一人でなんて危ないでしょー。」

二ナのその言葉に、周りのハンター達は『あのお嬢ちゃんが一人で狩りに出ようとしてるから止めるのか』と思つたのか、辺りに少しづつ話し声が聞こえ出すと、すぐにまた喧騒で溢れた。

事情を知らないハンター達の中から『好きにさせてやれよ』などという声まで聞こえてきた。

二人は睨むように見つめあつたまま、どちらも譲る気はなかつた。

そんな時だつた。

「じゃあ、俺が一緒に行つてやるよ」

あまりにも軽い調子の発言に、リンが不機嫌を懶そつともせず、そのままの声の主を睨む。

二人は『野次馬が勝手にその気になつただけだつ』程度に思つていた、が。

「パグフイ！」

リンが声の主を見て驚く。

「よつ」

パグフイは片手で挨拶をすると、リンの横からカウンターに身を乗り出すようにして二ナを見る。

「姉ちゃん、俺が一緒なら文句ないだろ?」

パグフイは軽い口調だが、どこか威圧を感じさせる言い方で問う。

「えつ・・・で、でも」

二ナはたじろぎながらも、まだ納得できない様子だった。

「・・・」

パグフイは何も言わなかつたが、絶えず二ナに威圧を感じさせる視線を向けていた。

「うつ・・・わかりましたあ」

半ば泣きそうになりながら二ナが頷くと、パグフイは満足そうに依頼書にサインしだした。

「・・・これでよし」

パグフイが書き終えたあと、一応リンがその内容を確認する。

「え? 6人?」

リンが言つように、登録人数は6人と書かれてあった。

しかも、パグフイ、リン、アッシュと名前が書かれていたが、それ

以外には適当な名前を書いてあつた。

「一応、な。火傷か怪我で来れねえんだろうけど、もしかしたらアツシユも来るかもしないし、俺達みたいに現地で誰かと会う可能性もあるだろ？名前なんて誰も気にしねえしな」

「・・・来なかつたら？」

「そんときや別に『来なかつた』でいいんだよ。でも、ばつたり会つて手伝わせた挙句に報酬も無しじゃ、なんて言われるかわからんねえしな」

そう説明されて『なるほど』とリンが納得する。

「さあ！出発だ！」

「うん！」

そう言つて二人は集会所をあとにした。

「・・・はつー？」

一人が出て行つたあと、取り残されたかのように二ナは呆然とした。まだつたが、急にぜんまいが巻かれたかのように動き出した。

(一)、怖かったよ・・・

へなへなと力無くカウンターに凭<sup>もた</sup>れ掛かる。

その時、二ナは視界の隅に一匹のアイルーの姿を見つけ、顔をあげ

る。

(あれ? ペケちゃん・・・?)

ペケと思われるアイルーは二ナと田が合つた瞬間、はつとしたかと思つと四本足を使ってすぐさま走り去つた。

「・・・?」

二人がウォレフの森と丘に向かう途中。

いつものように広大な草原をただ道にそつて歩く。

「・・・なあ、リン」

「なに?」

「お前、一人で行くつもりだったのか?」

パグフイが真剣な表情で問いかける。

「・・・うん」

「どう答えるよ」か少し迷つたが、リンは頷いた。

「どうする気だつたんだ？」

「どうあるひで……」

リンが答えに戸惑つていると、パグフイが口を開いた。

「一人で行つて、リオレウスを倒せるとでも思つてたのか？」

パグフイが少し強い口調で言つ。

誰から見てもリン一人でリオレウスを倒せることは思えない。

『なんでそんな無謀なことをしたんだ?』<sup>と詫められているような</sup>と詫められているような  
ものだ。

もちろん、それには理由はあった。

しかし、リンは黙つて俯いてしまつた。

「……まあいい。俺も来たしな。お前にも思つといふがあつたんだら」

パグフイがそういふと、口にほしないが『この話は終わりだ』といふ雰囲氣になる。

「ねえ、パグフイ」

「なんだ？」

「なんで、他のハンター達はリオレウスを討伐しようとしたしないのかな」

「簡単だ。あいつらが腑抜けだからだよ」

パグフイがそう答えるとリンは黙ってしまった。

「結局はそういうことなんだよ。王国騎士団が気を使ってパーティの人数制限を6人にしてただろ？『なら6の方が良いけど、6人もいない』とか『俺は今日、もう依頼を終えた』とか言ってんだろうよ」

パグフイが『見て見ぬフリをしているだけだ』というと、リンは集会所にいたハンター達に憤りを感じずにはいられなかつた。

結局二人とも黙つたまましばらく歩き、一人はウォレフの森と丘に着くとキャンプを張り、それを終えるとリオレウスを探すために歩き出した。

「ところで、パグフイこそ一人で勝てると思つてたの？」

パグフイは集会所で『アッシュは火傷か怪我で来れねえんだろうけど』と言つた。

と云ふことせ、それを初めから考えていたということだ。

そして、リンはまだ駆け出しを卒業した程度。アッシュが来ないならリンも来ないと考えていておかしくなかつた。

「俺はお前と違つて、ちゃんと口を使つてんだよ」

と云つて、パグフィイは血麿<sup>ぢくまろ</sup>に自分の頭を指す。

「いあんね、使つてなくて」

じとつとした目でリンがパグフィイを睨む。

「まあ、聞け。俺は昨日の内にアイルー達を雇つて、幾つか罠を仕掛けさせたんだよ」

「罠? シビレ罠とか?」

「いや、アレはガンナー（飛び道具使い）以外はなかなか使い勝手が悪いからな」

リンはそれを聞いて『確かに』と納得する。

昨日、シビレ罠を使った際も、もう少し遅れていたらアッシュも巻き込まれていた。

（それは、ちょっと早めにスイッチを押したせいなんだけど）

だが、押すのが遅れて、罠が発動するまでにリオレウスまで通り抜

けてしまつては意味がなかつた。

そう考へると、確かに使い勝手は悪い。

「原始的じやあるけどな。落とし穴をいくつかと、オマケ的なもんと、あと大タル爆弾を用意させておいた」

「大タル爆弾？」

大タル爆弾といえは、たまにリンも使う小タル爆弾とは比べ物にならないほど大きい、人の身長の半分以上の樽に火薬を仕込んだものだ。

アッシュから『対飛竜戦の時に使われることがある』と聞いていたリンは『どうやって運ぶの?』と思っていたが、今になつて謎が解けた。

「置いてある場所までおびき寄せられなきゃ意味ないけどな」

そういうて、パグフイはリンに罠と大タル爆弾が設置してある場所を説明した。

「でも、それってメラルーにとられちゃつたりしないの?」

リンがふと浮かんだ疑問を口にする。

メラルーと呼ばれる黒毛の獣人族は、ペケのように人に雇われて働くアイルー（こちらは毛の色が様々で、ペケや多くのアイルーは白）と違つて、様々な場所に生息していく、よくハンター達の物を盗む。

一応、野良のアイルーもいるが、いさりはハンターの物を盗む」とはない。

リン自信メラルーには嫌な思い出があったので、言つリンの表情はどうか苦々しかった。

「それは問題ない。わざわざそのためにマタタビとかサカナ渡して、一時手を出さないように交渉したからな」

『色々やつたせいで金かかっちゃまつたけどな』とパグフィは言つ。

「へえ、そんなことできるんだ」

次々と知らない事を教えてもらつて、リンは素直に感心する。

「ま、これが成功するかどうかはその地域によるけどな。メラルーにも人柄、つて言って良いのかわからんねえけど、そういうのがあるからな」

「へへっ」

『そうなんだ』と更に感心する。

自分の住んでいるところのメラルーの人柄?が良いと言われたようで悪い気はしなかった。

『アイツを倒すためなら出来る限りのことはやりたかったからな』

そういうて、パグフィは急に真剣な表情になる。

「・・・うん」

少し気まずい雰囲気になり、リンは控えめに頷いた。

それから、少しの間黙つて歩いていたが、不意にパグフイが口を開いた。

「なあ、リン。お前、アッシュと何かあったのか？」

「え・・・な、なんで？」

パグフイは気まずい空気が嫌になつて言つただけかも知れないが、リンは突然のことに戸惑いを隠せなかつた。

「いや、なんとなくなんだけどな。お前、さつきから全然アッシュとのことについて話せないだろ？」

パグフイの勘とは知らず、動搖してしまつたリンは『しまつた』といつた表情になる。

「おいおい、悩みがあるんだらこのお兄ちゃんに話つてみるよ」

と、パグフイがおどけて言つてみせる。

リンは『むしろ慰めるのは自分のハズなのにな』と思いつつ、パグフイの優しさを嬉しく思った。

「うん・・・」

リンが昨日のこととパグフイに話をうつと思つたその時。

パグフイはリンよりも先に飛竜のものと思われる羽音を聴いた。

バサアツバサアツ

「」の音・・・・!

少し遅れて、リンもそれに気付く。

その音は少しづつ近くなり、それにつれ、次第にそれを聴く一人に緊張感が漂つてくる。

さっきまで軽い調子だったパグフイは、その音をリオレウスのものと確信すると、打つて変わって険しい表情になる。

リオレウスもハンター達に気付く。

バサアツバサアツ・・・ズウオオオオオ・・・ン・・・。

二人に向き直つたリオレウスが軽い地響きをあげ、着地する。

「グゥウオオオオオオ・・・ツ」

リオレウスが唸る。

その口からは黒い煙のようなものがたちこめていた。

(怒つてる・・・ー?)

リンは『なぜ』と、そのことに驚愕きよくがくする。

「どうやら、俺のことを覚えていてくれてたみたいだぜ」

パグフイガリンの心境を理解したのか、そう説明する。

「いぐゼー！」

「うん！」

一人は即座に武器を構える。

「ああ、第2ラウンドだぜ！大トカゲーー！」

その言葉を合図に、一人はリオレウス田掛けて駆け出した。

「アッショ様ツ！」

集会所を走り去ったペケは、そのまま直ぐにアッショの家に帰つて來た。

「ペケ、どうしたんだーー？」

椅子に座り、集中できないまま本を読んでいたアッショが立ち上がりうとする。

「つーー！」

「あつー？アッシュ様、安静にしてないとダメですー」ヤー！」

ペケを宥めようとしていたアッシュが逆に安静にするように言われると、アッシュは仕方なく椅子に座りなおす。

アッシュは朝のうちに集会所に行く予定だったが火傷のことを知っていたペケにやめるよう説得され、代わりにペケに様子を見に行つてもらつていたのだつた。

「それで、どうだつたんだ？」

「そ、そうでしたニヤツー・リン様がつー・リン様があのパグフイつていう人と一緒にリオレウスの討伐に行つちゃつたんですねー」ヤー！」

「つーー！」

アッシュはガタンと音を立てて椅子が倒れるのも気にもせず立ち上がるが、火傷の痛みに呻く。

「ああつー？アッシュ様つー安静に・・・  
「安静になんて・・・してられるか！」

ペケの言葉を遮つてアッシュが言つたが、額には火傷の痛みによる汗が浮き出でていた。

「あのバカ・・・つー！」

ペケはビリビリか落ち着いても、もうアッシュを宥める。

「へんつー。」

アッシュに焦りと悔しさが押し寄せる。

「アッシュ様……」

アッシュの気持ちを察したのか、ペケが弱々しくアッシュの名を呼ぶ。

少し考えた後、アッシュはゆっくりと口を開いた。

「ペケ、頼みがある

「おおらああつー！」

パグフイは氣合とともにガンランスによる突きを放つ。

「ー。」

リオレウスはそれが自分の眼を狙っていると判断すると、即座に首を持ち上げて回避。無防備なパグフイを睨む。

(火球か!?)

パグフイはそう判断するが突きを外した後で隙だらけだった。

リオレウスが口を開けたとしたその時。

「ああああ！」

リンが掛け声とともにリオレウスの背後から駆け寄る。

それに気付いたリオレウスは眼だけを動かしてリンを睨むと、尻尾を器用に動かしリンを狙う。

リオレウスに軽く払われたリンは一瞬呻くが、すぐに空中で体をひねり地面に激突することなく受身をとる。

好機とみたリオレウスはすぐにリンに向き直り、その勢いを利用してパグフイを尻尾で攻撃すると同時にリンに狙いを定め火球を放つ。

「ちいっ！」

舌打ちをしながらパグフイが尻尾の攻撃を盾で防ぐ。

リンもすぐに高速でこちらへ向かってくる火球に気付くと、体勢を立て直しきりなりうちに右に跳んで火球を回避する。

ズドオオツツー…という爆発音とともに、土と石が飛び散る。

リンは『なんとか避けられた』と、ほっと胸を撫で下ろす気分だった。

「リン！まだだ！」

パグフイの声にハツとするリンの目の前には巨大なりオレウスの毒爪が迫っていた。

「なつ・・・！？」

リオレウスはリンが火球を回避することを読み、右に避けた瞬間、翼を羽ばたかせ大きく跳躍。脚を地面と垂直に構えて蹴りつつする格好で狙っていた。

(くそつ！)

リンは心中で悪態をつきながら地面に足が着いた瞬間に更に右に跳ぶが、巨大な爪が頬を裂き、鮮血が飛び散る。

「しまつた！！」

『傷はそんなに深くない。けど、あの爪には毒があるハズ』と思つと、一瞬めまいがして着地の時にバランスを崩す。

多分、このめまいは毒を意識したことによる過剰反応だろうが、このままでは実際に立つてもいられなくなるだろう。

「！」

パグフイが叫びながらリオレウスに駆け寄る。自分を狙つているうちに解毒薬を飲め、ということだ。

リンは腰のポーチから青い液体、解毒薬を取り出そうとするが緊張

からか、それとも毒の効果か、手が震えて上手く掴めない。

着地したリオレウスは背後に向き直ると、パグフィには田もくれず  
にリンに突進する。

(一入ずつ確実に潰す気か!?)

「避けろ! リン!!」

「えつ・・・・?」

焦ったパグフィの声に震える手で解毒薬の瓶を取り出していたリン  
がリオレウスに気付く。

リオレウスはすぐ田の前。

リンは全力を振り絞つて間一髪突進を回避する。しかし。

「あつ・・・・! ?」

リンが手に持っていた解毒薬の瓶のフタが外れ、中の液体が飛び散  
る。

パシャッと草の生い茂った地面に液体が落ちると同時に、リンの表  
情からサッと血の気が引く。

リンは解毒薬を一つしか持つていなかった。

よほどのことでもない限り、毒は微量の解毒薬で治ると聞いていた  
ので、一本で数回は使えると思っていたからだ。

パグフイから解毒薬を受け取ろうにも、その暇もなさそうだった。

(良くねえ状況だな)

リオレウスから眼を離さず、パグフイは思つ。

予想外なことはすぐに起こつた。

二人はリオレウスと対峙したあと、すぐにパグフイの言つていた落とし穴の場所へ誘導し、見事にリオレウスを落とし穴へはめた。

飛べるとはい、突然のことに動じてすぐには動けまい、と二人は即座にリオレウスに駆け寄つた。

だが、怒つたりオレウスは一人が近づくよりも早くに地面に向かって火球を放ち、反動と翼を利用して落とし穴から脱出してのけた。

更に悪いことに、その事でリオレウスの怒りの度合いはそれ以前よりも酷くなつた。

パグフイ達は落とし穴が無駄だと判断し、今度は大タル爆弾が置いてある場所へ誘導しようと試みた、が。

リオレウスは罠にはめる前よりも更に俊敏に動き、攻撃は重くなつていた。

二人は先程から、一方が狙われるももう一方が注意を惹き、ダメー

ジを最小限に留めることだけで精一杯で、誘導ビームではなかつた。

その上にこの状況。最悪といつても過言ではなかつた。

「ギギヤアアアアアアアツ！」

リオレウスは向き直ると一人を嘲笑つよつて抱哮。

「ちつー！」

轟音にパグフイが顔をしかめる。

どうやら、リオレウス自身も自分が優勢であることを理解している様子だつた。

パグフイはなるべくリオレウスから田を離さないようにして、ちひつとリンを見る。

リンとパグフイは数メートル離れている。

走つて解毒薬を渡しに行くのは一人とも狙われる可能性があり、危険だ。

かといって、瓶を投げて渡したとして、今のリンでは受け取れないかも知れない。

地面に落ちるだけならまだいいが、こぼれたり、瓶が割れたりすれば、もう解毒薬はない。

(リンには悪いが、少しの間辛抱してもらひしかないな)

リオレウスがリンを狙うとみたパグフイはガンランスのトリガーを引いた。

切つ先から爆発音とともに炎があがる。

といつても、ガンランスの砲撃は目の前で爆発する程度。離れていれば当たらないのは承知の上だ。

それでもリオレウスの氣を惹くには充分だった。

昨日のことがトラウマにでもなっているのか、リオレウスは爆発音に過剰に反応し、パグフイを睨む。

(ちょっと敏感すぎやしないか……?)

それはそれで狙い通りなのでいいが、パグフイには懸念する事があった。

(思い過ごしだといいんだがな……)

リオレウスはパグフイを忌々しそうに睨むと突進。

パグフイはそれを巨大な盾で攻撃を防ぐと、衝突の反動で盾が弾かれた。

・・・ようになに見えたがそうではなく、パグフイは衝撃を受けきつたと判断すると、即座に盾をずらし、ガンランスを突き出していた。

「つ、くらいやがれ！」

切つ先から着火装置のような火が吹き出るが、これ自体は攻撃ではない。

ドゴオオオオオオオツツ！！

切つ先から物凄い爆発が起つる。

ガンランス最強の技『竜撃砲』だ。

飛竜のブレス攻撃を模したガンランスの砲撃のうち、通常は連続で放つ砲撃を一発に込めて放つもので、飛竜にさえも重傷を負わせることが出来ると言われている。

しかし・・・。

「ちくしょう！避けやがった！！」

リオレウスはガンランスから出る火を驚愕したように凝視すると、即座に翼を羽ばたかせ、地を蹴るようにして空へ逃げていた。

その為、かすつた程度で大したダメージにはなつていない。

（嫌な予感が当たつちまつた・・・）

パグフイが懸念していたのはこのことだった。

このリオレウスは過去ガンランス使いに重傷を負わされた事があるのだろう。

だからこそ竜撃砲に対しても即座に反応し、避けた。

(へんつ、じりあるー? )

竜撃砲は連発出来るものではなく、一度放てばしばらくの間放熱しなければならない。

それに、この様子では何度も何度も避けられるのは目に見えている。

対飛竜戦において、長時間の戦闘は体力を消耗するばかりで不利になる一方だ。

いかに早く重傷を負わせるかが重要なのが、落とし穴も、竜撃砲も失敗。

リンも毒で体力が失われてきている。

打開策を考える暇もなく、リオレウスは上空から爪を構え、パグフィー掛けて急降下してきた。

ガンランスを折りたたんで背負っていたパグフィーは、それを走つてぎりぎりのところで回避するとともにポーチを探り出した。

地面を揺らすほどの重量のリオレウスが着地。攻撃が失敗したとわかると首だけ動かし、パグフィーを睨む。

「リン！受け取れ！！」

『もう悩んでいる余地はない』とパグフィーが祈るように言つて解毒薬の瓶を投げる。

(大丈夫！受け取れる！)

リンもそう自分に言い聞かせ、受け取ろうと震える手を差し出す。

ドシュウツー！

聞きなれた嫌な音。

火球だ、と二人はわかつたが、問題は狙つた場所だった。

そう、このリオレウスは解毒薬のことを知っていたのだった。

だから、それを狙つた。

ジュウツと瓶が蒸発する音がしたのかどうかも一人にはわからなかつた。

「あ・・・」

リンが硬直する。

解毒薬はもう、ない。

「ちくしょおおおおおおおつーー」

パグフイが背負つたガンランスを構えるが、それより先にリオレウスが向き直り、パグフイに噛み付く。

パグフイはそれを回避すると、すぐさま首を狙つて突く。

ドスツと刺さつた感触があるが、浅い。

「グオオツー？」

大したダメージではないハズだが、リオレウスは怯む。

見ると、いつの間に走ってきたのか、リンがリオレウスの脚を斬りつけていた。

パグフイは『無理をするな』と言おうかと一瞬悩んだが、やめた。

リオレウスが怯んだ隙にリンは回転しながら尻尾の裏を、パグフイはもう一度首を攻撃すると、バックステップで距離をとる。

（冷静になれ。冷静に・・・）

焦つて突っ込んでいるだけでは返り討ちにあつのは目に見えている。

それより先に、リンの毒をどうするかが問題だつた。

そこでパグフイは『確かにこの近くで解毒草が採取できるハズだ』と思いつめる。

しかし、リンがそこまで無事にいけるかも問題だし、パグフイ一人でリオレウスの相手が出来るかどうかも怪しい。

リオレウスは距離をとつたパグフイ目掛けて走る。

突進だというのはパグフイにもすぐわかつた。

しかし、リオレウスは数歩足を踏み出したかと思つと、走りながら火球を放つた。

突進を避けようとしていたパグフイは突然のことになんとか盾を構えるが、踏ん張れる姿勢ではなかつたために、盾が弾かれ、痺れた手では耐えることが出来ずに盾を手から離してしまつた。

「しまつた！…」

「パグフイ！」

リンが叫ぶが、突進中のリオレウスの注意を惹く方法はない。

「ちくしょう！…」

回避は出来そうにない。

毒づきながら、受けきれないのを承知でガンランスを構える。

パグフイはガンランスをリオレウスに噛み付かせる形で受けたが、やはりそれだけでは止められない。

それどころか、ガンランスを胸元に押し返され、更にリオレウスの顔面に衝突して、突き飛ばされる。

背中を地面に打ち付けたパグフイから呻く声が漏れる。

体をひねり、ゴロゴロと横に数回転して、なんとか起き上がろうとした時には、リオレウスは既に火球を放とうと、息を大きく吸い込

んでいた。

「・・・・・！」

パグフイがそれに気が付くが、体が動かない。

確実に避けられないと体が理解していた。

「やめろおおおつー！」

リンが必死に叫びながらリオレウスに駆け寄るが、間に合わない。

無情にもリオレウスは火球を放つ。と、思われたとき。

ドゴオオオオン！！

「グギヤアアアツー？」

リオレウスの首に何かが直撃したかと思うと爆発。火球は放たれることなく、火の吐息となつて消える。

その突然の出来事に、リオレウスだけでなく、ハンター達も驚愕する。

だが、二人にはなんとなくだか、それがどういうことを意味するのか理解出来た。

パグフイは集会所で『現地で誰かと会う可能性もある』といったが、リオレウスの情報は既に出回っている。実際に他のハンターと出会う確立なんて全くといっていい。

そつ、最初から来る人間なんて限られていた。

「来るのが・・・遅えんだよ・・・。」

パグフイがキツい口調で言ひ。

しかし、その表情には薄らと笑みが浮かんでいた。

呆れるほどベタなタイミング。

小高い崖の上に、その影はあつた。

太陽はその影を照らすためといわんばかりの位置にあつて、直視できぬ。

その影はゆつくつと呼吸をして、言つた。

「『めんなさあーい！遅れちゃつたわあーっ！』

「・・・は？」

そのあまりにも頼狂な声にハンター達だけでなく、言葉が通じないはずのリオレウスまで硬直する。

そんなことにはお構い無しに、突如として乱入した大男は、その隣で指をV字にしている初老の男と共に『決まった』とでもいいたそうな笑みを浮かべていた。

「ジョンさんに・・・クリフさん！？」

リンは突然の出来事に戸惑いながらも、二人の名前を確かめるように呼ぶ。

ジョインはそれには答えず、リオレウスを睨み、言った。

「さあ、第3ラウンドかしら？・・・いくわよー！トカゲちゃん！」

## 第8話 希少種

それは、あまりにも想像を絶する出来事だった。

絶体絶命の状況。主役が登場するにはこの上ないタイミングで現れたのは、不気味な口調の大男と飛竜との戦闘には無理がありそうな初老の男だったのだから。

「な、なんだ？ あんたら・・・」

パグフイは、さつとりオレウスも話すこと出来れば同じような事を言つたであろうことを口にする。

「あらあ、助けに来たのに、『なんだ』とは失礼ねえ」

ジェインは頬に手のひらを当て、体をくねくねさせながら言へ。

その、クックシリーズと呼ばれるピンク色主体（しかもなぜか普通のものより濃い）の防具一式（頭以外）を身にまとつた姿はあまりにも・・・。

（こ、こいつあ・・・キツイ・・・・）

パグフイはなんとかそれを声に出さずに飲み込んだ。

「あ、あの・・・」

ただでさえ毒で体力が失われてきているリンは、更に悩みの種が増えたようで先程よりもめまいが酷くなつた気がした。

『気持ちは嬉しいんですけど』とリンが言おうとしたその時。

突如として現れた一人を目障りに思つたりオレウスが火球を放つ。

一  
おわあつ！？

「…おひる…ちよ…!? だ…や！」

ジェインとクリフは一瞬狼狽えながらも即座に反応し、崖から飛び降りる。

二人が立っていた場所が火球の爆発で削られ、粉々になった石が飛び散った。

「ドホホホン！」と重量を感じられる音をあげてジヒインとクリフが着地する。

「んもう、少しくらい待てないのかしらねえ」

などと愚痴りながらも、ジエインは巨体である本人が橢円形に丸まつたらこのくらいだろうか、と思うほど巨大なハンマーを、クリフは別段巨大でもないが身軽なライトボウガンを構える。

リンよりも小柄なクリフがジエインの隣にいると、まるで親分と子分のようだつた。

とにかく、どうやらこの予想外な乱入者達は簡単に帰る気はないよ

うだ。

「リンちゃん。目、瞑つてねえ」

「・・・え？」

片手でポーチから何かを取り出していたジェインは、リンの了承も得ないうちに玉のような物を投げた。

「閃光玉だ！」

パグフイの声に反応し、同時にリンも閃光玉から目を逸らして強く閉じる。

リオレウスはそれが何かわからず、火球で焼こうかどうか迷つているように眺めていた。

ドシュウウツツ！

物が爆発し、それと同時に蒸発したような音を出しながら、閃光玉が破裂する。

「グギヤアアアアアアアツー！」

それを直視していたリオレウスが怯む。

飛竜とはいえ、閃光玉を直視すればしばらく物も見えないはずだ。

リンは目を瞑つても尚、感じる光に顔をしかめていたが、少しして何かの音に気がついた。

ゆっくりと田を開ける。

まだ少し眩しいと感じる景色の中、ブォンブォンと何かの音が聞こえる。

その音はジョインが立っていた位置から聴こえた。

「うへうへうへ」

「げつ！？」

パグフィイが不吉な物をみたかのような声を出す。

それもそのはず、ジョインは歌いながら巨大なハンマーを振り回し、自分も回転しながらジリジリとリオレウスに近づいていた。

色んな意味で現実離れした光景だった。

「必殺！愛のおつー島あ流しいいあああああああつー！」

ドオツゴオオオオオオオン！！

回転していたジョインは意味不明な呪文を唱えながら、田をつぶされてフラフラしていたリオレウスの頬に遠心力を利用したハンマーの強烈な一撃をお見舞いする。

ズドオオオオオ・・・・！

無防備にその攻撃を受けたリオレウスは呻くことも出来ずに体勢を

崩し、殴られた方向へ倒れる。

「なつ・・・・!？」

そのあまりにも想像を絶する光景にパグフィイが口を開き、突つ込む  
のも間に合わないといった様子で呆然としていた。

ただ、何よりも驚愕したのは、この突如乱入したオカマが、散々苦  
戦していたリオレウスをいとも容易くダウンさせたことだというの  
は確かだつた。

「どう?トカゲちゃん!私のハンマーの威力は!?」

先制をとつたことで得意気な表情のジェインが余裕を見せる。

「そうだ!アンタらは確か、村にいた・・・どうしてこんなところ  
に来たんだ!/?危険だつて聞かなかつたのか!?」

なんとか質問が出来る程度には落ち着いたパグフィイが問う。

「どうしてつて、私たちも昔はハンターやつてたからあ・・・」

「リオレウスなんて大物、ハンター時代に捕めなかつたもんではなあ、  
ジェインが入手したつて情報を聞いて二人で話してたらハンター魂  
に火がついちまつたつてわけよ」

続けてクリフが説明し、ジェインがそれに頷く。

「はつ?ハンター・・・?」

二人が元ハンターだとは知らなかつたパグフイが目を丸くする。

(村で見かけた時から変わつてゐる奴らだとは思つたが……)

「そういう事。ある程度の事情は二ナちゃんから聞いたわ。二人くらい加わつても問題ないでしょ？」

「あ、ああ」

確かに、現役ではないとはいへ、いまの攻撃を見た限りでは加勢としては問題ない。

「ああて、それじゃ……」

「ジエイン！！」

クリフの声に反応したジエインがリオレウスに目を向けると、眼をつぶされた火竜は倒れた状態でジエインがいると判断した方向に口を開いていた。

火球を放つ一瞬前にジエインが跳んで避ける。

「危ないわねえ！」

ゆっくりと起き上がり、頭を振るリオレウスを睨むジエインを見て、パグフイは悠長に会話をしている場合ではないことに気づく。

(や、そりだーこんなこと話してゐる場合じやねえ！)

「なあ！一人のどつちでもいい！解毒薬をもつてないか！？・リンが

毒くらつちまつたんだ！」

パグフイは言つて、リオレウスがジェインを狙つている間に盾を捨  
いに走る。

毒に蝕まれているリンは少しづつ顔色が悪くなつてきている。状況  
はあまり良いとは言えない。

「解毒薬！？あるぜ！」

ライドボウガンでリオレウスに拡散弾を撃ち込みながらクリフが言  
う。

拡散弾はリオレウスの右翼に着弾すると、少しして一回、二回と連  
鎖的に続けて三回爆発。

どうやら、先程パグフイの窮地きゆうちを救つたのは、クリフのこの弾のよ  
うだった。

「良かつた！早くリンに渡してくれ！」

「ああ！」

パグフイは盾を拾つと、眼が回復したリオレウスの攻撃を『いやあ  
ん』とオカマ走りで必死なのか余裕なのかわからない声をあげな  
がら回避するジェインの加勢に走る。

その途中で、パグフイはクリフが背中に何かを背負つているのを見  
た。

クリフはライトボウガンを手に持っていたが、その背中にはもう一つ別のボウガンのようなものがあった。

普通、ボウガンを二つも持つハンターはいない。

ライトボウガンとは言え、片手で扱える代物でもないのであまり意味がない。

それが何のためにあるのか問い合わせたかったが、今はそんな暇はないと判断し、余計なことは考えないようにする。

「ちょ、ちょっとあ！いくらなんでも怒りすぎよ！大人げないんじやないのぉー？」

ジェインは流石に一人だけ集中して狙われて余裕がなくなってきたのか、表情が引きつっていた。

「少し待つてろ！今行く！」

パグファイが励ますように言いつてジェインとリオレウスに駆け寄つて行つた。

「エッ、ホッ！・・・ツハア！ハア！－」

クリフは大した距離でもないのに、苦しそうにリンに駆け寄ると、肩で息をしながらポーチを探り、解毒薬を取り出す。

「ほ、ほら、よつ！」

リンより倒れそうな表情でクリフが瓶を差し出す。やはりリオレウスと戦うには無理がありそうだった。

「クリフさん、ありがとう」

リンは弱弱しく微笑んで瓶を受け取ると、すぐにフタを外して解毒薬を飲む。

とても美味しいものではないが、しうがなく苦い表情で飲み込むと、少し楽になつた気がした。

とにかく、これでもう大丈夫だろう。

「よし！それじゃ、いつちよやるか！」

呼吸を整えたクリフが真剣だがどこか楽しそうな表情で言つ。

「・・・うん！」

そして、一人もリオレウス田掛けて走り出した。

「うおおおおつー？」

地声で雄叫びのような悲鳴をあげながらジェインが宙を舞つ。

リオレウスがジェインを鼻先で持ち上げ、放り投げていたのだった。

流石にこの険しい状況ではオカマにもなつていられないようだ。

宙で手足をばたつかせるながらもハンマーを離さないジェイン目がけ、リオレウスが一步踏み出し、頭突きをくらわす。

「ぬぐおおつ……」

ジェインは素晴らしいほどの反応で咄嗟にハンマーを盾がわりに防御するが、耐え切れずに吹っ飛び、岩の壁に叩きつけられる。

更に火球を放とうとするリオレウスの腹部にパグフィイが突きを放つ。

ガンランスは腹部にヒット。更にトリガーを引いて爆撃するが、リオレウスはほとんど怯まず、狙いをパグフィイに変えて火球を放つ。

「ちつ！」

少しくらいはリオレウスが怯むことを期待していたパグフィイは舌打ちをしながらも即座に防御。盾に触れた瞬間、火球が爆音をあげる。

近距離では衝撃の重さも違うようで、完全には耐え切れずパグフィイは一、二歩後退る。

熱風で気分が悪くなりそうだったが、顔をしかめている暇はない。すぐに距離をとらなければ追撃をくらってしまう。

「くらいやがれ！」

クリフがリオレウスをボウガンの射程に捉え、気合と共に射撃。

ボウガンから放たれた貫通弾がリオレウスの右翼に刺さる。

貫通弾は通常弾より強力で、草食竜の身体くらいなら貫通するといわれているが、流石に火竜の硬い翼膜を貫くことは出来ない。

クリフはこの弾の仰々しい名前を変更して欲しいとギルドに訴えた  
い衝動に駆られるが、拡散弾は元々高価であまり数がなく、既に撃  
ち尽くしてしまったためにこれで持たせるしかない。

「じいさん、翼じゃダメだ！頭を狙つてくれ！」

「つむせえー誰がじいさんだ！」

パグファイの言葉を無視して翼を狙い続けるクリフの横から、両手に  
提げるよう双剣を構えたリンが高速でリオレウスに駆け寄り、流  
れるような動きでリオレウスの脚を斬りつけ、攻撃を受けないように  
にそのまま走つて距離をとる。

リンの動きにリオレウスが気をとられるが、早すぎて攻撃が間に合  
わず、眼で追つていたところをパグファイが胴体に向けて爆撃。

リンを狙うのは無理だと思ったのか、リオレウスは全身を動かし、  
尻尾でパグファイを払う。

「ぐおっ！…」

パグファイは直ぐに受身をとるが、思った通りリオレウスは火球で追  
い討ちをかけていた。

( ちくしょうつひーー！こつはこれしかねえのかよー！？ )

心中で毒づくが、受身をとった後ですぐには動けないため、有効な攻撃ではあった。

パグフィの目の前に火球が迫る。

同時に、視界の端に何かが近づいて来ることに気づいた。

( 何だ！？仲間か！？モンスターか！？ )

・・・いや、オカマだ！！

「 そおおおれえええつ！！」

ボゴオオオオン！！

突如横から飛び出したジエインが火球をハンマーで超過激なゲートボールでもやるかのように弾き飛ばした。

「 よくもやつてくれたわね！ほら、あなた！反撃開始よーー！」

ジエインはハンマーを構えたまま、背後のパグフィに喝を入れるよう言づ。

先程の攻撃で鎧が汚れ、ところどころ傷がついているが、まだ充分動けるようだ。

「 あ、ああ・・・！」

( もう二回は何でもありそうだな )

「 ギヤアアアアアアアアアツ ! ! 」

リオレウスは少し離れた場所からボウガンを撃ち続けていたクリフに突進。

「 ぐおおつ ! ! 」

元々体力のないクリフは避けきれずに直撃を受けると、そのまま吹っ飛んで地面を転がる。

「 クリフさん ! 」

リオレウスは背後から駆け寄り斬りかかるひとつとしたリンを捉え、巨大な尾で払う。

「 うあつ ! ! 」

リンが耐え切れずに吹っ飛ばされると、リオレウスはすぐにパグフィ達を睨む。

「 いくぜええつ ! ! 」

武器を構え、疾走する二人めがけてリオレウスが火球を放ち、二人はそれを左右に分かれて避けると同時にそのまま飛び掛る。

火竜は首を鞭のようにしならせて空中でガンランスを構えるパグフィを払うと、一瞬遅れて跳んでいたお陰で攻撃を回避できたジェイのハンマーが首元に振り落とされる。

ズドオオオオン！！

「グギエツー？」

(これは、良い手ごたえね！-！)

ジェインが手ごたえを感じた通り、リオレウスは苦しそうな表情で呻く。

ジェインは着地して、更にハンマーを横に振つて脚を狙うが、それより前にリオレウスが地面に向けて火球を放つたために、爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる。

「ぬおおおつー！」

地面を転がっていたジェインが体勢を立て直し、反動を利用して後方に飛んでいたリオレウスが着地すると、全員が距離をとった状態になつた。

「皆、平氣かー？」

パグフイの声にそれぞれが体に異常がないか確かめるよつにして返事をする。

ダメージの大きそだつたジェインも、ポーチから回復薬を取り出して飲み干すと『大丈夫だ』といった視線を送る。

(それにしても・・・)

パグフイはリオレウスを見る。

（オカマの攻撃が効いたのか、大分動きが鈍ってるな。この調子なら、大タル爆弾を使わずにいけるかもな・・・）

仲間が増え、形勢が有利になってきたことで希望が見えてきた。

どうやらそれは皆同じようで、ジェインに至つては大物を仕留めることが出来るかも知れないということに気分が高揚しているようだつた。

焦らないようにしながら、それぞれに顔を見合せて頷くと、一斉に動き出した。

まずはクリフが貫通弾を撃つ。

リオレウスは顔面を狙われば首を動かし避けるだろうが、クリフの狙いは敢えて翼だ。

翼に直撃を受けてもリオレウスは依然として怯まず、当然のように翼膜に穴は空かない。

しかし、牽制けんせいとしては充分注意を惹くことが出来た。続けて正面からパグフイヒジョインが、今度は最初から一手に分かれて疾走。

不利と判断したのか、リオレウスは空に逃げようと翼を大きく羽ばたかせる。

（させない！）

不意に、リオレウスの死角から姿を現したリンの双剣が、首を斬り付ける。

「ギャアアアアアー！？」

予想もしていなかつた攻撃に、リオレウスが驚いたように首を反らせて呻くと、パグフイ達が攻撃出来る範囲まで近づいた。

「これでもくらつておー。」

元々、頭を地面すれすれまで下げていたリオレウスの口元、パグフイがガンランスを突き出す。

しかし、口内に刃が刺さるかといつといふでリオレウスは刃を牙で受け止めた。

パグフイは構わずそのままトリガーを引いて爆撃。爆音とともにリオレウスの口内が爆煙で溢れる。

「まだまだいくわよおーーー！」

リオレウスが苦しそうに爆煙を吐き出しているところを、ジェインが物凄い勢いでハンマーを横に振り、顔面を殴り飛ばす。

ドオオオオン！といつその音を聴いただけでその攻撃のダメージを物語つっていた。

勝てるーーー！

誰もがそう思った。

油断していなかつたといえれば嘘になる。

だが、誰も予想していなかつた。

ジエインに殴られたことど、自分の方へ向かつてきたりオレウスの下顎を斬り上げたリンの一撃が戦局を大きく変えることになるとは…。

世界の至るところで伝えられている昔話で、じつにしたものがある。

その昔、とはいっても既に『人』が存在した時代。

その時代には『龍』と呼ばれる存在があつた。

後に様々な飛竜の祖先とも言われるこの龍は、計り知れぬほど長い体で、翼もなしに自由に空を舞つた。

このころ、人と龍は争うことなく共存していた。

人の子供を背に乗せ、自由に空を舞う龍の姿に、邪心などなかつた。

しかし、ある日のことだった。

物珍しそうに龍を触る人の子供が、龍の『下顎のある箇所に触れた』<sup>。</sup>

すると、今まで邪氣のかけらもみせず、穏やかだった龍は怒り狂い、人の子供を喰い殺してしまったといつ。

もちろん、これは昔話であつて、眞実は定かではない。

それでも、たしかに『それ』が存在するといつ話はあつた。

現在、多くの種類、数千とも数万ともいわれる飛竜が存在するにも関わらず、『それ』を持つ者は極々稀といわれ、リオレウスには『それ』が存在するとされていた。

とはいっても、それは百頭のうち一頭にあるかないか程度であつて、多くのハンターはそのこと自体をしらない。

だから、誰もそんなことを気にしなくて当然だつた。

しかし、このリオレウスには『それ』・・・『逆鱗』<sup>げきりん</sup>があった。

咄嗟に放つたリンの攻撃が、まさか『逆鱗』に触るとは、誰も考えなかつた。

「アアアアアアアアアアアアツツツ！…！」

大地が震えるようなリオレウスの咆哮。

今までのものとはどこかが違つ。

威嚇するためではない。と、全員が直感的に感じていた。

むしり、苦しんでいるようにも見える。

並々ならぬその形相と、あまりの気迫に近くにいた三人は後退りずにはいられなかつた。

得体の知れない悪寒が背中を走り、嫌な汗が流れる。

(恐怖・・・？怖い、の？)

不意に、リンの視界にリオレウスの尻尾が物凄い勢いで振られるのが見えた。

いや、正確には見えてはいなかつた。

視認できたのは田の前に尻尾が迫つた時だつた。

(はや、い・・・！)

防御どころか、少しも動くことが出来ずに直撃を受けたリンが高速でほとんど放物線を描かずに吹っ飛び。

「がつ・・あ・・・」

物凄い勢いで岩の壁に叩きつけられたリンは、そのまま地面に倒れ、起き上がるこことはなかつた。

「なつ・・・」

何が起こつたのか、理解しているはずなのに信じられないパグフイ が言葉にならない声を出す。

「まさりとするなー!」

クリフの声にパグフイ がハツ とすると、距離をとっていたはずの にいつの間にか目の前にリオレウスの姿があつた。

「危ないー!」

ドンッ!

ジエインがパグフイ を突き飛ばし、代わりにリオレウスの突進を受ける。

「つおおおおおおおつーー?」

パグフイ よりも一回り以上は大きい巨体の持ち主であるジエインが、その重量を無視するかのように軽々と突き飛ばされる。

「おい、どうなつて、やがるんだ・・・」

誰にも聞き取れないような声でパグフイが囁く。

先程、苦しそうにも見えたリオレウスは、今はもう苦しそうでも、怒り狂つてもいい。

むしろ、冷静さを取り戻しているようにも見える。

ただ、確実に異常だといえるのは、凄まじいほどの殺氣。

錯覚か、リオレウスの周りの空間が青黒く歪んで見える。見るものにはそれが殺意を表しているように思えた。

ゆっくつと、次の獲物を探すように眼を移動させる。

そして、その眼がパグフイを捉えた。

(倒せなきや・・・)

徐々に暗くなつていく視界の中、リンはなんとか意識を保とうとしていた。

だが、どんどん意識は朦朧もうろうとしてくる。

なぜかはわからない。だが、その時リンの頭に朝のある出来事が蘇つた。

それはリンが集会所へ向かう途中だった。

二人のハンターが話をしているのが聞こえた。

盗み聞きするつもりもなかつたが、それが自分たちのことだとわかつたリンは、ピタリと足を止めた。

内容は、依頼書も出回らない内にリオレウスを討伐しようとして失敗し、あまつさえ死人が出た自分たちのパーティを嘲笑うものだった。

あのハンター達に何がわかつただろう。

そもそも、リオレウスと対峙したそれ自体が偶然だつたこと。

死人が出たのは討伐しようとしたからではなく、戦闘を回避する際に仲間を庇つた心優しい戦士が犠牲になつたこと。

リオレウスに臆して見てみぬフリをするだけの者達に、それを笑う  
権利などあるのだろうか。

その時、絶対にリオレウスを倒さうと思つた。

誇り高き戦士の名誉のために。

胸を張つて『大切だ』と言ふ仲間のために。

(倒すんだ・・・リオレウスを・・・)

リンの意思とは裏腹に、意識はどんどん遠のいていく。

二つの間にか、晴れていた空は曇天に変わり、今にも雨が降り出しそうだつた。

それはまるで、リン達の未来を暗示していくようすで不吉だった。

(アッシュ・・・)

立ち上がるにも出来ず、ヒツヒツコンコンは田を開じ、意識が暗闇の中へ沈んでいくを感じた。

## 第9話 単純な言葉

二ナが家の中に入つて来た時、アッシュは調合をしている最中だつた。

アッシュは彼女の存在にはすぐ気づいたが、敢えて気づかないフリをして作業を続けた。

腰を降ろし、黙々と調合を続けるアッシュの前で二ナが立ち止まる。

「アッシュさん・・・」

小さい声で二ナが呼ぶが、アッシュは少しも反応を見せず、調合を続ける。

「アッシュさんっ！」

もう一度、今度は少し怒りを含んだ口調でアッシュの名を呼ぶと、彼はゆっくりと顔を上げた。

その冷たい視線は『今、お前に構つている暇はない』ということを語つて居るようだつた。

二ナは、ぞっとして一瞬怯んだが、アッシュには聞きたいことがあります。

「・・・なんで、リンちゃんをリオレスの討伐に行かせたんですか？」

予想したとおりの質問に、アッシュはため息を吐きたい気持ちだった。

何も反応がないことがわかると、二ナはその場に正座して真剣な表情でアッシュを見つめた。

二ナが聞きたいことの中には、もう一つ『なぜアッシュは行かないのか』というのあるハズだが、彼女はそれを口に出さない。

「・・・」

しばらく黙ったまま、アッシュは作業を続け、二ナはそんな彼を睨むように見つめ続けた。

「昨日・・・」

不意に、アッシュが口を開いた。

二ナは突然のことにはッとしたが、一言も聞き漏らすまいとするようアッシュの言葉に耳を傾けた。

「昨日、イアンクックの討伐を終えた後、俺たちはリオレウスと遭遇しました」

アッシュは昔のことでも語るかのように喋りながら、そんな自分を疑つた。

話す気になつたのは、二ナが納得のいく話を聞くまで帰るつもりがなさそうだったから、ではない。

本人は気づいていないが彼自身、相談する相手が欲しかったのだ。

イアンクック討伐の後、ガンドウイル達と合流し、リオレウスと対峙したこと。

その戦闘で、強大な敵が相手ではリンを守りきれる自信が無くなつたこと。

リンに『ハンターを辞める』と言つて家を追い出したこと。

そして、今日になつてリンがリオレウス討伐へ向かつたという話を聞いたこと。

アッシュは調査の作業をしつつ、淡々と話していった。

だが、アッシュはその話の中で自分が火傷を負つていてこと、戦闘中にガンドウイルが犠牲になつたことを話さなかつた。

アッシュが全て話しあると、二ナは黙り込んで俯いてしまつていった。

少しして二ナが急に顔をあげ、アッシュを見つめた。

「なんで・・・」

「・・・」

「なんで『辞める』なんて言つたんですか！？」

二ナが立ち上がり怒鳴るが、それは覚悟していたことだった。

「それって、アッシュさんに見えない場所でなら死んじゃつても良いいことですか！？」

アッシュはその質問に答えない。

「ああ、だから事情を知ってるのに助けに行かないんですね！？」

睨んだまま、二ナは怒りを隠そつともせず早口でまくし立てる。

アッシュは今までに彼女がこんなに怒ったところを見たことがなかった。

「私、アッシュさんの事、勘違いしてたみたいですね…見損ないました！」

二ナは言つて二ナは踵を返し、出て行こうとする。

が、怒りを滲ませながら数歩足を踏み出すると、ピタリと止まった。

「…そんな事言われたリンちゃんの気持ち、考えてみなかつたんですか？」

二ナは言つてからアッシュに向き直る。

アッシュはといふと『考えなかつたわけではない』と自分に言い聞かせるが、本当にそれが自信がなかつた。

「きっと玲ちゃん、アッシュさんが何でそんなことを言つたのか、何となくでもわかつたと思ひますよ？」

アッシュは『そつだるつか』と血分に問う。返ってきた答えは『多分そつだ』だった。

「急にそんなこと言われて、コンケヤんだつたりじつします？ 辞めろって言われて、辞めます？」

また考える。答えは『辞めるハズがない』だ。

（いや、それ以前にリンがハンターになつた目的はもしかしたらリオレウスを倒すことだったのかも知れないんだ……）

そんなことすら考えが回らなかつた自分に呆れる。

二ナは黙つたまま、またアッシュに背を向けて歩き出す。

あと数歩で家から出る、ところどころで二ナはまた足をペタっと止めた。

それから怒りが冷めたのか、深呼吸をして肩の力を抜く。

少しの間、躊躇つようつて体を揺すつていたが、やがて肩越しにチラツとアッシュを見た。

「あの……アッシュさん。リンちゃんを助けに、行きます、よね

？」

振り返り、自信なげにおずおずと尋ねる。

なんだかさつまでの勢いが嘘のようだつた。が、アッシュにはな

んとなくその仕草の方が先程までの二ナよりはよほど彼女らしいこと思えた。

「ええ」

拍子抜けしたアッシュがフツと笑つてから答える。

「本当ですか！？ よかつた！ じゃあ、ほりつーそんなことしてないで、早く！」

二ナはせつきまで怒つていたのが嘘のようにパアッと顔を明るくし、調合をするために腰を降ろしたままのアッシュの手を掴み、引っ張る。

しかし、パグフィ達のように大柄ではないアッシュとはいって、巨大な大剣を持つほど之力の持ち主だ。

二ナが必死に唸りながら腕を引っ張るが、ほとんど動かない。

「い、いや、これを調合しないことにほ・・・」

「は～や～く～！！」

アッシュが説得しようとするが、二ナは聞かず、腕を引っ張つて催促するばかりだった。

「なんだか楽しそうだな」

突然、入口の方から聞きなれた声が響いた。

「えつー!?

その声にアッシュも一瞬早く二ナが反応し、物凄い勢いで振り返る。

視線の先には一人が予想したとおり、その言葉の主であるティールが立っていた。

「よつ」

「ティール……?」

アッシュが確かめるよつにその名を呼ぶ。

ティールはアッシュにとって歳も近いことからお互いに呼び捨てで話が出来る人物だった。

「邪魔するぞい」

続けて、村長が家中に入ってきた。

「村長まで……どうしたんですか?」

アッシュがそう尋ねたときには二ナは掴んでいた腕から手を離し、落ち着かない様子でオロオロとしていた。

「ふむ、ちよつとお主に用があつての」

村長が長いあご鬚を触りながら言つ。

「用・・・?」

訝しそうに見るアッシュュに、村長が切り出す。

「悪いが話は聞かせてもらつたぞ。お主、リオレウスの討伐に行くんじやな?」

言われて、アッシュュは『いつから聞いてたんだ?』と疑問に感じたが、『ええ』と頷いた。

「実はお前が昨日のこと話してた頃からいたんだ

ディールが悪びれた様子もなく言つて、笑う。

(マジか・・・)

「まあ、気にするでない。ほれ

言つて、村長は懐から小さな壺を取出し、アッシュュに手渡す。

「なんですか?これ

壺は封がされていたが、搖らして音がしないことから固形物ではな  
れそうだった。

「秘薬じゃ。お主、火傷を負つとひどい。やけに塗るとこ

「えつ・・・?」

アッシュュは村長の言葉に耳を疑つた。

昨日はリオレウスとの戦闘を回避した後は家に戻り、誰とも逢っていない。

だから、アッシュが火傷を負っているなんてわかるはずがなかつた。

『村長は心が読めるのか?』と勘ぐり始めた時、当の本人は、ほつほつと笑いだした。

「いや、実はな、お主のところのアイルーが大慌てで何かを探して回っていたようじやつたんで、呼び止めて話を聞いたんじやよ」

そう言われて、アッシュは納得した。

ペケには、秘薬の材料を探して欲しいと頼んでいたのだ。

「お主は確か調合が苦手と聞いておつたから、ワシが代わりに調合をしておいた。ああ、アイルーの方は疲れておつたようじやから家で休ませておる」

村長が言つ通り、アッシュは調合が苦手だし、元々秘薬は成功率の低い物なので、ちょっととした賭けではあつた。

アッシュは礼を言い、早速秘薬を火傷した箇所に塗ることにした。

その火傷を見た途端、村長とティールは顔をしかめ、二ナはそれを見る前に顔を背けた。

アッシュは触るだけで痛むのを耐えながら、秘薬を塗り、それを終ると、ふうと息を吐いて額の汗を拭う。

流石に塗つた瞬間に全快、といつわけではないが、大分楽になつた。

「さて、アッシュよ。少し話をしてもいいか?」

村長に言われ、アッシュは頷いた。

「ええ。・・・調合を続けながらでもいいですか?」

その言葉を聞き、村長は改めてアッシュが調合しているものを見た。

「ほう、これは・・・」

それが何か理解した村長は『続けながらで構わんぞ』と了承し、アッシュは調合を続けることにした。

「お主が戦おうとしたリオレウスじやが、奴は人間に対して相当な恨みをもつておるようじや」

村長の言葉に、三人は何があつたのか大体の推測をしてみた。

「まあ、実際に何があつたかまでは知らんが、聞いた話では最近あやつに襲われた近隣の村にはリオレウスに手を出した者はおらんかつたそうじや」

(つまり、それ以前から村や街を襲つていた可能性もあるつてことか)

アッシュがそんなことを考へていると、ディールが口を開いた。

「じゃあ、もし奴がこの村を見つけたら、まあ襲つて来ると思つて間違いないってことか？」

「わいじや

村長が躊躇わざ答えると、いつもは樂観的なデイールも『そつか』と面白くなぞしそうに言つて、二ナの表情からせ、わっと血の氣が引く。

村長は押し黙り、辺りには時計の時を刻む音と、アッシュュが調合をする時に生じる音しか聞こえなくなる。

場違いな程心地よい風が吹き、カーテンが揺れる。

少しして、昨日と同じように遠くから子供達のはしゃぐ声が聞こえた。

今日は何をして遊んでいるのかはわからないが、無邪気に走り回つているようだつた。

アッシュュはそれを、昨日とはまた違つた思いで聞いていた。

調合が成功し、アッシュュは出来上がつた物を床に置く。

「成功したか

「ええ

アッシュュは、ふうと息を吐くと村長を見据えた。

「アッシュュよ。今、村には流れ者も含め、多くのハンターがあるが

皆リオレウスに臆して見て見ぬフリをするばかりじゃ」

村長は『嘆かわしい』とでも言わんばかりに首を振る。

「もし、お主らが失敗すれば、もうコオレウスに挑もうとする者はおらんじやうと思つておる。ワシも、もうこの歳じや。まともに戦うことも出来ん・・・」

悔しそうに床に視線を落とし、黙つたかと思つとすぐに顔を上げた。

「アッショよ、この村を救つてやつてはくれんか！？」

懇願するように言つて、村長は頭を下げる。

少しの間、全員が黙つていた。

アッショは村のために戦い、勝利し、村長に『よくやつた』と賞賛され、勲章でも受け取る自分の姿を想像しようと/orして、失敗した。

「村長。申し訳ありませんが、その頼みは聞けません

「・・・・・」

断られたことが予想外だったのか、村長が目を丸くする。

二ナも何か言いたそうだったが、その前にティールが口を開いた。

「でも、リオレウスの討伐には行くんだろ？」

自分で答えをわかっているくせに質問をし、アッショはそれに頷く。

「まあ、セーヴィングなどだな」

嬉しそうにトイールが言つて、笑う。

「ど、どういひですか？」

二ナが質問すると、トイールは彼女と村長を交互に見ながら話す。

「こいつは村を守るつもりはないけど、リオレウスは討伐しに行く。無事成功すりや、村が救われるわけだ。そうだろ？」

そうこつて村長に問いかける。

「へ、うむ。セーヴィングが……」

納得できない様子で村長が頷くと、トイールが続ける。

「こいつはな『自分は村を救う英雄なんて似合わない』って思つてるんだよ。だろ？』

今度はアッシュに尋ねる。

「そういうことです。そんな大それたこと任務抱えてたらプレッシャーで戦えませんよ」

アッシュは冗談のように笑つて言つてみせる。

「ふうむ・・・ワシも多くの者を見てきたが、お主もなかなか変わつておるのな」

村長は少し腑に落ちない様子だったが、可笑しそうにアッシュを見た。

「それに、『救います』なんて名前じゃ、どうなるかはやつてみないとわからないですから。それなら、何も言わずにやれるだけやつてみないと……」

その言葉の途中でアッシュは詰まつた。

それを見て二ナガ嬉しそうに頷いた。

「わつですよーわつこい」とですよー。

村長とディールも肯定するように頷いていた。

「そのくらいの気持ちでいいんだよ。村のことも、コソガヤんのこともな」

「・・・わつか」

ディールの言葉に照れたよつて頷くと、アッシュは立ち上がつた。

「よしわ」

「おっ、アッシュ。行く前に・・・おーい、お前、持つて来てくれ

ディールはアッシュを止めて入り口の方へ向けて声を張り上げた。

アッシュとニーナが何事かと思っていると、一匹のアイルーが大剣を掲げて入ってきた。

「これは・・・？」

アッシュは見たことのないその大剣をまじまじと見つめた。

若葉マークを引き伸ばして柄を付けただけのような、実にシンプルなデザインのそれは、かといって安物には見えなかつた。

「ふつふつふ。これはのう、ワシが現役の頃に使つておつたこのキヤサリンちゃんをディールに鍛え直させ、強化して出来上がつた、そう！まさにキヤサリンちゃん改・・・」

「カブレライトソードって知つてるか？あれは強力だけど鉱石自体が貴重だからな。そいつを真似てマカライト鉱石だけで作つてあるんだと」

「なるほど、だから青いのか」

アッシュは村長の言葉を遮つたディールの説明に納得する。

聞いた話では、カブレライトソードはそんな名前ではあるが、貴重であるカブレライト鉱石以外にも鉄鉱石やマカライト鉱石も使っている。

そうやつて考えると、マカライト鉱石だけで作られたこの大剣も、なかなかの威力なのだろう。

『しかし』とアッシュは首を振る。

「ありがとう。・・・だけど、俺にはこいつがあるから」

そういうて断わりとする。だが、手を伸ばし、大剣に触れたところ  
でアッシュの表情は強張った。

「その、ヒビの入った剣か？」

ディールが言うように、アッシュが長い間使ってきた大剣は、昨日  
のリオレウスとの戦いの時にそつなつたらしく、ところどころ亀裂  
が走っていた。

これでは、修復も難しい。

「そいつはもう、鍛えなおしても同じものにはならねえな」

ディールは患者に余命でも明かすかのように力無く言へ。

「やうへ、か・・・」

同じものにはならない。その言葉はアッシュの心に虚しく響いた。

この「アーレムブレイドは、アッシュにとってただの大剣ではないの  
だから。

「もうひいてやつてくれねえかな？」

アッシュはしばらく黙っていたが、『早く持つてくれ』と言わんばかりにふるふると震えるアイルー達から大剣を受け取り、改めて眺める。

深い蒼色あおをしたその大剣は、神秘的で吸い込まれそうな錯覚を起した。

「すまない」

アッシュのその言葉は、『ディールに向けたようでもあつたが、そうでないようにも聽こえた。

「そいつ、威力はガブレライトのそれには及ばないけど、充分保証するぜ。・・・こういうのもなんだけど、俺がお前のために作りたかった『武器』はこんなものじゃなかつたんだぜ？」

『こんなもの』と言われたのが気に入らなかつたらしく、村長がか言いかけたが、二ナに『まあまあ』と宥められて止まつた。

アッシュはと言つと、『何時から氣付いていたんだ』と言わんばかりの表情でディールを見つめていた。

「まつ、それはまたの機会にな」

言つて、ディールは笑う。

「・・・ああ、『その時』は頼む」

アッシュは村長とディールに礼を告げると、出発の準備を始めた。

その途中で村長はアッシュが手に持つた瓶を訝しそうに見た。

「むつ？ちよ、ちよつと待て！アッシュ！」

村長に言われ、アッシュはピタリと手を止めた。

「どうしたんですか？」

二ナが不思議そうに聞く。

「お主、それを使うつもりか？」

村長が『信じられん』といった表情で言う。

アッシュが手に持っていたのは、強走薬と呼ばれる、一時的にだが走り続けても疲れなくなる、といった効果のあるものだった。

「これが、どうかしたか？」

理解出来ない様子のディールが村長に尋ねる。

しかし、村長が口を開く前にアッシュがそれを遮った。

「少しでも早く着きたいですから」

「じゃが・・・」

「大丈夫ですよ」

アッシュは言つが、二ナとディールにはそもそもが何の話なのかもわからない。

それに構わず、アッシュは続けた。

「大丈夫、俺はこんなことで死にませんよ」

さりとて言ったその言葉は、それでも何か違和感のようなものを感じ、三人の耳に冗談のようには聞こえなかつた。

準備を終え、外へ出て、三人は家の入り口を背にしてアッシュを送る形になつた。

「アッシュ。村長じゃないけど、その剣に名前付けなくていいのか？そんな剣、他じゃないだろ？から名前がないんだ」

ディールに言われ、アッシュは少し考えてみた。

ちなみに村長が拳手しながら『キャサリンちゃん』を連呼していたが、無視した。

「マカライト鉱石で出来てるんだから、マカライトソードでいいんじゃないかな？」

正直、アッシュは自分のネーミングセンスを疑いかけたが、『カブレライトソードよりはカッコいいかもな』とも思った。

「ははっ、シンプルでいいな」

ディールが笑い、二ナも頷いていた。

だが、『キャサリンちゃん』を連呼していた村長だけは、それを聞いた瞬間『キャサ・・・』の辺りで急に止まり、絶望の底に突き落とされたような表情になっていた。が、無視した。

「わい、長々と話して悪かつたな」

ディールが言つたが、アッシュは首を振る。

「いや、嘘と嘘をなかつたら、気持ちが整理出来ないままだったからな」

アッシュは『そんなんじや足手纏いになりかねない』と続ける。

「せうか。じゃあ、リンちゃんに会つて、何で言つたか決まつたか?」

「・・・」

言られてアッシュは逡<sup>しづ</sup>々<sup>しづ</sup>とした。

それを見て『やつぱりな』とディールは笑う。

「アッシュ。ここ<sup>こ</sup>とを教えてやる。難しく考えるな。お前が本当に伝えたいことだけ言えばいいんだよ」

「本当に伝えたい」と・・・

アッシュは反響してみる。

「なんにしたつてそういうだろ? 難しく考えてると余計わかんなくなる

んだよ。お前がその剣をマカライトソードって名づけたみたいに、  
シンプルでいいんだよ」

その言葉にアッシュは『やうが』と呟く。

「ああ、わかつた。・・・ありがとうな、ディール」

「ははっ、んなことで礼なんてよせつて、『氣持ち悪い』

『ディールは笑い、アッシュも『氣持ち悪い』とはなんだ』と言つて、  
笑う。

「・・・よし。じゃあ、行つて来る」

アッシュが力強く言つて、ディールと二ナは頷き、少し遅れて村長  
も頷いた。

「ねえ。じゃあな」

「氣をつけてな」

「こつてらりしゃー。アッシュさん」

そしてアッシュは三人に背を向け、走り出した。

(俺が村を救う、か)

アッシュは平原を駆けながら村長が言つた言葉を思い出していた。

(そんな気はせらない。でも・・・)

『でも、大切な人達は守りたいな』と、そう思つた。

地平線まで見えるほど広い平原をひたすら走つていふと、少しづつ疲労を感じ出した。

しばらく走り、疲労が溜まつてきたと感じると、アッシュは強走薬の瓶を取り出し、一気に飲み干した。

瞬間、疲労が一気に消え、走る足に力が漲る。

スピードを更に上げ、走る。

(天気が悪くなってきたな)

空は先程まで晴天だつたはずが、少しすつ曇りだしてゐる。

(雨になる前に着きたいところだな)

雨の中を走るのは精神的に辛いものがあるし、足元もとられやすくなる。

少し焦る自分を抑えながら、アッシュは走り続けた。

(パグフイ、リン。無事であつてくれ!)

長く続く平原を、アッシュは駆け抜ける。

村にいる仲間、共に戦った仲間を守るために。

そして、無鉄砲でわがままで、優しくて涙もろい相棒に自分の本当の気持ちを伝えるために。

## 第10話 ちつぽけな勇気

暗雲が空を覆つた。

追い詰められた人間にとって、この天候の変化は全く気にせずにいられるものだろうか？

それでも、この状況で「天にまで見放された」と嘆くべきか、それとも「雨が降ればアイツの火も弱まるかな？」と軽口を叩くか、どちらかと問われれば、三人は後者を選ぶだろう。

三人…。現在、パグフィイ、クリフ、ジェインの三人はまだ戦闘を続行出来る状態にあった。

リンの姿は今、辺りには見えない。

彼女から離れるようにリオレウスを誘導した、と言いたいところだが実際は違う。

反応の追い付かない猛攻に後退を余儀なくされ、偶然リンから離れることになつただけだ。

…これまでにわかつたことが幾つかある。

まず、今のリオレウスは、強い。

正面から立ち向かったところで、その巨躯をものともしない速さで全ての攻撃を回避している。

それどころか、手痛い反撃をくらい、ダメージを負っているのはハンター達のほうだった。

次に、リオレウスは逆鱗に触れたからといって怒り狂っているわけではない、ということ。

むしろ落ち着いた様子で、元々地面すれすれまで下げていた頭を体ごと持ち上げ、三人を見下す形で睨んでいた。

その様子だけでも異様なのが、それ以上に特異なのが、距離が離れているパグフィ達に対し、質量の無い強風のような勢いで襲い掛かる気迫…いや、殺意といつていい。

一体、他のどのよつな生物ならばこのよつに穏やかな表情で、こんなにも明確な殺意を放つことが出来るだろうか。

三人はまるでここだけが自分達の住む世界から切り離されたような違和感を感じていた。

そもそも原因は言つまでもなく、文字通りリオレウスの逆鱗に触れたからだろう。

逆鱗について言えば、もう一つある。

リオレウスは逆鱗に触れたリンを狙うことしなかつた。

もちろん、そうでなければリンから遠ざかることなどなかつたのだが、逆鱗にまつわる昔話を知っていたクリフだけはそのことを疑問に思っていた。

だが、今はそんなことを考へてゐる場合ではないし、彼は自分の中で一つの仮説を立てていた。

そして最後に、今のリオレウスには小細工は通用しない。

パグフイが仕掛けっていた幾つかの罠。それらは元々、飛竜相手には時間稼ぎくらいにしかならない物ばかりだったが、リオレウスはそれら全てを意に介さず、または除外した。

更には、翼膜を貫いて翼としての機能を奪おうとしたクリフの狙いが読まれるようになり、先程まで回避しようともしなかった弾丸を難なく躱すようになつた。

そうである以上、もはやほととどの策は駄目であるといつていい。

これらの事から導き出される結論。

それは三人がよく理解し、それでいて敵対する者にとって決して考えてはならない事だつた。

それを認めようとせず、動いたのはパグフイだつた。

「つーつーおつづく無闇に突つ込むな！…」

パグフイは重量物を持っているとは思えない高速で疾走し、クリフがそれに気付いて制止し終える前に一気にリオレウスとの間合いを詰め跳躍。

この距離で相手がランポスだったならば、今の時点では気づいたところで遅い。

しかし、射程距離内まで近づいたところで突然パグフイは目標を見失った。

消えたわけではない。

そのことは、その視界に迫る地面をとらえていた彼はよく理解していた。

リオレウスは攻撃をくらつ前に身をひねり、巨大な尻尾で彼の背中を叩きつけたのだ。

そのことにパグフイ自身が気付いたのは地面に全身を打ち付けた後だった。

「ツグ、おああ…つ…」

仰向けの状態で倒れ、鞭のようにしなる大木で殴られたような背中の痛みと、肺を圧迫する衝撃が遅れてパグフイを襲い、嘔吐するような呻き声が漏れる。

視界がかすみ、一瞬の間呼吸と思考が停止した。

少しでも気を抜けば意識を失いそうだったが、それでもパグフイは即座に痛む全身に鞭をうち、呼吸もままならない状態で必死に油の切れた機械のように体を軋ませながら起き上がろうとした。

地面に着いた手に力が入らず、肺がそんなことよりも呼吸をしようと命令する。

もしリオレウスが追撃するつもりだとしたら本来ならばもう手遅れだ。

だが、パグフイは何事もなく上体を起こす事が出来、そのことを彼自身が一番不審に思つた。

しかし、その疑問はリオレウスと目が合つた瞬間に解決した。

リオレウスは何もせず、パグフイをじっと見つめていた。

いや、正確には“待っていた”という方が正しい。

大空の王たる高貴な火竜は自分に立ち向かう脆く愚かなハンターが無様に立ち上がるのを悠然と見下ろしながら待つていたのだ。もろ

その光景を目にしたパグフイ…いや、彼を助けようと動こうとしたいたジェインとクリフすら、その場で硬直してしまった。

その瞬間、パグフイは自分達が今のリオレウスに対し、いかに無力かを知つてしまつた。

これが、彼が認めようとしなかつた結論だ。

今の彼らでは、このリオレウスには勝てない。

リオレウス自身それを理解している。

だからこそ待つてているのだ。

だからこそ、遊んでいるのだ。

自分を窮地に追い詰めた愚かなハンター達に後悔させるために。

もはやリオレウスにとって目の前のハンター達は“敵”ではなくなつていた。

それを敵対する者が理解してしまったのだ。

戦慄が走った。

パグフイは自分の体から戦意が抜け出るような感覚を覚え、顔から血の気が引きかけた。

その時、爆発音のようなものが彼の耳に聞こえた。

クリフが貫通弾を放ったのだ。

リオレウスの反応は早く、翼を駆使して後方に大きく跳躍してその攻撃を回避した。

「バカ野郎！ いつまでそうしてる気だ！？ 死にてえのか！？」

「！！」

その怒鳴り声にパグフイは我に返った。

(そうだ、ここで呆然としてたところで死ぬだけだ！)

自分を鼓舞し、まだ全身に力が入ることを確かめる。

もしこの状況で「大丈夫か？」などと言われば、逆に完全に戦意を喪失<sup>そうしつ</sup>していたかも知れない。

パグフイが立ち上<sup>あ</sup>がると同時にジエインとクリフがその横に並んだ。

「ビビッてんなら大人しく帰つた方が身のためだぜ？」

クリフがパグフイを横田<sup>よこた</sup>でちらと見て言つ。

「ハツ、じいさんに言われたくねえよ」

「誰がじいさんだ！？」

「お？ アンタ以外に誰かいんのか？」

「テ、テメエ…！」

「あら、一人だけで楽しそうねえ」

軽口を叩き合つている内に三人は落ち着きを取り戻す。

予想通り、リオレウスは動かない。

策を練る時間をわざと<sup>『』</sup>えているのだ。

(くそつ、舐めやがつて…！)

パグフイから先程の恐怖は消え去り、代わりにリオレウスに対する怒りがふつふつと沸いてきた。

しかし、正面から立ち向かって歯が立たない以上、残された策は限られている。

大タル爆弾だ。

それが置いてある場所までリオレウスを誘導する必要があった。

勿論、それは簡単なことではないだろう。

既に空は雨雲が覆っている。今にも雨が降り出しそうだった。

(雨が降つちまえは大タル爆弾は使えねえ……)

急ぐ必要があつた。が、今三人が背中を見せて走り出そるものなら、リオレウスはそれを逃げたとみなして追いかけ、余興が終わつたのだとばかりに全員を血祭りにあげるだろう。

奴は三人が必死にもがくのを望んでいるのだから。

『とりあえず作戦を伝えねえと』とパグフイは大タル爆弾のことを二人に話した。

簡単な説明を終えると、一人はまだ策があることに少しほっとした様子だった。

「んもう、そんなのがあるなら早く言いなさいよお

ジェインがどこか安心した様子で言つ。

この状況では全く策がないのと一つでも策があるのとでは大違いだ。

しかし、だからこそ問題もあるのだが…。

「奴がそんな時間をくれるなんて思ってなかつたからな」

ちら、トリオレウスを一警ひよけいしてパグファイが呴く。

「つまるところ、疋止めすりゃいいんだが?」

「出来るのか?」

パグファイの質問にクリフは答えず、ライトボウガンをしまつた。

「あら、アレを使つの?」

ジェインは理解したらしく、『珍しい』とでも言わんばかりにクリフを見た。

「(+)につを持つて来て正解だつたな」

言葉の割にはどこか残念そうな様子のクリフが、背負つていたもう一つの武器を構えた。

一つ折りの状態だったそれをガチャと何か機械的なものを接合させたとわかる音をたてると、それは一つの巨大なボウガンになつた。

しかし、通常のそれとは違つ。

同じくらいのサイズのヘビーボウガンと呼ばれるものは確かに存在したが、これはそれとも違い、どこか近未来的な印象を受けた。

そう思わせたのは、これには弾倉じしきものが無く、代わりに半円形のものが一つだけ装填されていたからだ。

「ディールに作らせた特製品だ。出来ればこいつでトドメといきたかったんだがなあ」

残念そうに言つてその特製銃をリオレウスに向ける。

リオレウスも経験からかその銃が特殊であることに気が付いたようだつたが、さほど警戒した様子ではなかつた。

「くらいやがれ！！」

引き金を絞り、カシュッと金属が擦<sup>す</sup>れるような音を出して半円形の物体がリオレウス目がけて飛んでいく。

しかし、円盤のような形のそれはパグフイですら心配するほどに頼りなかつた。

リオレウスも同じような印象を受けたのか、避けようという素振りを見せない。

だが、それが近づいたとき、リオレウスは初めて自分に向かつて飛来する物体が何なのか気付いた。

咄嗟に回避しようとした時にはもう遅かつた。

次の瞬間、突然その物体の周囲にバチバチと音をあげた電撃が巨大な膜のように張り巡らされた。

「グギヤアアアアアアアアアアアツツ！－！」

突如展開された電撃を避けきれず、直撃をうけたりオレウスに強力な電撃が走り、苦痛に咆哮する。

「あれは…－？」

「シビレ罠よ。つていつても本格的な攻撃用にするために電撃の威力を増して改造型だけね」

ジエインが作りすぎたシビレ罠をどうにかできないかと思っていたときに考えたものらしいが、パグフイにそんなことがわかるハズもなかつた。

「喋ってる暇なんてねえだろうが－走るぞ－－」

「…ああ－！」

パグフイがクリフの言葉に応じると、二人は踵きびすを返して走り出した。

遠ざかる途中、パグフイはリオレウスの憤怒のこもった眼を見つめてしまつたことを後悔した。

そう長い間走ったわけではないが、三人は息を切らし、それでも尚走った。

三人は今、丘から森の方へ走り、辺りを木々に囲まれた道にいた。

「まだか！？」

クリフが焦りと憤りの混じつた口調でいい、パグフイを睨む。

「もう少しだ！ 黙つて走れ！…」

そつとうパグフイも苛立ちを隠しもせずに必死の形相で走る。

背後にリオレウスの姿は見えない。

だが、先程あの憤怒のこもった眼を見たパグフイには追つてきていた。確信があった。

距離が離れているからといって安心は出来ない。速さでは差が歴然だ。姿が見えたならば、あつという間に追いつかれるのは目に見えている。

「なんで、そんなつ、遠くに置いたのよおつ！？」

ジェインが悲鳴にも近い声で問う。

「アイツがつ…水を飲むためによく来るつて、アイルー達に言われてたんだよ！…」

怒鳴りつけるように言つて限界を訴え始めた体に鞭をつり、走る。

次の瞬間。

空間を震わせるほどの猛り狂つた咆哮が木々を萎縮させた。

『来た…っ！』

三人に緊張が走る。

背後を振り返ると、怒りをあらわにしたリオレウスが物凄い速度で飛来するのが見えた。

目的の爆弾はまだ見えない。

長い一本道が続く。

果たしてこの道を抜けるまでに追いつかれずにいられるだろ？

その可能性を考えた三人は背筋に冷たいものを感じた。

もはや何かを口にすることもなく走る。

もうそれしか生き残る方法はない。

その時だった。

ポツリとパグフイの頬を冷たいものが触れた。

「つー？」

雨だ。

その事を知った瞬間、パグフイは全身からわっと血の脈が引きかかってしまった。

(…いや、まだだ…)

まだ雨は小降りで、これならまだ問題はない。

だが、それも今の内だけだ。

不安を振り払うようにひたすら足を動かす。

極度の緊張と疲労から心臓の鼓動が異常なまでに早い。

たつたの十メートルを走るのが、その何倍にも長く永く感じた。

遙か遠くにあつたリオレウスの姿が見る間に近づいて来る。

口の中が渴き、足に力が入らなくなってきた。

『もしかして』と、パグフイは刹那に過ぎていく景色の中、思った。

『もしかして俺達は誘導しているんじゃなくて、ただリオレウスから逃げているだけじゃないか?』と。

背後から襲いかかるのはもはや“敵”と呼べる存在ではない。

ならば、何だらう?

“恐怖”だ。

自分達はその“恐怖”から逃れたいがために微かな希望を求めて必死に走つてゐるのだ。

そんな考えが一瞬にして頭をよぎり、パグフイは気が付くと「違う！」「とかされた声で叫んでいた。

（俺は、俺は…！ガンドウイルの仇を！リオレウスを倒すんだ…！）

リオレウスは“敵”。そして自分達が向かっているのはそれを倒すための“希望”。それだけが真実だと言い聞かせる。

そして…。

一本道を走りぬけ、木々の中に湖の見える広い空間に出た時、“希望”が見えた。

パグフイ達に残された、最後の切り札が。

まだこの作戦が成功したわけではない。

それでも、三人はため息でも吐ける状態ならば「助かった」と言つていたかもしけない。

それほどに安堵していたのだ。

しかし。

次の瞬間、“希望”は壮大な爆発音とともに絶たれた。

リオレウスは聰明だった。

ハンター達の反応を瞬時に読み取り、視線の先にある普段そこにあ  
るハズのない物を視認するやいなや、迷うことなくそれを破壊した  
のだ。

普通の飛竜ならば、いや、このリオレウスですら普段ならこのよう  
な判断はしなかつたハズだ。

皮肉にもパグフィイ達の度重なる策がリオレウスを慎重にさせたのだ。  
雨が、爆発音を合図としたように降り出した。

“絶望”が降つて來た。

「困難に直面したら、どうする?」

気がつくとリンの目の前には兄の姿があった。

兄は歳が離れていたが、そんなことを感じさせないほどリンに親しく接してくれていた。

リンはそんな兄が大好きだった。

だが、その姿はリンの記憶にある姿。まだ家を出て行く前の姿だった。

(これは…夢?)

それに気付くのと同時に、二三歳が幼い頃の自分の部屋だといつづりとに気付いた。

「困難?」

暖炉に火が灯った暖かい部屋の中、誰かが答える。リンだ。

いや、正しくは幼い頃の、だ。

首を傾げ、兄の顔を不思議そうに見つめている。

リンはそれを実体を持たない、いないハズの第三者の視点から見ていた。

「ん~、何つうかな、じいへ、どうしようもないほど困った時だ」

そういう兄が一番困ってやうだったが、幼いリンはその事よりも『困った時どうするか』を考えるのに一生懸命のようだった。

「こ…」

幼いリンが何かを言いかけ、やめた。

リンはなんとなくだが、それが『兄さんにどうすればいいか尋ねる』といふような内容のことと言おうとしたのだとわかった。

「ん?」

兄が少し困ったように首を傾げる。

「…」

幼いリンはまた考える。

そして、決心したように口を開いた。

「頑張るー。」

両手の拳を握り、兄の顔を見つめて真剣な表情で言った。

それを聞いた兄は『そつか』と、笑った。

「本当に頑張れるか?どんな時でもだぞ?」

「うん…」

兄の質問に幼いリンは即答した。

「やつぱり、……は強いな」

嬉しそうに兄はリンの名前を呼んだ。

リンがその頃、呼ばれていた名前を。  
懐かしくて、暖かくて、切なくて悲しい思い出の溢れてくる、その名前を。

その後で、『兄さんにそう言われるなら、私はどんな時でも頑張るよ』と幼いリンが思つたのを感じ取れた。

「なら、起きなきやな」

兄の声に第二者の視点でそれを見ていたリンは『え？』と不思議に思った。

その声は幼いリンの方を向きながらも、自分に向けられていた気がしたからだ。

「お前は起きなきやいけない」

リンも、幼いリンも「どうして？」とは問わない。

「なあ、……。もしお前が困難に直面したとしても、俺は助けてやれない。だって、それはお前の人生の、お前の問題だからな」

どこのか悲しそうな表情で、兄が呟く。

「でも、これだけは覚えておいてくれ。もしも前が

兄が何か喋るが、ふつりと音が途切れた。

『別れが近いんだ』と直感的にリンは思った。

声は届かないだろうが、最後にリンは言った。

「どんなに困難でも、あたしは頑張るよ」

その言葉を発した瞬間、空氣みたいな水の中から浮き上がるような感覚を覚えた。

誰かに起られるとこでコンは覚醒した。

『何か夢を見たような気がする』と思つたが、記憶が曖昧で思い出せなかつた。

辺りを確認しながら、ゆっくりと身を起こす。

パグフイ達の姿も、リオレウスの姿も見えない。

だが、まだどこかで戦っていると感じた。

「つ……！？」

突然、激しい痛みに似た発作的な恐怖が全身を襲い、リンはうずくまつた。

彼女は怯えていた。

逆鱗に触れられたりオレウスと田が合い、攻撃を受けた際に圧倒的な力の差を知り、一瞬でも死を感じたことが怖かったのだ。

親とはぐれた幼い子供のようにガタガタと震え、助けを待つようにじつとしていた。

（今、今なら……逃げられる）

リンは一瞬だけでもそんなことを考えてしまった自分を呪った。

だが、『助けに行け』という思いとは裏腹に恐怖は更に募り、重くのしかかつた。

目に涙が滲み<sup>にじ</sup>、唸りながら頭を抱えて荒い呼吸を繰り返した。

その時、ふと頭の中に“困難”という言葉が浮かんだ。

なぜそんな言葉が浮かんだのかわからなかつた。

そして次に“頑張る”という言葉が浮かぶ。

“困難”に対して“頑張る”。

『なんて幼い発想だね!』とリンは思った。

しかし、その“頑張る”がとても力強く感じられ、勇気づけられた。

頭を抱えていた両手を胸にあて、深呼吸する。

呼吸を繰り返すうちに、手の震えが治まってきた。

(大丈夫…大丈夫。あたし、まだ頑張れる)

リンは心中で自分を励ました。

ゆっくりと、少しずつだが、立ち上がった時には全身の震えは止まっていた。

その時、巨大な爆発音が聞こえた。

その音を聞いたリンは一瞬驚愕したが、それが何の音なのかを察すると迷わずその方向へ走り出した。

Gandu...  
 ガンドウイル。

お前は騎士に憧れてたよな。

でも、俺達は貧しい村の生まれで、騎士になるための教育なんて受けられなかつた。

だから、あるハンターが特例で騎士になつたとき、お前は『ハンターになる』つて言い出した。

俺には元々目標なんかなかつたし、お前と一緒にいるのは楽しかつたから、俺もハンターになることにした。

所詮お前ほどの意氣込みがあつて始めたことじやなかつた。

それでも、お前は『一人で騎士になろう』つて言つてくれた。

その時初めて俺にも夢が出来たんだ。

『絶対、お前と一緒に騎士になる』つて。

なのにお前はもういない。

もう一人で誓つた夢は叶わない。

正直、これからどうすればいいかわからなかつた。

ただ、俺達の夢をボロボロに破壊したことだけは許せなかつた。

それが、このザマだ。

悪い、ガンドウイル。

お前なら』お前だけでも騎士になれ』って言つてくれただろうな。

『めんな。

長い道を抜け、そこにたどり着いた時、リンは必死に辺りを見回した。

降り出した雨に多少だが視界が遮られ、それが疎ましかった。

その中、ジエインとクリフが倒れているのを見つけた。

息は、ある。

確かめたわけではないが、体がかすかに動いたため、確信に近かつた。

(パグフイは…！?)

辺りを見回す。

視界の中に、樹齢何百年と言われる大木に頭を押し付けているリオレウスの姿が映った。

最初の内は何をしているのかわからなかつたが、リオレウスが二、三歩後退ると、理解した。

その大木にリオレウスの頭部で押し付けられていたパグフィの体がずるりと地面に落ちた。

「パグフィ……っー！」

リンは自分の声が震えているのがわかつた。

その言葉にパグフィは返事をしない。

だらりと頭を垂らし両の手足を人形のように投げ出した形のまま、ぴくりとも動くことはなかつた。

リンの中で、何かが崩れる音が聴こえた。

気が付くとリンはリオレウス目掛けて走つていた。

何か叫んでいたかもしれないが、衝動的だつたためにリン自身も理解出来ていなかつた。

リオレウスの脚にリンの右手に握られていた剣が突き刺さる。

ただ意表を突いたから、というだけではなく、そのリンのスピードは今のリオレウスの反応が追いつかないまでに素早かつた。

火竜が苦痛に呻く。

これが逆鱗に触れて以来、初めて成功した攻撃だった。

が、次の瞬間には巨大な尻尾がリンの腹を撃つていた。

抗うことの出来ない強大な衝撃にリンは為す術もなく虚空を舞い、受身も取れず無様にも地面に全身を打ち付けた。

「つ……ああ……つ……！」

強烈な痛みが全身を襲い、それとともに押されていた恐怖が溢れ出した。

（痛い……怖い……つ）

自分よりも戦闘経験がある三人が倒れたのに、一人で何ができるだろ？

そんな考えが頭をよぎる。

リンは痛む腹部を押さえて胎児のように体を丸め、痛みと恐怖を必死に堪えようとしていた。

『頑張る』

頭にその言葉が浮かんだ。

『頑張る』

何度も反芻する。

「頑張……る」

その言葉を口にする。

だからといって、全身の痛みが消え、力が漲るわけではない。

しかし、不思議と恐怖が薄らぎ、リンは涙を堪えて立ち上がりつとした。

『なあ、……。もしあ前が困難に直面したとしても、俺は助けてやれない。だって、それはお前の人生の、お前の問題だからな』

無慈悲にも、リオレウスがリンに向け火球を放つた。

『でもな。これだけは覚えておいてくれ』

雨の中でも全く威力が衰えることのない火球がリンに迫り、もはやなんとか立ち上がったところで回避出来るとは到底思えない。

『もしあ前が自分じゃない、誰かのために頑張って、それでもどうしようもないって時は……』

それでもリンは諦めなかつた。

全身の力を振り絞り、迫り来る火球を睨んだ。

『その時は…』

『その時は、きっと、俺が助けに行くからな』

爆発音が響いた。

黒煙が目前であがり、雨に流されるように消える。

火球がリンに届くことはなかった。

突如現れた人物がその攻撃を防いだからだ。

リンは目の前の人間を凝視した。

それが誰だかわかっているのに、その背中に兄の面影をみたような気がしていたのだ。

そんなリンを、まるでリオレウスが目に入っていないかのように“元アッシュ”は振り返る。

二人の視線が交わった。

瞬きをするのも忘れたかのようにな、じっと見つめあつた。

それはほんの数秒、いや、もっと短かったかも知れない。

だが、一人はそれがまるで時間が止まっているかのように永く感じていた。

ふと、リンは何か言い掛けた。

何と言おうとしていたのかは本人にもわからないが、何か言わないといけない気がしていたのだ。

が、アッシュも何か言おうとしているのを察するとすぐに口を閉じた。

当のアッシュはここに来るまでの間、リンに何と言つか考えてはいなかつた。

それに、今この場で何かを伝えるには場違いかもしれない。

しかし、それでも彼に迷いはなかつた。

きっと、これから紡がれる言葉こそが彼にとって今、伝えるべき本当の気持ちだから。

ゆつくりと、アッシュの口が開く。

「リン、『めんな』。一緒に帰ろう」

真剣な表情だったアッシュの口から紡がれたのは、そんな日常的で陳腐な言葉だった。

いつもの、どこか頼りない雰囲気の、どこか頼りない表情のアッシュ。

たまにかかる喧嘩の後のように、どこかバシの悪そうな表情で『『ごめん』とこひと言葉。

なんら変わらない、いつものアッシュだった。

この状況で、どんな名前を吐くのかと思っていたリンは拍子抜けした。

いや、リンでなくともいいだろ？

『「ほそな時くらいいカッ！」近く決めなさいよ』

リンはそう文句でも言つてやるつかと思つた。

だが、やつぱり口を開いたものの、その言葉は出て来なかつた。

アッシュの言葉がリンの胸の中で燃する。

その何気ない言葉が、飾り気のない単純な言葉が、じわじわと胸の奥に熱を持つて広がつた。

彼はこの言葉にどれだけの意味を詰め込んでいたのだろう？

それを考えた時、リンはその暖かさに気付いた。

いつしかリンはその顔をくしゃくしゃにして、涙を溢れさせながら何度も頷いていた。

そして、文句を言つてやろうとしていた口が、言葉を紡いだ。

うん…。一瞬に、帰ろう、と。

火竜は一人の様子をじっと見つめていた。

なぜそうしていたのか自分自身を不審に思つてもいたが、自分を前にして背を向ける人間のことの方がよほど不可解だった。

アッシュが振り返り、武器を構えた。

その吸い込まれるような蒼い大剣が、雨の中でも映えて見えた。

彼が自分に立ち向かおうとしているのだと知り、リオレウスは自分でも意識しないうちに牙を剥いていた。

圧倒的な力を持つ自分に何故まだ向かつて来るのか、そして何故、自分はそれを脅威だと感じているのかわからなかつた。

が、このとき火竜は確かに彼が、いや、彼らが自分にとつて“敵”だと再認識したのだ。

その理由も理解出来ないままに。

それは、そうだろう。

本能のままに生きるモンスターには、わかるまい。

仲間が次々と倒され、それでも尚立ち向かう彼らを動かす、その源を…。

戦況は未だ変わらない。

彼らは特別な力を持つ存在ではないから。

雨は、止まない。

彼らは天候を左右するような、特別な存在ではないから。

それでも、もし神という存在があるならば、この時ばかりは彼らを賞賛しだらう。

強大な敵を前にしても決して諦めない彼らは、きっと…“愚か者”ではないから。

“勇者”は放つ。

最後の、開戦の合図を…！

「ああ、いくぞリオレウス……」これが、最終ラウンドだ……！」

## 第10話 ひつまくの勇氣（後書き）

はい、どうも。『あれ？ 消えた？』と思つた方も多いと思われます。夢村です。

今回は書きたかったこともあって、かなり苦労しました。

まあ、実際何が書きたかったってアッシュの最後の台詞ですけど。ところがまあ、この話自体あの台詞が書きたいがために始まったようなものなんで、設定は行き当たりばつたりでした。

なんでも、ぼろぼろと落としたものを拾うのが大変だったり、自分の実力の無さに落胆して放置したりと色々ありました。結局前者は適当になりました。

さて、穏やかな性格の持ち主のリンが一話で「ランポス狩りたい」と言つてるとか、 Gandorwell が Gandowill になつたり、文章の書き方が何度も変わつたりと何かと不備の多いこのお話、もうお気づきの方もいるかと思いますが、そろそろ終わります。というかあと一話とヒローグだけです。

本筋的にはまだ色々とやることがあるのですが、そのことに関しては最後に書くとします。

後、この残る一話とヒローグは一気に掲載します。

でも例によつて行き当たりばつたりで落し物したのでまだ拾う方法を考えてないです。

そんなこんなでまた長い間更新しないことになつたのですが、ここ  
まで来たら絶対に最後まで書きます。

なんか久しぶりで長文書きました。

とにかく、『』の、小さな勲章を『』を最後までよろしくお願ひしま  
す。それでは。

## 第11話 決戦

昼と思えないほどに薄暗い森の中。

雨を全身に感じながら、自らが放つた戦闘開始の合図とともに、アッシュは駆け出していた。

リオレウスの反応が少し遅れ、先制をとつたつもりだったが、彼は数歩駆けたところで即座にぬかるんだ地面を滑りながら停止した。目にリオレウスの大木のような尻尾が鞭のようにしなりながら迫るのが映ったかと思うと、次の瞬間には轟音が響いた。

(う、早い……！)

昨日とは明らかにスピードが違うこと一瞬で悟る。

反射的にマカライトソードで受けたが、その勢いを殺しきれず地面をえぐる。

「だあああっ……！」

同時に、リンが火竜の死角から飛び出し、気合とともに高速の突きを放つ。

しかし、リオレウスはその攻撃に野性生物の勘といえる感覚で反応していた。

火竜はその巨躯をものともしない速度で回避。放たれた突きは虚し

く空を裂く。

攻撃を空振りしたリンは無防備だったが、アッシュの大剣を警戒した火竜は彼女を狙うことはず、素早く前方に跳んで距離をとる。

「うう……」

「リン……」

翼による激しい風圧にリンが吹き飛ばされるが、土をぶちまけながら旋回するリオレウスの眼光はアッシュを捉える。

その瞳はもはや、自分の領域を侵されることによる怒りなど微塵もなく、あるいはただ目の前のハンターに対する殺意だけだった。

その眼光に動じることなく、リンが狙われる心配は薄いと感じたアッシュはすぐさま迎え撃つ姿勢をとる。

が、停止するのとほぼ同時に突進を開始した火竜のスピードは、彼の常識の枠を超えていた。

鈍い金属の音が響く。

「が……！」

何とか防いだものの、ぬかるんだ地面では踏ん張りきれず、そのまま押されて大木に思い切り押し付けられる。

リオレウスはなおも頭を押し付け、アッシュの体を圧迫する。

「お・・・おおお・・・っ……」

渾身の力を籠めて押し返すと、不意に押さえつけっていた力が消えた。

突然のことニアッシュの体が前のめりによろめく。

(しまつ……！？)

バキバキと木の折れる音が耳に届くが早いか、アッシュの脇腹に激痛が走った。

リオレウスは片足を軸に回転し、木をなぎ倒しながら攻撃を仕掛けたのだ。

地面に何度も全身を打ちつけながらもなんとか受け身を取るが、片膝をついてその場で数回咳を繰り返した。

ほとんど無防備だったため、脇腹のダメージは動作に影響を起しきれないほどだったが、嫌な汗を流しながらも極力考えないよう努め、すぐに大剣を構える。

(長期戦はマズイな…)

「アッシュ！」

「…」

アッシュが息を飲み、腰のポーチに手を伸ばした時、すっかり泥だらけになつたリンが息を切らしながらアッシュの隣に並んだ。

双剣を構えたことから本人はまだ戦つつもりだろうが、しかし、彼女の体力は限界に近いはずだった。

その証拠に、荒い呼吸を繰り返し、雨のせいなのか、意識が朦朧ともうろうしているのかはわからないが、構えた双剣を落としそうになる。

にも関わらず、アッシュが来たことによってその表情にはどこか高揚しているのを見て取れた。

健気とも言えるその姿を見たアッシュは、居たまらない気持ちになる。

極力、彼女の顔を見ずにアッシュは口を開いた。

「リン。…後は、俺に任せてくれ」

「え……？」

突然のこと、リンはすぐに反応が出来なかつた。

何が起こったのかわからぬような表情でアッシュを見つめるが、彼が彼女を見ることは無かつた。

「…頼む」

リンはその言葉がどういつ意味であるか察すると、同時に胸が締め付けられるほど寂しさを感じた。

彼なりに気遣つて言ったことなのかも知れないが、リン自身は自分が足手まといであることを認識せざるを得なかつた。

アッシュは意識的に彼女の気持ちを考える事をせず、ポーチの中の“元々は三つあったが、残り一つになった瓶”の内、一つを取り出した。

現時点では既にこの薬を服用していた。

(まだ… 一つだけじゃ力が及ばないらしい…)

思いながら、アッシュは村長の言葉を思い出した。

「アッシュ、お主に“鬼人薬”の作り方を教えよう」

村長がそう言つてきたのは、数ヶ月前のことだった。

正確にはそんな台詞ではなかつたはずだが、とにかく急なことにアッシュは呆然としていた。

夢遊病患者のようにふらふらと現れた老人は『いつか来るかもしれない時のために』と、明確な理由も語らず調合の方法をアッシュに伝授し、次に簡単な注意事項を説明し始めた。

「これを使う際に注意することじゃが、まず一つが“絶対に一気に飲み干さないと”じゃ」「やあ…」

「はあ…」

何が何だかわからないアッシュは、しかし、ちゃんと村長の説明を聞いていた。

「この薬は服用した者の能力を飛躍的に向上させる。が、一気に飲んでしまつと身体がその力についていけずに身を滅ぼすことになる。小瓶に三等分に分けるのが良い。よく覚えておくことじや」

いつものアッシュならば、『そんなヤバそうな薬なんて願い下げです』と丁重に断つただろうが、この時の村長の真剣さが、そのまませなかつた。

「一つ目の注意は、少し時間を置いて飲むこと』じゃ。理由は先程と同じじやな」

村長の言葉にアッシュが頷く。

「じゃが、実際にはさほど時間を空ける必要はない。身体がその状態に慣れるまで、ほんの一、三分ほどでいい」

さらにはアッシュが頷くと、村長は続けた。

「そして最後の注意じゃが……全て飲み干すという状況は避ける』

その言葉に、アッシュがびくつと反応した。

先程思つたことと同じ疑問が頭をよぎつたが、辛うじて留めた。

「んむ、こわさか脅しが過ぎたよつじやな。極力じや、極力」

そう言い直した村長の言葉に、アッシュが『そりですか』と呟つねずもなかつた。

『村長…』と軽く拳手して呼び、返事を待たずに質問をする。

「村長は、これを全て飲み干したことには…？」

「ない」

即答した後、村長は『じゃが』と続けた。

『“飲み干した者の末路”を知つておる』

その時、村長の口から紡がれた、その重苦しい言葉が“飲み干した者の末路”を暗に語つていた。

「まあ、それを無理に使う必要は全くもつてない。使う際はよく考えてくれ。ではな」

その日、村長はそれだけ言つと身を翻して出て行つた。

(あの時は『なんで俺に?』と問い合わせたかったが、今ならなんとなくわかる)

あの時、村長は既にアッシュのことを中心として、そして、こう

いつた時のためにこの薬の作り方を伝授したのだ、と。

アッシュは即座に小瓶のフタを外し、一気に飲み干した。

そして、間もなく“力”は溢れた。

その代価を恐ろしく感じるほどの“力”が。

心臓の鼓動と共に全身に“力”が脈動する。

炎のような鬪氣が全身から溢れる。

同時に、彼は今の自分がかつてのガンドーウィルと同じ状態にあることに気が付いた。

彼ほどのハンターでも、少なからず重く感じる大剣が嘘のように軽い。

その腕は全力で剣を振るいたがり、両足はその脚力の限界を試したがっているかのようだった。

熟練の双剣使いが使いとされる“技の鬼人化”とは違う“力の鬼人化”。

単純な筋肉の増強などとは違う、例えようのない“力”が、自分で目覚めたことを、アッシュは感じていた。

一つ前の瓶の時と比べると想像を絶するほど変化に、彼は少なからず恍惚としていた。

目を見開き、駆け出した数瞬、距離をとつていたはずのリオレウスの姿が目前に迫る。

アッシュはそのあまりの感覚の短さに一瞬物足りなさを感じた自分に気付いた。

身を裂かれる風の悲鳴を耳にしながら、鉄の塊と言える大剣とは思えないほどの猛スピードでの剣撃を連続で浴びせる。

突然の変異に、リオレウスにも少なからず逡巡があった。

火竜は受けに回るが、その反応速度も脅威的だった。

不意を突かれたにも関わらず、リオレウスは翼をまるで腕のように器用に使い、翼爪でアッシュの攻撃を受ける。

火竜の翼爪は、並みの武器では弾かれるどころか、折られる危険性もあるほど硬度を誇る。

しかし、ディールが言うだけのこともあり、マカライトソードの切れ味は鋭く、その上に今のアッシュの腕力をのせた一撃は翼爪を難なく粉砕した。

その表情に驚愕の色が見て取れるほどに、火竜は怯む。

だが、それも一瞬のことだった。

驚くべきことに、火竜はアッシュの一撃以降を見切り、地面と水平に放たれた大剣を後方へ跳躍して避け、間合いを詰めて垂直に振り降ろされた攻撃を人間がそうするように身体を最小限にずらし、

次々とアッシュの攻撃を回避した。

それどころか、ほんの数秒の後にはアッシュが隙を見せようものならば即座に反撃を繰り出すほど攻撃に慣れていた。

どちらも回避能力は凄まじく、一撃たりとも当たることはない。

その戦闘を見つめていたリンの頭の中に“この状況に似つかわしい、場違いな言葉”が浮かぶ。

“舞い”だ。

彼らは“舞っている”のだ、と。

生死を分かつ戦いの中、まるで示し合わせたように、踊るような攻撃と回避の動作を続ける。

その光景は実に幻想的なものに思えた。

だが、それは神聖であるとか、華麗であるといふ言葉とは結びつかなかつた。

アッシュの一撃が大木を薙ぎ倒し、リオレウスの火球が岩を碎く。

直撃すれば即死に至るであろう威力をもつ一撃が破壊を生む。

だが、彼らを止めることが出来る者はいない。

常人では決して踏み込めないと思えるほどの荒々しい空気が、その場にはあつた。

そんな中、リンは“舞う”アッシュの口元に笑みが浮かんでいるのを見て…戦慄した。

動作が速過ぎて正確に捉えたわけではないが、その横顔はこの戦闘を心から楽しんでいるように見えた。

アッシュは、最低でもリンの知る彼はこんな戦闘を楽しむような人間ではない。

(止めないと…！！)

発作的に、リンはそう思った。

しかし、抑制の欠片もない壮絶なこの戦いを第三者が介入し、止められるとは思えない。

いや、それ以前にリンは両足が震えて、彼らを止めようと一步踏み出すことも出来ないのだ。

火竜の猛々しい咆哮に、リンが我に返った。

思考するよりも早く、視界を巡らせ、戦況を確認する。

実力はほぼ互角だが、双剣使いであるリン以上の速度で反撃の隙をほとんどつかせないアッシュの方が少しだけ優勢だつた。

リオレウスが、鬼人の如く繰り出されるアッシュの猛攻に一步後退る。

(もらつた……)

アッシュは、リオレウスのわずかな隙を見逃さなかつた。

大剣が地を滑走し、無防備な火竜の首を捉える……。

が、突如として、今まさに火竜の首目掛けて大剣を振るわんとするアッシュの身体が金縛りにあつたかのように動かなくなつた。

アッシュ自身、何が起つたのか理解出来なかつた。

額から嫌な汗が流れる。

『動け』と念じるよりも早く、吐き氣を催すほど<sup>もよお</sup>の疲労が全身を襲つた。

氣を抜けばその場に倒れこみそうになり、渾身の力で耐えた。

最初、鬼人薬の効果が切れたのかと思ったが、そうではないと氣付く。

(まさか…強走薬、か……!…)

アッシュがここへ向かう途中で使用した、一時的に肉体の疲労を無視することの出来る強走薬。

その効果が切れた途端に今まで蓄積された疲労が彼にのしかかつていたのだ。

これは、普段こういった薬を使用しなかつたために、効果が持続す

る時間と、その反動の大きさを知らなかつたアッシュの誤算だつた。

隙を突くはずが、逆にリオレウスにその隙を突かれた。

唸りながらその巨大な口腔を開く。

(まぢい…！…)

この至近距離で直撃を受ければ跡形も残らない。

身体が否認する暇を「えず、火球が放たれるよりも一瞬早く動く。

至急距離で爆音が響き、超高熱が肩を撫でる。

「ぐつ…ああ…つー！」

あまりの熱に氣を失いそうになるが、氣力で保つ。

(まだ…つー)

薄れるというよりは落ちてしまいそうな意識に鞭を打ち、リオレウスの脇を抜けて後ろに回り込み、安堵してほんの少し氣を抜いた瞬間に、今まで以上の疲労と脱力感がのしかかった。

このままでは一方的にやられるのは目に見えている。

そう考えた時、アッシュは自分でも気付かないうちにポーチの中にいる、最後の小瓶を取り出していた。

村長の言葉が脳裏をよぎる。

迷いがないわけではなかつた。

だが、じつくりと考へてゐる暇はない。

数瞬の内に、昔からあつた自分の中の後ろ向きで考へすぎる自分が語りかかる。

鬼人薬を全て飲んで大丈夫か？

強走薬も使つた。

時間は？体は今の状態になじんでいるのか？

全ての行動を慎重に。失敗を恐れて行動をためらう自分。

うんざりだ。

その言葉が頭をよぎつたかと思つと、次の瞬間…。

アッシュは鬼人薬を一気に飲み干してゐた。

その時、視界の端にリンの姿を見つけた。

もしかしたらこの薬の危険性に気付き、止めようとしたのかも知れない。

『だつたら後で怒られるかな』と思いながら、アッシュは心の中でリンに語り掛けた。

(これが終わつたら、また、この前みたいに皆で騒ぐつな…)

更なる“力”の奔流が身体を巡つた。

“力”を具現化した鬪氣が膨れ上がる。

リオレウスすら小さな存在と感じずにはいられないほどの圧力が、その鬪氣にはあつた。

火竜がその存在を脅威と感じ、それを払うようにして牙を剥いて襲いかかつた瞬間。

だが、完全な鬼人化を果たしたアッシュはそれよりも速く動くことが出来た。

一閃。

目にもとまらぬ速さで一撃を繰り出したアッシュは、大剣をぴたりと止め、攻撃を終えたままの姿勢で硬直していた。

一息ほどの間。

遅れて、思い出したかのようにリオレウスの右脚が吹き飛ぶ。

「が、は…っ…！」

バランスの保てなくなつた火竜が崩れ落ちると同時に、硬直したままだつたアッシュが吐血し、方膝を着いた。

(外し、た…っ…！)

リオレウスは倒れ、苦痛の咆哮をあげながらも、血走った眼で目前のハンターを完全な殺意を籠めて睨む。

アッシュもすぐさま立ち上がり立つた。

頭にもう一撃振り下ろせば確実にとどめを刺せる。

だが、アッシュの体は動かなかつた。

遠い。

彼の目には、今の光景がどこか遠くで起きていくことのようだつた。

呼吸の息苦しさも、軋む体も、次第に何も感じなくなつて来ていた。

(もう、限界、か……)

アッシュは全身から力が抜け、視界が薄らぐのを感じたが、彼の中に後悔はなかつた。

片脚を失つた火竜ならば、村のハンター達がなんとかしてくれるだろ？。

彼は、ここで力尽き、村の危機を救つた影の英雄として、ほんのわずかな間だけでも村長の昔話として語られるのも悪くはないと思つていた。

だが、その考えは数秒の後に消え失せた。

「アッシュ」

聞き慣れた声が名前を呼ぶ。

名前。“アッシュ”といつ名前。

(俺の…?ああ、“俺”の名前だ)

その声に、アッシュは夢から醒めたように彼女の顔を瞳に映した。

気がつけば、彼の隣にはリンの姿があった。

「アッシュ…！」

リンの悲痛な声に『起き上がりなくては』と思つが、体が動かない。

全身の感覚がなくなりかけている。

「あたしと一緒に、帰るんでしょ…？」

「…っ！」

消えかける意識の中で、彼女の言葉はアッシュの胸に深く響いた。

(そうだ。帰るんだ。リンと一緒に…)

『たった数分前の約束を忘れるなんてな』と自嘲気味な笑みを浮かべて、不思議なほど自然にアッシュは立ち上がった。

その時、倒れた火竜が一人に向けて巨大な口腔を開いた。

アッシュは咄嗟にリンを突飛ばそうとするが、彼女は臆することなく、リオレウスを真っ直ぐに見据えていた。

爆音が反響する。

しかし、それは火竜から放たれたものではない。

むしろ、リオレウスの口からは苦痛の咆哮が発せられただけだった。アッシュは、わけもわからず、リオレウスの片目を潰した物が飛來したと思われる、爆発音のした方へ顔を向けた。

「まあ、狙いバツチリね！」

「バカ言え！俺を誰だと思つてやがる！」

はしゃぐオカマと無愛想なオヤジ。

アッシュの視線の先には、火竜に片腕を折られたクリフと、彼の代わりにボウガンを構えるジェインの姿があった。

それでもアッシュを狙おうとするリオレウスに、続けて疾風の如く現れた影が火竜の腹部を突き刺した。

「どうやら、まだ俺は Ganduyl のここに行くわけにはいかないらしいな……っ……」

陽気で楽観的なくせに、どこか堅実な戦士。

次にアッシュュの目に飛び込んだのは、リオレウスの胸にガンランスを深々と突き刺すパグフィの姿だった。

彼は喋り終えると同時にトリガーを引き、零距離で爆発を受けた火竜の咆哮には、もう空の王たる猛々しさはなかつた。

「嘘……！」

不意に、アッシュュは何故リンが動じなかつたのかを理解した。

火竜の頭が一人の目前に倒れこむ。

まだ息があり、一人を睨む。が、それだけだつた。

もはや抵抗が無駄であると悟ると、リオレウスは頭部を差し出すような形でアッシュュを見つめていた。

それは、戦闘の終わりを意味する。

「アッシュュ！」

パグフィの声が響く。

それに対しアッシュュは頷いて返す。

言わざとも、やるべきことは理解出来た。

だが、今の彼には到底大剣を振り下ろすほどの力は残つていなかつた。

「ねえ、アッシュ」

「…ん？」

友達を呼ぶ時のような自然な声に、アッシュもつられて至つて自然に聞き返してしまつていた。

「手、貸したげようか？」

少し意地悪な笑みを浮かべて、リンが問いかける。

その笑顔が眩しいほどはつきり見えたと思つた時に初めて、既に雨が止み、空には太陽が雲の隙間から覗いていることに気がついた。

「…ああ、頼む」

リンはアッシュの言葉に満足そうに頷くと、マカライトソードの柄を一緒に握つた。

「頼つてね」

リンが呟くよつて言ひ、アッシュの返事を待たずに続ける。

「確かに、あたしは足手まといになることもあるけど……それでも、一人じゃどうしようもない時は、あたしを…皆を頼つてね」

顔を合わせず、リオレウスを見つめるリンに、アッシュは頷く。

「ああ」

答えてアッシュも火竜に向き、彼の目付きが変わる。

「いぐぞー・リンー！」

「了解つー！」

一人が大剣を持つ腕に力を籠めるのを感じた火竜は、それでも尚、二人から視線をそらすことはしなかつた。

ただ、最後に彼らを賞賛する言葉を持たないことを惜しむようにして、ゆっくりと、その瞳を閉じた。

皆がその場から動かなかつた。

正確には、戦闘の終わりを知った者達は、皆その場に座り込み、その後は口々に勝利したことを呴いたり、全身の疲労を訴えていた。

アッシュとリンも、座つたまま長いことボーッとしていたが、不意にリンが立ち上がつた。

「アッシュ」

「んー……？」

呼ばれ、アッシュがだるそうにリンを見る。

彼女はそれ以上何も言わずに、右手の防具を外した。

アッシュは最初、呆然とした表情で彼女を見ていたが、理解すると自分も同じように防具を外し、ふらふらと立ち上がった。

笑みを浮かべる彼女につられて弱々しく笑いながら歩み寄る。

頭よりも上に高く上げられたリンの右手を遠慮なく叩こうとして…失敗した。

アッシュは、リンの右手を見失い、視界がぼやけたかと思つと、すぐ周囲から音が消えた。

辛うじて、自分が倒れたことに気が付いたが、それ以外は何も感じなかつた。

意識が深い闇に落ちていく中、泣き虫なリンがまた泣いたりしないかが心配になつた。

## 第1-2話 これから

「あだだだつ」

「ほら、やつぱりまだ休んでた方が良かつたじゃない」

痛みを訴えるのはアッシュ。彼に対し、呆れた声を出すリン。

「アッシュちゃん、帰つたらゆづくつ出来るんだから我慢しなさい」「リンの肩を借りて歩くアッシュの前で、ジェインが子供を諭すように言ひ。

『『もう大丈夫だから帰ろ』』って言い出したのは、おめえだらうが

そういうクリフは、アッシュの事など全く気に掛けていないようだつたが、彼を知る者から見れば十分に気遣つてている方だった。

……アッシュが倒れた後、皆が彼の元に駆け寄つた。

皆が心配するなか、彼には息があり、倒れたのは過労によるものだとわかつた。

それから一日をテントで過ごし、今朝起きたアッシュは全身筋肉痛の状態だった。

「それにしても、お前、本当に大丈夫か?」

アッシュの隣で歩いていたパグフイが、訝し気に顔を覗き込む。

「なにが？」

「…いや、悪いけど、俺はてっきり、お前が死んだんじゃねえかと思つてしまつたよ」

パグフイは言つた後で、リンから全力で睨まれている間に、田をそらした。

「…ああ、確かに俺自身そう思つてた」

アッシュがそう口にするとい、リンが今度は驚いたのか、悲しいのか複雑な表情になつた。

そんな彼女を見て、『感情の豊かな奴だな』と思ひながら微笑む。

「いや実際、腑に落ちない点もあるんだよ」

「…どんな？」

「俺は、あの薬の作り方を村長から教わったんだけど、村長は『全部飲むことは避ける』って言つてたんだ。だから、てっきり全部飲んだら死ぬのかと思つてた」

「…」

リンは、その言葉に驚愕したようだったが、彼女以外はそれほど驚いていないようだった。

「なんで、そんなもの……。」

今にも怒鳴り付けそうなるリンゴ、アッシュは…

「…まあ、いいじゃないか、生きてたんだし」

と、笑いながら言つと『よくないー』とリンゴから一撃をもひこ、悲痛な呻き声をあげた。

そのアッシュを珍しい物でも見るよつにしていたのは、ジョンとクリフだった。

「…なんだか、アッシュちゃんらしくないわねえ」

ジョンが言つと、クリフも頷いた。

「てつきつ、いつもみたく暗い顔して詫びるのかと思つてたがな」

「…俺、そんな感じの奴だった?」

誰にともなく放つたその問い掛けに、少しの間を置いた後、付き合いの短いパグフィーをも含めた全員が頷いた。

あまりの一一致団結に反論出来なくなつたところで、ジョンが口を開いた。

「でも、良い変化よね」

そう笑つて、クリフが『だな』と肯定する。

するとアッシュは、今度はなんだか少し照れ臭くなつて、結局何も言えないでいた。

それから少しの間歩き続けると、珍しくクリフが口を開いた。

「なあ、おめえら、逆鱗にまつわる昔話を知つてるか？」

クリフの予想通り、その質問に頷く者はいなかつた。

「リオレウスとかの一部の飛竜には、逆鱗てもんがあつて、それに触れるとブチ切れちまうんだよ」

言われて、アッシュ以外は思い当たる節があつた。

「あの、明らかにリオレウスの様子がおかしかつた時、やつは逆鱗に触れられてああつたんじゃねえかと思つ」

そこまで言つて、クリフは一呼吸置いた。

「だが、あのリオレウスは多分、今まで逆鱗に触れられたことはなかつたんだろうな。変化はあつたがぶちギレたわけじゃねえ」

アッシュだけが何の話かわからずに戦の顔を見比べていたが、クリフは気付いてないのか、構わず続ける。

「それじゃ昔話と違つ。こ、してもだ。もし逆鱗に変化をもたらす効果があるなら、あれに触れないに越したことはないってのは事実だ」

そこで、ようやくアッシュも自分が感じたりオレウスの違和感のこ

とを言つてゐることに気が付く。

「で、だ。もし俺らが逆鱗のことを誰かに伝えるとしたら、昔話と同じようにぶちぎられて暴れ回るってような事を伝えた方がいいだろ?」

全員が少しの間考えて、頷く。

曖昧な真実を伝えて好奇心をあおるよりは、嘘でも好奇心がわからなくなるようにした方が良いと考えたからだ。

「で、話は戻るが、アッショ。村長が『絶対に飲み干すな』って言ったのは、それと似たようなことなんじやねえのか?」

「……」

言われて、アッショは考えてみた。

鬼人薬がもたらす反動は彼自身が体験してわかっている。

飲み干したところで死ぬことはないとはわかったものの、だからといつてこれから先、似たような、あるいはそれ以上の危機が押し寄せた時、その度に鬼人薬を飲み干していくは、確実に身を滅ぼすだろ?。

『せうさせないために、村長はあんなことを言つたのでは?』と考えると、納得出来た。

そう考えると、最初の瓶の時点ですう言える。

(それに、あの“力”…)

アッシュがあの時感じた“力”。

あの、何者をも超越したといつ錯覚すら覚えるほどの中高揚感。

もう一度あの感覚を得たくなり、その誘惑に負けたのなら……。

どちらにしても答えは似たようなものだった。

「まあ、いいか。過ぎた事だし」

アッシュは言つ。要するに考えるのが面倒になつただけだが。

「…そうだな」

それからは、疲労からか全員しばらく黙つて歩いていふと、いつの間にかアッシュと、彼に肩を貸すリンが最後尾になり、皆から少し離れていた。

(もしかしたら氣を使つてくれたのか…?)

『リン以外、誰も肩を貸そとしなかったのは俺の人徳がないからじやなかつたつてことかな』などとを考え、隣のリンに声を掛けた。

「何?」

リンと目が合つ。

「…お前さ、これからどうするんだ?」

「どう、ついて？」

「ああ、いや、出て行けなんて言つたじやなくてだな」

少し不安気に問い合わせるリンに、弁解するように言つてから、質問を続ける。

「お前がハンターになつたのって、リオレウスを倒すためだつたんじゃないのか？」

アッシュは直接リンにそう聞いたやわけではなかつたが、リオレウスという名を聞いた時の彼女の反応を見て、そうではないかと思つていた。

そして、それを達成したのならば、もうハンターである必要はない、とも考えていた。

「リオレウスを……？」

リンは首を傾げて考えていたが、それを否定した。

「いや。確かにリオレウスに恨みがないわけじゃないけど。でも、あたしの目的は別。そんな事じやない。それに……」

「それに？」

「色が違つた」

「色？鱗のか？」

アッシュは『まさか』と思つた。

大型のモンスターの中には、皮膚や鱗の色が違ひ、亞種と呼ばれるタイプのものがいる。

そして、それらは本来の飛竜よりも戦闘能力が高いと言われていた。リオレウスにも亞種が存在し、鱗は青い色をしていると、アッシュは聞いていた。

「青だったのか？」

アッシュがおそるおそる尋ねると、ロンは…。

「いや、銀色だった」

と、否定した。

「銀？」

はて、とアッシュは首を捻つた。

(そんなやつは聞いたこともないな…)

「でも、いいの。それはあたしの目的じゃない」

アッシュの思考を妨げたリンは、ビック遠くを見るよつて言つた。

「あのリオレウスに何か特徴があつたわけじゃないから、どれがそうなんてわからないし…何より、復讐は…悲しいだけだしね」

「…」

その言葉にすぐには反応出来なかつたアッシュは、かろうじて『そ  
うか』と口にした。

きつと、この言葉をパグフイが聞けば、彼は頷くだろう。

それは、リオレウスを倒した後の彼に、どこにも満たされた様子が  
無かつたことからわかりきつていた。

「あたしはね、人を探してゐるの

「人？その人もハンターなのか？」

「うん」

「アッシュの目的は？」

アッシュはリンの探している人物の名前を尋ねようとしたが、その  
前に質問をされた。

「俺は……」

答えるのに少し間があつたのは、先程の彼女の言葉のせいかも知れ  
ない。

「俺は、ある人のために有名になるんだ」

「ある人？…恋人、とか？」

「いや、会ったこともない」

「なにそれ、変なの」

「変、か。そうだな」

不思議そうに顔を眺めるリンに、アッシュは自嘲氣味に笑つた。

しばらく黙つて歩く。

『とりあえず、今回はこれまでだな』とアッシュは思った。

お互い、これ以上質問すれば、必然的に“過去”が出て来ることになる。

そして、二人はまだ、それを語るのをためらつている。

焦る必要はない。少しずつ、知つていけばいい。

そう思つて、二人はその話を止めた。

「これから、ついていで思い出したけど、アッシュ。それ、どうすんの？」

代わりに、とばかりにリンが問いかける。

「……」

アッシュが嫌なことを聞かれ、苦い表情になる。

リンが『それ』といつて指したのは、見事なまでに折れたマカライトソードだった。

無理な動きの中で何度も力任せに振るつたせいか、最後の一撃と同時に役目を果たしたかのように折れたのだ。

アッシュは、そのことを後で村長やディールに伝えることを思い、ため息を吐いた。

更に、当然、武器がなければ狩りも出来ない。

「何とかするよ」

『早急にな』と心の中で付け足す。

「おひ、見えて来たな！」

先頭を歩くパグフィの声に、今まで黙っていたジェインとクリフも、もつすぐ自宅でくつろげる事からか、雄弁に話しだした。

達成感からか、皆、遠足の帰りのような不思議な気持ちの昂<sup>たか</sup>ぶりを感じていた。

「あ、そうだ。アッシュ」

「ん？」

思い出したよ「ひ」、「コン」に、どうしたのかとアッシュが顔を向ける。

しかし、それに彼女は返事をしなかった。

代わりに、防具を外した右手を高く上げた。

「昨日、出来なかつたから、ね？」

友人に挨拶でもするよつにして手をあげて微笑む姿に、アッシュも釣られて微笑む。

そして、彼も右手の防具を外し、リンの掌を思い切り叩いた。

ぱあん。

周囲に響いた音に、前方を歩いていた三人が何事かと振り返り、アッシュとリンは何となく一緒にいたずらをした子供達のように笑つた。

さあ、これから何をしようか。

アッシュは、そう考へる「ことが楽しく思えていた。

## Hプローグ

一日経つて、俺達は集会所に呼ばれた。

リンと一緒に家を出て、他の三人とはすぐに合流した。

「お？なんだ、こりゃ？」

「お祝いにしては少人数ねえ」

集会所に着いた途端、パグフィイが首をかしげ、ジェインも言葉の割には興味深そうに辺りを見回していた。

少し広い酒場と同じ程度しかない大きさの集会所の中。

普段通り数人のハンターがまばらにいて、当然、受付嬢もいる。

ただ、普段と違うのは、集会所内の全員が、口々にアッシュュ達を歓迎してくれたことだった。

更に、俺達の目の前に見知った顔が並んでいた。

ディールとニーナに、朝からいないと思っていたペケ、そして村長。

全員合わせても十数人程度。確かに祝い事にしては少ない。

「ふむ、そろつたようじやな」

村長が一度、咳払いしてニーナと一緒に歩み寄る。

そして、俺の前で立ち止まつた。

その時、俺は初めて自分が先頭に立ることに気が付いた。

というか、何が起つて理解したらしい謙虚（？）な仲間達は一步下がつて意地悪な笑みを浮かべながら眺めていやがつた。

「リオレウス討伐の報告は受けたぞ。皆、よくやつてくれた」

言い終わると同時に、集会所内にハンター達の野次にも似た歓声が反響した。

恐らく、彼らはまたま居合わせただけだろうが、待ちわびたことのように暖かい声を掛けてくれた。

調子のいい奴らとも思われるだろうが、ハンターといつのはこんなものだ。

「アッシュよ。どうかこれを受け取ってくれ

村長は二ナから小さなバッジを受け取り、俺に向けて差し出した。

それは村の英雄と認められた者だけに授けられると聞いていたそれそのものだった。

それに対し、『やめてくれ』などとこう言葉が俺の口から出る」とはなかつた。

昨日、あの戦闘が終わるまでの俺なりば、そういうたかも知れない。

だが、今は違つた。

村長からバッジを受け取る。

すると、辺りからまた歓声があがる。

俺はもう一度辺りを見回した。

村人総出ではないのは、今回の件があまり公になつていないことからか、村長の気遣いからだらうか。

「勲章つてやつだね」

俺のすぐ後ろでリンが言つた。

「……勲章、か」

呴いて、その小さなバッジを見た。

「だな。小さな勲章だ」

だが、それを喜ぶ前に言つておかなければならぬことがある。

「なあ、皆、聞いてくれ」

俺が口を開くよりも早く、声をあげたのはパグフイだつた。

その口調から何かを察したのか、集会所の喧騒はぴたりと止まつた。

「俺達は今、五人だけよ…後もう一人いるんだ」

事情を知らない村長やジェイン、クリフは状況を把握できていない様子だったが、すぐに理解したような表情に変わった。

そしてそれは、職業柄か、集会所内の人々全員も同じだった。

「多分、あいつは遠慮するだろうけど、でも、あいつが一緒に戦つたのは事実だ。…良かつたら、あいつのことも讃めてやってくれねえかな」

少しの間沈黙が訪れたが、それを破ったのは村長だった。

「そりゃ……。では、皆の者。今一度、彼ら六人の功績を讃えてやつてくれ」

その言葉を合図に、集会所に盛大な拍手が響く。

皆、事情を察したはずだが、しんみりとした雰囲気にならないのは、本人のことを本当に考えてくれているからかも知れない。

俺は、その盛大な拍手がこの集会所内の人数では起こらないような大きなものだと気付き、背後、集会所の入り口に振り向く。

そこにはいつの間にか、大勢の村人が集まり、歓声をあげていた。

これは、もしかしたら村長の計らいだろうか。

同じことに気が付き、振り返っていた皆も驚きを隠せない様子だった。

「うおー、こいつの間にこんなに集まつてたんだよ」

「なんだか本当に英雄にでもなつたみたいねえ」

「くつ、よっぽど暇なんだ」

皆、口々に感想を述べるが、やはり言葉やしぐれで照れているのを感じる。

だが、俺には恥ずかしさだとかいつたものはなかつた。

それは、勲章を受け取つたのと同じ理由だ。

今回の討伐は自分の力だけで成功したわけではない。

だから、ここの勲章や称賛は俺だけの為にあるものじゃない。

『勲章なんて俺には似合わない』なんて考へる事は、むしろおこがましいほどだつたんだと気付いた。

それに、何より

ふと、振り返つたリンと視線が合つた。

彼女もこいつたことに慣れていないらしく、何を言つて居いのかわからぬ様子で、照れたような笑みを俺に向けた。

不思議なことに、こいつの顔を眺めていると、未だ会つたこともない女性の姿が浮かぶようだつた。

そうだ。何より、俺の目的は有名になることなんだ。

長い間、忘れるよつこじて逃げていたが、これは新しく踏みしめる  
一步になるんだ。

だから

例え、これが歴史に残るような偉業といつぱいのものでなくとも。

今、この時だけは…

誇りつ。

この、小さな勲章を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5051c/>

---

この、小さな勲章を

2010年10月9日04時03分発行